

青砥宏一遺歌集

青砥通信鈔





昭和四十七年八月十四日

島根県八束郡玉湯町玉造

青砥 光一

諸大兄

殊暑脚見舞申上げます

諸大兄益々御清神の趣大望に存じます。去る阿蘇に於ける  
学生青年会前敵空御参加御苦勞様ごありました。おのれの  
色々な思ひを托りて山を下りられた事と存じます。おの  
彼方には念痛は終った様を感じてあります。か講師先生の云  
葉友らの親が次々と浮んで来ます。御会へ来られ、林縁呼ば  
越え水花視忘れ得ぬ云葉之を大塚にし、お互に呼ばかは  
して、生きとゆき度々思ひます。

七月四日—五日

のアンカレリダより世愁とを感バハリへ

カラ木の林の中に家居する人のなりはひしぬびつるかに  
ま白うけて白く輝くアラスカのマギンシ。山神さびて木中  
天地の崩けしとき中二の山につちりし雪やとけずあうら  
世の海今が春らし氷とけ、積稜蘇なしたよへるみゆ  
コバートに澄めたる星はも三月の月ほくかか水りまひる  
世愁のま上りなぬ地球はも在坑一面の雲の海のみ

# はしがき

（財）国民文化研究会・理事長  
元・亜細亜大学教授

小田村寅二郎

今は亡き青砥宏一さんの御霊の御前に、一周忌に間に合はせて上梓出来ました本書を、謹んで捧げさせていただきます。

私も国民文化研究会に連なる全国の同人一同は、この会の理事でもあられた青砥宏一さんの御逝去（享年、数へ年六十六歳）の報に、どんなに驚き悲んだことであつたか。今年のお正月早々に御入院のお知らせを受け、つづいて一月二十八日には、はや、あの世に旅立たれてしまはれた青砥さんは、実は前年（昭和六十年）の夏には、お元気なお姿で九州・阿蘇での「第三十回全国学生青年合宿教室」に助言者として参加してをられたのである。その「合宿教室」では、恒例の行事として第三日目の夜に、屋外にしつらへた祭壇の前に、参加者全員が整列して、戦時平時を問はず、祖国日本のために尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊を祀る「慰霊祭」を、神式で厳粛に行つたが、その際、青砥さんは修祓（しゆぼつ）（「しゅうぼつ」とも）の儀を担当してくださった。神主に代つて神前に進み出た青砥さんは、捧げ持つた大麻を、左右左して修祓（お抜ひ）の作法を、

実に心をこめてお務めくださった。そこに並みある三百人の人らの眼に「青砥さん御健在」の印象は、まぎれもなく刻まれました。それだけに御訃報には、信じられない思ひさへしたのである。

いま、在りし日の戦後の青砥宏一さんをお偲びすると、戦時下に学徒出陣され、海軍技術士官として活躍後、激戦地から海軍技術大尉として復員せられたあと、一時、島根県庁・土木部に勤務され、次に松江工業高校で教鞭をとられたあと、先代御経営の「玉造温泉・こんや旅館」を引き継がれたが、「先見の明」と申すべきか、早くも昭和二十年代後半に一層規模の大きい旅館をと決意されて、海岸寄りの土地を手に入れられ、今の「こんや別館」を建設開業された、と記憶する。その前後の御苦勞は、遠隔の地東京にある私の見る眼にもただならぬものが感ぜられ、大阪その他の地区への宣伝にも、常に氣力を充実させて努めてをられたことが思ひ出されてくる。実によく頑張られての御生業の基礎固めであつたのである。やがて、地域振興の諸役職にも就かれ、地域社会・同業各位その他からの信望を一身に集められたことは、私ども旧知の友人一同にとつても、嬉しい限りであつた。

さうした多忙な御身辺の中で、青砥宏一さんは、いま一つ情熱を注いでやまない課題を持ち続けてをられた。それは、若かりし頃、旧制徳島工業高校の学生時代に、ある機縁で学んだ「しきしまの道」(自己の体験を赤裸々に五・七・五・七・七の三十一文字に詠み上げる、といふ日本古来の道統を継ぐ和歌の創作)を、履み続けよう、との決意であつた。青砥さんがその「しきしま

の道」の<sup>しより</sup>乗として仰いだのは、明治天皇さまの『御製集』であつた。海軍士官としての出征中も、それだけは肌身はなさず持つてをられたのである。明治天皇さまは、御生涯を通じて九万三千三十二首といふ前人未踏の御詠草を残された方であられるが、御身边がきはめて苛酷な御多忙の折、たとへば日露戦争の折などのやうに、殊に御心労が濃く深くあられた時ほど、沢山の御詠草を詠み上げられた方でもあられた。それは大変に畏れ多い史実であるが、青砥さんは、その点にも心を傾けて明治天皇さまの御製を拜誦し続けられたからして、御自身の日常の生業がどんなに繁忙であつても、いな繁忙であればあるほど、「しきしまの道」の実践に努める、といふ習慣を、いつしかその身につけられるやうになつた、と思はれるのである。青砥さんの遺された和歌が大変な数にのぼるのも故あることであつた、と思ふ。

その青砥さんが、昭和四十七年八月に、ふと思ひ立たれて始められたのが『青砥通信』と題する『和歌通信』である。不定期刊行であつたが、手がきの謄写版刷りで（最近はやコピー複写で）、全国の友らから寄せられる歌を選歌編集し、それにご自分の歌も加へられて、友らに送つてくださったのである。亡くなられるまでそれを続けられ、最終号は第七十九号に及んだ。その中には、「唱和」（Aが詠んだ歌を読んで、感応を受けたBが歌ひ返す、こと）と呼ぶべきものも少なからず見うけられる。青砥さん宛に送られてきた歌に、青砥さんが感応して詠まれたもの、また、ある号に記載された歌を見て感応して詠んだ歌が送られてきて次の号にそれが掲載される、といった

具合に、お互ひの間での友情が濃やかに往き来するさまが、この「唱和」の実践の中で確認されもしたのである。

青砥さんが亡くなられたあと、今年二月に福岡で開かれた国民文化研究会の理事会では、期せずして青砥さん追悼の「遺歌集」出版の議が出され、決定された。そして編集委員に宝辺正久・小柳陽太郎・長内俊平の三理事が、編集顧問に夜久正雄理事、編集印刷協力に磯貝博理事がそれぞれ選ばれた。以来、この方々の大変なご努力で本書が出来上ることになるのだが、青砥宏一さんが御生前に幅広く御交際になつた地元の方々、同窓生の方々、海軍での御友人の方々の青砥さん追悼の御意向をおたづねすることもなしに、私ども国民文化研究会だけで、しかもこの会につらなる者たちとの交友を主題にした書物を作つたことについて、紙上を藉りてお許しを賜はらなければならぬ、と思ふ。ただいささかでも、私どもの存じ上げなかつた青砥さんの別の一面も、是非とも本書に収録させていただき、少しでも伺ひ知りたく念じて、御葬儀当日の弔辞のうち二編の掲載方を、未亡人・智子さまにお願ひ申上げたところ、快く御了承をいただいたことは、有難いきはみであつた。弔辞を捧げられた御二方にも御了察いただきたい次第である。

さて、本書は世にいふ所の「遺歌・遺稿集」とは、かなり趣きを異にしたものとなつた。青砥宏一さんの御生前の多面にわたる御動静の中で、「しきしまの道」の昂揚に生きつづけられた一面は、現代日本においてまことに稀有の御業績であつた、と私どもは追慕したがために、故人が



情熱を注いで刊行を続けた『青砥通信』を主体にした編集によつて、「遺歌・遺稿集」に代へることになった。しかしそれでも、青砥さん御自身の和歌と、他の人々の和歌とを並列すること（『青砥通信』では同格並列であつた）は、何としても遠慮しなければ、といふことになつて、故人の文及び和歌は10ポイント活字にし、同人のものは一つ小さい9ポイント活字にし、かつ、上からかなり下に下げて記す、といふ特殊な組み方を採用した。これによつて、せめて『青砥さんの遺歌・遺文集』に近い書物であることを、読者各位にお示しさせていただいたつもりである。特異な作り方をして、お見づらい点多々おありのことであらうが、なにとぞ御海容下さるやうお願い申上げる。なほ、題名を『青砥通信鈔』と「鈔」を加へたのは、そのごく一部を選んだためである。

さいごに、故青砥宏一さんの御冥福を祈り、あはせて御遺族皆様の御平安と「こんや別館」の御隆昌をお祈り申上げる。また、本書編集の関係各位、並びに奥村印刷俵の担当者斉藤郁夫氏に、深甚の謝意を表させていただく。

昭和六十一年十二月十二日

## 目次

はしがき……………小田村寅二郎……………	1
『青砥通信』から……………	
昭和四十七年……………	3
ヨーロッパ紀行……………	3
詠進歌始末記……………	10
「八雲立つ出雲八重垣」の弁……………	15
秋期熊本合宿・福岡合宿外記……………	17
昭和四十八年……………	27
「マングローブ」の御製を拝誦して……………	27
韓国紀行……………	35
昭和四十九年……………	43

小野田寛郎元陸軍少尉を讀ふ	45
サイパン島・グアム島紀行	56
ひざかけ	59
昭和五十年	61
伊豆・須崎を訪ひて	65
タイ国紀行	70
昭和五十一年	72
みちのく・えぞ地紀行	76
山陰地区視察団・ブラジル親善訪問紀行	79
昭和五十二年	85
台湾紀行	88
昭和五十三年	92
トラック島現地墓参団に参加して	95
昭和五十四年	103
古事記学会に御来松の諸大人を迎へて	110

昭和五十五年.....113

昭和五十六年.....120

昭和五十七年.....128

国引国体開会式に参加して.....130

昭和五十八年.....134

昭和五十九年.....144

昭和六十年.....151

日記・その他から

昭和三十年代.....173

昭和四十年代.....187

御題「朝」歌会始の御製を拝誦して.....215

昭和五十年代.....221

最近感ずること.....222

新年発表の御製・御歌を拝誦して.....228

御題「音」歌会始の御製・御歌を拝誦して.....240

附・御葬儀における弔辞

「島根鑑会」会長……………	千家達彦……………	259
「玉湯小学校同窓会」代表……………	新宮承紀……………	262
「あとがき」に代へて——青砥宏一さんを偲びつつ……………	長内俊平……………	265



『青砥通信』から

『青砥通信』は、青砥宏一さんが昭和四十七年から逝去に至るまでの十四年間、同信諸友との歌の交信を編んで、遠い島根の地から全国に友らに配布してゐた通信文である。

なほ、大きい活字は青砥宏一さんの和歌と文章、小さい活字（四字おとし）は、同信諸友のものである。



昭和四十七年（第一号～第五号）

ヨーロッパ紀行

諸大兄、去る阿蘇に於ける「全国学生・青年合宿教室」御参加御苦勞様でありました。おのおの色々な思ひを抱いて山を下りられた事と存じます。はるか彼方に合宿は終つた様な感じでありますが、講師先生の言葉、友らの顔が次々と浮んで来ます。御会ひ出来た機縁、呼び起された魂、忘れ得ぬ言葉、之を大切に、お互に呼びかけして、生きてゆき度く思ひます。

「阿蘇の司」<sup>つかさ</sup>に合宿を終へて帰る友を送りて

集ひこし友ら合宿今終へて帰りゆくなりおのおのもおのものに

道のくま友は消えゆく一粒の麦地におちて萌えん祈りつ

さて小生去る七月四日から十八日迄ヨーロッパ旅行をして来ました。ヨーロッパをさがみにかみて吹き棄つる気吹になりませる神“のごときうたをと念じて居りまし

だが、ヨーロッパの荒神あつらひのかみの毒気に当てられ、  
「吾が足まがりなして」いたく疲れて帰  
つて来ました。(八月十四日)

アンカレッヂより北極上を飛び、パリへ

カラ松の林の中に家居する人のなりはひしぬびつるかも

ま日うけて白く輝くアラスカのマッキンレー山神さびてみゆ

天地の開けしときゆこの山につもりし雪やとけずあるらむ

北の海今か春らし氷とけて縞模様なただよへるみゆ

コバルトに澄める空はも三日月の淡くかかれりまひるながらに

北極のま上ゆながむる地球はもただ一面の雲の海のみ

スカンジナビア半島上空にて

入り海は鋸のこの刃をなしとがり秀はの山々つづくごし国はも

このごし国のいぶきにノルマンのはがねのいのちもえ出でにけむ

パリ・凱旋門にて(門の下に無名戦士の墓あり)

マロニエの並木大路の丘の上凱旋門は天そそり立つ

この門を通り幾多のフランスのつはもの出でけむ戦ひの野に  
門の下無名戦士のおくつきにぬかづきまつる旅の子われは

ナポレオンの雄図むなしも靴音の聞え来るとし昔しのべば

兵士つはもののみたま慰めんとか奥つきに火は燃えてあり日夜わかたず

とこしへにこの火燃えなんこの国の戦士いさをの功語りつぐべく

ホテルのバルコニーに一人朝出でて御製を拝誦す

との曇るひむがし東ひむがしの空ふしをがみ大御歌をば誦しまつるも

ドーバー海峡を越えロンドンに着く

ひとたびは見むと思ひしドーバーの雲のかかりて見むよしもなき

雨雲の開くと見ればたちまちに陸地せまりてブリテンにつく

パッキンガム宮殿衛兵交代を

数万の観光客は交代を一目みんとて広場埋めたり

曇り空マーチひびかせ黒帽に赤き服き着し一隊すぎゆく

大手ふり隊伍ととのへ宮居もる衛兵すぎゆく誇みつがに

大君の宮居守ると近衛兵立ちし日本の昔恋しも

ゴッホの作品を見て（アムステルダム市民博物館）

恋人に逢へるがごとき心地して吾みまもりぬ「馬鈴薯食ふ人」

エギイ・ドウ・ミディ山（三八〇〇米）よりモンブラン（四八〇〇米）を望む

みはるかす四方のとがり秀ヨーロッパの屋根岩山は雪のかがやく

ヨーロッパの濁れるけはひよそにして気高くみゆるこれの山山

ケープルで降りつながむる目の下に谷間うづめて氷河流るも

ローマにて

夾竹桃赤き花さく街中に遺蹟みちみつ暑き日のもと

パチカン帝国、サン・ピエトロ寺院にて

キリストの福音伝へしピエトロははりつけにされしさかさに吊りて

市民権なきパウロはもあな悲し首切られをりネロみる前に（寺院内正面銅版画に）

二粒の麦地におちて福音は花と咲きけりヨーロッパの地に

ローマへの巡礼の人らにうちまじりこれの大寺あふぎみるかも

その昔さむらひの児らこの寺に学びしことをふと思ひ出づ

(大友、大村、有馬三氏、ローマ教皇に少年使節を派遣す)

ナポリ・ボンベイにて

青き空沖遠かすむ地中海ナポリ港に小舟ひしめく

アフリカにつづく海かも棧橋に手に潮しほくめばそぞろうれしも

地中海八幡丸をばしづめたる船長のうたいつか忘れむ(『国民同胞和歌集』・三田峻策)

亡国の民のきざしか童わらわべのあまたむれ来て煙草たばこ欲ほりすも

十字軍船をつらねて出でにけむナポリの港去りがてにして

ボンベイの街一瞬にのみにけるベスピオス山に雲たちわたる

食事飲物

固きパン、バター、チーズにポイルせし魚の食事見るもうるさし

ひるビールゆうべタブドー酒つづく日々大和の酒のひたにこひしも

君が賜ぶ歌にこころののりゆけばわれも旅ゆく君とともにも

恙なく<sup>つが</sup>帰り来れよそれのみぞ我祈るなるまたなき友ゆゑ（七月二十日）

慶応大生 青砥寛明

欧州紀行の歌、拝見いたしました。遠い所をわざわざ送つていただき有難う御座いました。厳しい自然の中に生きる人間に対する生活者としての深い共感がしみじみと伝はつてくる冒頭の歌に始まつて、その後には展開される真向からの唐竹割りのやうな剛毅な歌に、冬の太陽の中に立つ草莽の志士の気骨が窺はれるやうで爽快な感がいたしました。私も何らかの形で欧州旅行を纏めようと思つてをりますが、まだならずをります。伯父様の御精神、若輩ながらも感心してをります。

（青砥註、寛明は小生の甥で旅を共にした）

北九州 森田維佐男

とつ国をめぐりてよめる君が歌見つつあやしも吾も胸をどる

このすりぶみを送るに当り

諸大兄、この「すりぶみ」(编者註『青砥通信』のこと)を二回諸大兄に御送りしましたところ「つぎのすりぶみを待つ」と云ふ友からの便りあり、又次々と来る友からの便りよむことのうれしく、「一人居て喜ばば二人と思へ、二人居て喜ばば三人と思へ、そのうちの一人は親鸞なり」と云ふ同信同行の有難さをひしひしと感じて居ります。子規の「雑誌を己の生命と思ふ程の人が一人なくてはなりません。なぐさみに出す雑誌ならば、盛にならうと衰へやうと、構はぬとはいふものの、とかく一度生れた子は成るべく無病息災であるのが親の望む所でありませう。云々」をよみ、このスリブミは己の生命と思ふ様になりました。

友から返事が来ぬ様になれば、私の生命もなきものと思ひ、つづく限り続けようと決心致しました。

今を去る三十年前の学生時代、今は亡き寺尾博之大兄が旧制高知高校生のころ、「生命は交流なり」と言ひ、しげく便りを呉れたことが思ひ出されます。(十月十八日)

詠進歌始末記（始末記とは不遜な言葉かも知れない）

前便にて、詠進歌のおすすめを書いた以上、そのことをと思つて居りましたら、時を同じくして、関正臣兄からも葉書でこの件について連絡が来た。誰もが同じことを思つてゐるなと思つた。それから「子ども」のことを詠まうと思ひ考へつづけて来た。先づ我が子の事と思ひ詠まうと思つたが、四人居るので、どの子のことを詠んでも不公平になるので全部一緒にと思ひ

四人の子一人嫁ぎて二人の子大学にあり一人高校

としてみたが、どうも面白くない。そのうち私の関係してゐる保育園の親子運動会があると云ふので、それを詠まうと決心し、予めパン食ひ競争位あると思ひ、事前に山を張つて

秋なかば保育園児にうちまじりパン食ひきそふ幼心に

を作り、見物に出かけたところ、パン食ひ競争はなく、まさか嘘は詠めず

晴れ渡る秋の日をあび園児らは親と手つなぎ走るたのしげ

秋日晴うたうたひつつどんぐりの遊戯踊りぬ園児も親も



秋なかば親と園児とうちまじり綱ひききそふ晴れし日のもと

以上三首が二十日間位考へつづけ書いては消して出来た歌でありました。

然しどうも月並の様な気がしてならず、その間亡くなつた四十三年前の妹のことを  
と思ひ

三つにてみまかりゆきし妹の忘れえなくに五十路いそぢへたれど

も出来たが、正月早々の歌にどうかと思つてゐた。たまたま昼、歌を考へて居たら、  
末の子がミシンを鳴らして居たので

末の子は宿題ならむスカートをぬふ音きこゆ秋の曇り日

を得た。あれこれ考へてゐるうちに、どうも力の入つた底から感動の湧くものがない  
気がして居つた。「題詠」と言ふのは、而も一首だけでまとめる苦心は、今まで連作  
短歌のみ詠んで居つた者には、針の穴から天に昇る思ひであり、＼大君にまめやかに  
仕へる＼事は、凡夫には至難だと感じたりした。「題詠」は、月並になる原因もここ  
に因あり、とも僭越に思つたりした。

そして、突然遊戯中に群から飛び出して大声で泣き叫び保母、親が何と言つても泣

き止まなかつた子の事が思ひ浮び

たちまちに列をはなれて泣き叫ぶ子あり園児の踊るさなかに

と云ふのを得、一夜考へて

園児らの遊戯する群むらとび出して泣きいさつ子を見るにいとほし

として、迷ひに迷つた挙句、これにきめて詠進した。

諸兄の御批判を乞ふ。

北九州 村田英雄

(前略) 詠進歌始末記、妻と共に読みました。大変面白くほほゑましく感じました。

“四人の子”は全く愉快です。我が家も私と妻と競争でつくりました。

手を振りて後追ひながら出勤の我を見送る子等のいとしき(小生の歌)

叱られて泣き寝入りせしいとし子よこの親心いつ知るらむか(妻の歌)

久留米 合原俊光

忙しきなりはひなるに心こめつくりて賜ふこれの文はも

大君に献げまつると師の君は心くだきて歌よみたまふ

献ぐべき歌決めたまふ師の君の心づかひにならひて生きむ

深みゆく秋の夜長を師や友の歌の数々読みて更しぬ

み友らの思ひにわれもつながりであると思へば生く力湧く

文置きて窓辺に寄れば夜半の月中天高く照りてあるかも

東京 梶村 昇

(前略) 御題は、私もそれなりに目を重ねて推敲しましたが、やはり生来の性といふべきでせうか、理屈が多くてうまくまとまりませんでした。それでも理屈の末に思つたことは、「子ども」といふことは、自分の子のことであらうから、陛下に私の子どもたちは元気です、と御報告すべきであらうと存じ、

吾子らみな御稜威のもとにすこやかに育ちあますと告げ参らす

と詠み、子供にみせたところ、天皇陛下におべつかをつかつてあるやうだと言はれ、やめにしました。そして今夏、出かけてきたジャワの一風景として

水牛の背にうつぶしてゆられつつ田中たなかに遊ぶジャワの子どもら

と詠進しました。

夜光花の花散り果てて天路ゆく雲間がくれの月ほのかなり

いつしかに秋もふけたり鳴きしきる法師蟬の声聞えずなりて

むらぎもの心の底ゆゆらぎ出づるいのちのリズムか友のみうたは

若き友片岡君をなくさむる君がみうたをよみつつ泣かゆ

十月十八日、川井修治兄墓参に帰る

重き荷を「さつま無双」に「ふじ一」をつとにたびにし心うれしも

〔「さつま無双」——さつま焼酎、「ふじ一」——かつをの塩辛〕

氷雨ふり風いや吹きて神鳴りの落ちしがごとし君の言葉は

四国路にまた岡山に山陰に巡り説く君パウロ思ひぬ

こしかたのつもりし思ひ語らへばいたく夜更けぬいざやいねむか

朝戸出の君を見送りふりあふぐ御空ひとひら雲足かろし

玉造に青砥兄を訪ねし帰途にて

鹿兒島 川井修治

朝立あさたちのせはしさゆゑに約したる歌ものこさでたち出でしかな

しきしまの道の一すぢ友みなに伝へんといふ君はたのもし

この友と夜ふくるまでも語らひし出湯の町を今さかりゆく

行く汽車の右手みぎにひろがる宍道湖のさやけき姿見れどあかなく

朝あけの東の空に嵩たか・和久羅わくろうすずみ色のかげ見せてをり

今は亡き父につれられのほりたる幼き頃を思ひ出づるも

北岸の十六はげのあのあたり自転車駆りて行きしことあり

遠がすむ湖うみの彼方にふる里の松江の町のほのかにも見ゆ

父母のみ墓に詣で友に会ひこたびの旅は残る思ひなし

「八雲立つ出雲八重垣」の弁

八雲立つ出雲八重垣妻つよこ隠こみに八重垣作るその八重垣を

この歌に取り付かれてから久しい。この歌の解釈は色々ある。然し私は体験として判らなかつたのである。

この歌が詠まれた「須賀の地」と伝承される出雲の山奥の須佐神社に参拝し、雲を

眺め、斐伊川の堤防に立ちて一望の簸川平野上空の雲も見た。そして、車の中より、汽車の窓より、八雲立つ出雲の雲とは如何なる雲か、とそれのみ考へて来た。しかし、それらしい雲が見当らぬのである。特に、夜久正雄氏が「雲が立ちのぼつたといふ表現は、いまでも出雲によく見られる現実風景での描写である」(『古事記のいのち』)を読んでははいよいよ焦りにも似た気持で、雲に取り付かれた。

「八雲立つ雲」とは「積乱雲のことですよ」、と教へて呉れた人もあつた。東京から飛行機で出雲空港へ帰つたとき、出雲一面に、覆つた重い感じの雲が立ちこめ、その雲の間から日影が漏斗状に宍道湖にさしてゐるのを見て、これではないかと思つたりしてゐた。

しかし、この頃はたと思ひ當つた。それは、湧き起る力強い雲のことでもあるが、自分の内心のことではないかと思つた。そこで、手取り早く私が妻を娶つたときのこと、またその光景を思ひ出してみた。やはりさうだ。神前に妹脊の契りを誓ひ、盃をくみ交はしたこと、そして式後親族に祝福され、これが我が妻である、との歡喜と希望と責任に身が震へたときのこと。そして「八雲立つ」の歌を読んでみた。スサノヲ

のうたのいのちがひしひしと伝はつて来た。脈々と甦よみがへつて来た。あの時の湧きあがる思ひを、親族の人々の囀なまりの人々の一斉の鳴板なるいたの如き祝福の言葉、そして新室での事を歌はれたのだ。

今春娘が結婚したとき、式中、披露宴中、この歌が頭を離れなかつた。酔ひが廻るにつれ、この歌を何回も朗詠した。絶叫した。集まつた人々が包んだ雰囲ふんいき気、祝福こそこの歌そのものであつた。

尚蛇足であるが、娘等夫婦が親族に見送られつつ、二人で楽しげに語りひつつ、新婚旅行に出たとき、親の元を離れる時、大国主とスセリヒメが、スサノヲが寝てゐる間に手をとつて逃げますとき、天あめの沼琴ぬまごとの音に驚き起き上がり遙みかに望みけて「是奴こがやよ」とのりたまひし言葉こそ、親の気持だと思つた。(十一月十二日)

#### 秋期熊本合宿・福岡合宿外記

去る十一月二十二日～二十四日熊本合宿、二十五～二十六日福岡合宿に参加させて頂いた。何かないかとむずむずして居るところへ呼び掛けがあり、渡りに舟と出掛け

た。実に有意義であり、同信の友等のいのちにふれて心境がまた一段と開かれた。合宿内容については、それぞれ合宿記録が当事者から出ると思ふので、他の事を記してみようと思ふ。

二十二日午前十時四十三分玉造温泉駅発「さんべ二号」熊本行にて出発、熊本迄約十時間かかるので、ゆつくり家事を忘れ本を読まうと思ひ、バッグ一杯に本をつめ込んで乗った。簸川平野を汽車が走つてゐる頃は、家の事と合宿の事が混つて心が落着かなかつたが、石見海岸を通る頃は、心が落着き統一されて来た。(太子の御言葉で云へば、私の心の世界から公の心の世界に向ふ)

日本海の雄大な眺め、打ち寄せる白波、岩上の松、山の紅葉、黄葉を見てゐるうちに自づと人麿が思ひ出され、「荒磯にぞ」「玉藻なす」「靡き寝し児を」「か青なる」「か寄りかく寄り」「朝羽振る」「思ひ萎えて」「岩根しまける」「み山もさやに」「靡けこの山」の言葉が移りゆく景色と共に、思ひ出された。時間のたつのも忘れ、窓外を眺めて居つた。やがて石見益田着、車中より小高い丘の松林の中の人麿神社を拝礼した。間もなく萩、松陰先生ゆかりの地だ。山手にある先生の奥津城ををがむ。涙松の



ことなど思つてゐるうち、ふと気の付いたことは、今度熊本で和歌のことを話すのに、須佐之男命(出雲)、人麿(石見)、松陰(長門)、防人(筑紫)、菊池武時、宮部鼎蔵、和多山儀平(肥後)のゆかりの国々を山陰線、鹿児島本線で通ることだ。何だか不思議な思ひで、先人の御加護を頂いてゐる気で西下した。熊本到着二十二時三十二分。駅頭に、北島照明、松田信一郎両兄の懐かしい顔が見え、駅前の喫茶店で小憩し、宿舍(国文研指定旅館、小田村理事長、林正義氏のお好みの常宿)に到着。一風呂浴びるまに、瀬上安正、徳永正巳両大兄が来られ直ちに近くの旗亭にて一献、オテモヤンの酌にて微酔、寝につく。

二十三日合宿場「少年の家」に到着、合宿開始午前九時と云ふのに既に『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読がはじまつてをり、合宿の雰囲気ただならぬものを感じた。二十三日丸一日聖徳太子輪読(夜一部和歌講義)二十四日午前中迄、十名位の諸兄が次々と太子の難解な言葉をかみ砕いて研究発表を行つた。字句の解釈に終つた発表もあつたが、殆どの学生諸君が太子、黒上先生の御心を憶念し、体験に密着した発表にて、熊本のただならぬ底力をひしひしと感じた。かくまでに徹底的に太子

一本の合宿は一高昭信会はいざ知らず学生協会以来初めてだと思った。(然しその後小柳兄に聞いたところでは福岡では既に行つてゐるとのことであつた。)福岡でも感じたことであるが、この合宿中若い学生諸君と語りながら、「みつまつし久米の子らが」「一騎当千の若武者の集結」の感がずつとして居つた。二十四日夜十一時半迄和歌相互批評、終了后若いOB心づくしの冷酒にて乾杯。(小生翌朝福岡合宿へ出発するの合宿運営中であつたが)、学生諸君は殆ど飲まなかつたが、小生終つた解放感もあり、特に阿蘇の伏流水で造つた地酒と聞き、今夏の阿蘇大合宿を思ひ出し感激、若きらに「豚を食ふとは豚の一部を食ふことであり、鯨を食ふとは、鯨の一部を食ふことだ。全部を食ふことではない。阿蘇の一部(伏流水)で造つた酒を飲むとは阿蘇を飲むことだ」と目をぱちくりして聞いて呉れるのを、いい気に三杯たて続けに茶碗で頂いた。一滴も飲んで居らぬ片岡健兄運転する車(瀬上、徳永兄途中下車)に打乗り、白ヘルメットの北島兄のバイク(途中迄)に護衛され、宿舎に入らうとしたが、別れがたく「片岡泊れ、飲まう」と云ふことになり、例のオテモヤンの店へ、小生その頃阿蘇の地熱を感じ出してゐた。明日の事も打忘れ遂にヲロチとなり、何時に宿に帰

つたものか、何時に床に入つたか、語りに語つたらしい。片岡のタケルのヨロチが「四時です、ねませう」の言葉だけ耳に残つてゐた。

朝七時のモーニングコール(朝熊本発七時五十分の汽車にのるため、フロントに起す様たのんでおいた。)で目をさました。「しまった」と思った。胸はむかつき、まことに我が吐く息はヨロチの酒くさいのだ。しかし福岡へ行かねばならぬ。間もなく松田兄見送りに来る。早朝厚い友情に感謝。「朝飯を食ひませう」と云ふ片岡のタケルの言葉をしり目に駅へ出発、時間あり、松田コーヒー、小生ジュースを飲んで熊本発、汽車が進むにつれ、昨夜から暁かけての阿蘇山のマグマが活動を開始、のど元に噴出しさうである。遂に便所へ「尿くそなす吐き散ら」す。ウトウトしながら、筑紫山脈にはんのり降つた雪を眺めるうち博多着、きつくてならぬ。第二波噴火襲来、駅の便所へ。しばらく駅のベンチに小憩、元気が出たのでコーヒーを一杯のみ、福岡の友等集ふ八木山めぐし、バスに乗る。八木山越えのヘアピンカーブにかかると第三波襲来、何とか八木山本村停留所までたどりつき、附近の田圃へ「畔あはな離ち、溝埋みぞうづむるがに」阿蘇の分身を齎いっきまつり、そして涙をぬぐつて、天竜山(合宿場の裏山)を仰いだ。

福岡信和会合宿は熊本より一日遅れて開始されてをり、小生参加したのは三泊四日の内三日目午后から四日目午前中最后迄であつた。ここでは御製中心の合宿であり、小柳陽太郎、小林国男、宝辺正久、山田輝彦諸兄、若いOB、学生が次々と歴代天皇から今上天皇御製まで、徹底的にその時代背景を考証しつつ大御心を仰ぎまつりつつ、失はれたる心を回復することに骨身をけづる研鑽がなされた。特に九大山口教授の御参加を頂いたことは感謝の外ない。熊本、福岡共に殆どの学生が合宿経験者であり、どちらも三十名内外で、夏の大合宿以来の研究発表する者、また色々と疑問に思ふことをあますなく語り合ひ、感激を和歌と感想文に記して散会した。

さて合宿も終り夜行迄時間があるので、小柳兄に会ひ度くなり、左門君に伝言依頼したら「待つてゐる」との事にて、一晚小生と一緒に泊つて合宿をされた、山田輝彦兄とお別れし、開克史兄運転ひんぎんの車に乗せてもらひ（同行小柳左門、山口秀範、小林至の諸兄）一路香椎宮へ向ふ。市内から東進するにしたがひ、元寇の遺跡、菊池の戦の跡、戦国時代以前の古城の事などガイドよろしく諸兄の話ききつつゆく。町名も箱崎、勅使道、鑑坂等良い名前が多い。（この件熊本でも千葉城町、蔚山町うるさん、長六橋等歴史

の深みを感じる。)しばらくする内、香椎宮につく。ここは古事記仲哀天皇の訶志比の宮にましまして熊襲を撃たまはんとせしとき「爾稍其の御琴を取りて、なまなまに控き坐しけるに、幾久もあらず御琴の音聞えずなりぬ。かれ火を挙げて見まつれば、既崩りましき。」と云ふ戦慄すべき悲劇の地だ。天皇は神の忿りにふれられて崩りましたのだ。(小生は賊にさし給はれ崩りましたと思ふ。)当時を思ふと心の引き締まる思ひだ。同行五名神前にぬかづく。宮居の屋根は四方から眺めて、船団を組んだ二艘の舟の形になつてゐる。苔むした行在所跡参拝、周囲の木立に鳴く鳥の



青砥さん(前列左から2人目)をかこんで一葦牙寮にて一

音も悲しみに満ちてゐる。近くに建内宿弥の掘つたとの言ひ伝への「不老の水」あり、一同謹んで長命を祈念して、大柄杓ひしやくにて頂く。この辺り、小山、田の面かけてつはものどもの屋形がありしと思へば胸にこみ上ぐるものあり。はたはたと旗の音、御楯、御矛の音が聞える様だ。近くの高台にある小柳兄宅訪問、久留米の合原俊光兄来訪中、「現下の学校教育内容を正すために急務を要する問題点」資料印刷のための校正中であつた。広い書齋、広い窓からは博多灣が一望、その彼方には海の中道と云はれる松原が眺められ、海岸迄連なる家並から夕方の灯がまたたき、心が開ける思ひであつた。その後葦牙寮にて、小柳、小林、合原其他若い学生諸君とコンパ（熊本の諸兄許せ）元寇の歌等つきせぬ思ひのひとときであつた。なほその折、寮宝の盃（五つの内一つ）を頂く。これには国譲りの神話にも比すべき一幕ありしも略す。

熊本合宿にて（少年の家にて）

合宿の部屋ぬち出でてふりあふぐ御空ますみてはてもなきかな  
山の端ゆはやてにのりて湧き出づる雲の動きをながめあかずも

丘への竹むら林吹く風になびくを見れば心うごくも

故和多山儀平兄の遺歌を輪読して

たたかひにいのちささげし熊本の友のうたよむ若き友等と  
吾れ死なばあとにつづけとのこしたる歌をしよめばふるはざらめや  
なつかしき君のみ姿しぬびつつ若きらと語る熊本の地に  
なきみたまみそなはしませ若きらと思ひ通はし語る心を

福岡八木山合宿にて(於青年の家)

バスおりてまづふりあふぐ竜王山なつかしきかなならかにみゆ  
こぞの年ここに集ひてくさぐさを語りしことを思ひ出づるも  
友ら今宿舎につどひ語りますと思へばおのづ力わき出づ  
緑こき杉の若木のますぐなる直きこむらの麓おほへり  
たどりゆく道のかたへの田舎家に大根ほせり土つけるまま  
久々に吾は見たりき柿の実をむきて御統珠とつれるを(吊し柿)

前略……また天御中主神についての哲学的解釈もあまりつきつめると観念論になつてしまつて歌をよむことの生きた内容を遊離して迷信的なひとりよがりのやうになるおそれがあります。

天御中主神、それは短歌だ！ これで充分でそれ以上説明すると変なものになつてしまふ、と、私は思ひます。短歌の価値の説明には「天御中主神」といふコトバを使はずに、もつと普通の、現代適用のコトバを使ふ方がよくわかるし誤解もないでせう。短歌の研究はあくまで具体的に実作についてすすめてゆきたいと私は念願してをります。それが正岡子規、三井甲之の伝統とおもひます。(十二月八日)

(青砥註・この御便りは、小生の最近、「短歌」は「天御中主神」に思へてならぬと言ふことを書いたものに対する御教示です。)

福岡教育大生 小林 至

出雲より心こめたる刷文を我れいただきぬありがたきかな  
八木山で和歌の指導をなされたる先生の姿のひたになつかし

刷文を読みゆくままに先生の言の葉うつつに聞えくるがに(十二月十九日)



昭和四十八年（第六号～第十五号）

「マングローブ」の御製を拝誦して

新年の天皇陛下の御製については、毎年富山の広瀬誠さんその他の諸大兄の研究発表があるのです、小生標記の御製について目ざめしめられたことを書く。

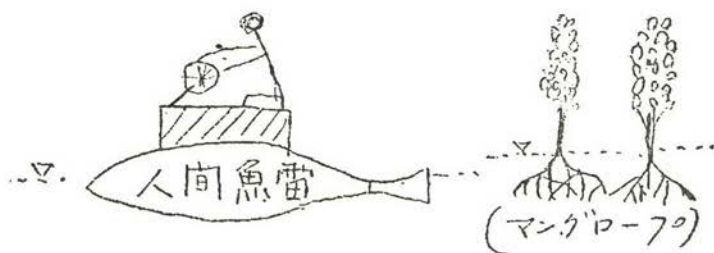
御製・マングローブの自生地（奄美大島）にて

汐のさす浜にしげれるメヒルギとオヒルギを見つ暖国に来て

メヒルギとオヒルギの御表現に、一読『古事記』伊邪那岐命、伊邪那美命を思ひ出さしめられた。今のうつつに天皇陛下と皇后陛下は、暖国の奄美大島にお立ちになつて居られる。この島は終戦後、沖縄と同様米軍統治となり、昭和二十九年に沖縄より一足先に、日本へ返還されたところだ。「汐のさす浜にしげれる」に葦牙を思ひ出す。内地では入江、湖、河口には葦が生えるが、暖国ではマングローブである。マングローブは、み実に気根が出て水中に落ちて芽を出す。

天皇、皇后兩陛下の行幸啓に、如何ばかり島民は喜んだことであらうか。暖国の緑濃いマングローブの葉と暗茶色の幹と、そしてタコの足の如き気根の大群落、その沖に展けるコバルト色の大海原が目に見え。沖繩島のことも御思ひになつて居られたことであらう、と拝察する。

小生がマングローブを見たのは、大東亞戦争中、グアム島、トラック島に於てであつた。下手な絵でごらんのように、江に大集落をなし、その中にカヌーの通れる迷路の如き水路があつた。トラック島では、ここの中に魚雷に人が乗つて、敵艦に体当りで攻撃する特攻兵器がかくしてあつた。たしか「矢風隊」と云つた。海岸防禦線には、恰好の植物と思つて居つた。然しアメリカのジュータン爆撃、徹底的な十字砲火を浴びては一たまりもなく、この植物の防禦線も破られたであらう。幸ひアメリカが来なかつたため、今生きてゐるのだ



が。

八木山合宿にて

福岡 小野吉宣

夜もふけし部屋にもどれば師の君は一人歌稿を読み給ふなり  
疲れたる体をおして黙々と添削し給ふ我らが歌を

東京に行く吾子を送る（駅頭にて）

至誠もて動くあるのみ酒ものめ詩も賦すべしいゆけ都へ  
山の端の雲の動きてさし出づる朝日の光まばゆかりけり  
冬枯の桜の木末五つ六つ露の光れり我にむかひて  
汽車はしる鉄路のわきの枯草の原にしるけし緑小草の

此の頃は、春の旅行シーズンに備へて業者の会議、セールスと出張多く、その際生  
れました歌を御紹介致します。

白浜湯崎温泉にて（紀州）（二月六日）

白浜の湯崎の宿ゆみわたせば夕日落ちゆく大海原に

百重<sup>ももへ</sup>なし寄せくる波のしき波の白泡<sup>ももへ</sup>なして磯にくだくる

海原にただにむかへる磯松の太幹ゆるる風に吹かれて

くらやみの大海原を渡りくる風の恋しも音なりやまず

これの湯にいこひ給ひし田所の先輩しくしくしのばるるかな

（編者註・故田所廣泰氏のこと）

よもすがら窓うつ風のみまもりて湯宿の夢のさめがちにして

串本の橋杭岩及び潮の岬を（二月八日）

大君の御幸<sup>みゆき</sup>のあとをかしこみつ沖にたなびく雲をみるかな

しき浪の大海原のまろがりてはつるはたてに雲たちわたる

串本の浜にそだちし乙女子<sup>をとめご</sup>の踊りみるかもかなしこのうた

黒潮に鯨いとらむ荒雄<sup>あらを</sup>らを産み出す乙女見らくたくまし

下関 宝辺正久

拜啓、『国民同胞』一月号（編者註・「秋期熊本・福岡合宿外記（本書十七頁）」をさす）  
如何でしたか。二度三度噴出し、「尿なす吐き散らす」といふのは、すこし謹慎を欠  
くではないか、と印刷した時点で頭をよぎるものがありました。いやいやこのま  
すらをぶりをこそと思ひ、わが『国民同胞』に記録しえたことを感謝してをります。つ  
まり、一すぢのやたけ心がたくまずして強く出てゐるんだな、青砥宏一に宿る不退転  
の道心にほかならぬものでありませう。少々異色の合宿記ではありました。

昨夜、加藤敏治先生の奥様がおいでになつたことを

鹿児島大 川井治子

つたなかる我らが集ひを見守らるるその御心は有難きかな  
何事も我らのためになし得ずと言ふ御言葉に涙わきけり  
数々のみ心こもる品々にはげまされたる心地するかも  
とつとつと語らるるそのみ言葉に日本婦人の生き方を見き

（八代・春光寺第一回九州地区女子合宿）

海軍兵学校にて

校庭に高くそびゆる松並木を見つつ歩めり若き友等と

まさご路ははき清められ吹く風にみ空仰げば心すがしも

日本海大海戦に敵艦を沈めし大砲目の前にあり

砲身を仰ぎて見れば火をふきし昔思はれて生けるがごとし

参考館にて特攻隊員の遺書を拝して

くさぐさのみうたはあれど母恋ふるますらをのうた何ぞ悲しき

母君に先ゆく不幸謝すよめば涙流れてとどめかねつも

北海道・帯広 長内俊平

拜復、待ちこがれた『青砥通信』がついた。一昨夜、久しぶりで吹雪いていささか

胸がすつとした。

うなり声あげつつ雪をまきあげてかけゆく烈風みるに清しも

節分の日

腹ぞこゆ大声出して豆まけばわがむらぎもの心清しも

十勝野に住むしあはせよつねはつつましき妻も大声を出して豆まく

網走にて(二月八日十日、社用にて網走へ釧路をめぐる)

さいはての港に立ちて望めどもオホーツクは見えずガス深くして  
船一つ浮ばぬ冬の網走の港に流水静かに流る

帯広に帰りつきて

えぞ地には群山あれど妻子ら住む地に立つ日高の高嶺よろしも

『青砥通信』を讀みて

福岡・大牟田 志賀建一郎

師の君ゆ送りましたまひしすり文をとり出し見れば九部になりぬ

去年の夏合宿終へしゆつぎつぎと送りましたまひしこれのすり文

欧州をさがみにかみしみ歌もありき熊本の場合外記あり愉快ならずや

出雲の地ゆ我らの歌を待ちをると呼びかけたまひぬ応へざらめや

一般参賀

専修大生 青砥誠一

空晴れて玉砂利の庭踏みしめて皇居の中を歩く嬉しさ

大君のお出ましあれば人は皆日の丸の小旗うち振りにけり

大君のお出ましと共にをちこちで万歳唱ふる声聞えたり

我もまた腹の底から大声で万歳三唱となへまつりぬ

正大寮の朝（五月三日）

白みたる夜の引き開けをふしどにて聞く鳥のねの何ぞさやけき

白金しろがねの森にこもりてしきりなく鳥は何鳥からすうましその声

さやかなる声にまじりてまどほにも鳥からすの声もきこえくるなり

よべよりの雨にぬれたるさ庭べにひらどつつじの花盛りなり

あぶらなのたぐひの花のふる雨にうなかぶし咲く庭をうづめて

この寮に住みにし友のうゑおきし花としきけば心さやぐも

若きらのいや年つぎて守りこし正大寮よ古びたれども

都ぬちにありと思へず自動車のおともきこえず深山みのごとし

朝げにと子のつくりたる雑炊ぞうすいを共にすすりて別れ出で来ぬ



帯広より函館へ帰る途次(五月五日)

北海道・亀田 長内俊平

大沼に近くあたりの湿原に嬉しからずや水芭蕉咲く

わが大君のみ歌を口に誦しつつすがしき花むれながめあかずも

十勝にはまだ芽のかたききたこぶしいまさき匂ふ道南の野に

八幡様にて(五月十日)

裏山に鶯なきて人氣なき社の庭に花の散りしく

ひとしきり吹き来る風にさそはれて雪舞ふごとく花の散りゆく

みたらしの水面みなもに浮ぶはなびらをさけてきよめの水くみにけり

### 韓国紀行(五月二十日～二十三日)

慶州にて(新羅千年の都・西紀前五七年～九三五年)

古の奈良の都を思はするたたずまひかもここ慶州は

国原よもを四方よもにやまなみうちめぐり麦生むぎふ青々春さかりなり

街中まちなかのいらかにまじり芝生ひしまどかの古墳をちこちにみゆ

ますみたるみ空のもとにまかがやく山なみ草木いつか忘れむ

慶州博物館にて

いかるがのみ仏をがむ心地して拝しまつりぬ新羅仏を

ソウル（京城）にて

京城の北にそびゆる北岳の岩肌きびし朝日にはえて

北ゆ吹く風にけづられ南ゆいくたび焼かれしこれの山はも

この山の北二十余里北鮮の国とし思へば身内しまるも

アカシヤの花盛りなる南山のハイウエーをゆく街ながめつつ

みおやらのいつきまつれる南山の朝鮮神宮あとかたもなし（あとに音楽堂たつ）

アリランのうたかなしもよごしかるはげ山をゆく思ひにききぬ

韓国所見

でこぼこの道を小さき韓馬からの荷車をひきゆくブロックのせて

山ふもと群がり住める田舎家のちさき家並いへなみ貧しかりけり

水はりし田の面にあまた田人らの一列なして苗を植ゑをり

初孫・晴久誕生(長女・道子の子)

母が手にいだかれながら湯あみして手足動かす心地よげなる  
黒玉のまなこ開けどさだまらず高天原に住めるがごとし  
ふみたけび泣きいさつ子の赤玉の面をしみればすさを思ほゆ

七月五日、宮城県・多賀城の娘を訪ふ

北海道・亀田 長内俊平

娘の家の裏山いまだ緑多く郭公のなく驚もなく

一つがひの雉もよく来て遊ぶのよと娘は洗濯物乾しつつ語る

浴衣着て潮風遠くわたりくるペランダに座し婿の帰りまつ

すやすやとねむる愛孫折々は笑みを含みつ何夢にみて

生れ来し遠き昔にかへりゆき高天原に遊ぶ夢かも

帰るさに抱けばほのにはほ笑みてめぐさ極まる孫すくよかに

「合宿教室」第四十五班の皆様——雲仙よりの帰途車中にて

楽しい語らひなりしと家路ゆく車中に一人歌を思ひぬ

心こめ語らひたりしと思へどもつくせざりしをかへりみるかな  
班員の一人一人のかんばせの目に浮かびくるつかれし身にも  
もろともに助けかはして日の本のをみなのみちをすすみたまへや

三宅将之兄の「うただより」へのかへし

雲仙ゆ帰るたちまち岡山の友よりつきぬこれのうたぶみ  
忙しきあけくれなりしをかくまでにうたひ給ひし心ばせはも  
運営委員長とふ大任を果たしましたしけるみつかれのいえずと思ふに有難きかな

このごろの思ひ

降る雨に風もまじりて庭の木々ゆれ動くかも生きかへるがに  
朝床に友と語らふ夢みるがならひとなりぬうまし一時  
一日に楽しきときはみ友よりたより来りて開きよむ時

緑田の土手に一群鮮やかに咲き競ひたる曼珠沙華はも  
大空にちぎれ広がるうろこ雲夕日に映えて西空に消ゆ  
鯨雲飛ぶ空のもとカラカラと竹鳴子なる稲田のなかに

福岡地区女子学生の方より刷文・うた文いただきて

部厚なる封書とどきぬその中ゆ刷文うた文いで来<sup>く</sup>つぎつぎ  
菅公の水を鏡にみ心を清められしとふゆかりある地に  
をとめらのよみにしうたをつぎつぎによみゆくときのなんぞうれしき  
一心に思ひをこめてよみまししみうたしよめば力わきくる

夜の体育大会(富山工業高校定時制)

富山・小矢部 岸本 弘

投光機に照らされし庭に生徒らは力の限り競ひあひけり  
逆光の中走りゆく生徒らの顔見別かたず黒き人影  
群抜きて先駆ける子らなりはひの疲れも見せず走りゆきけり

二日目(団体戦)

子らの影黒き群なし舞ひ上がる砂じんの中にしるく浮べり（棒引き）

群がりて行きつ戻りつうばはむと棒引く子らの姿勇まし

引き綱をゆさぶる子らのかげ声は夜のしじまをとよもしにけり（綱引き）

大瀬岬にて（長崎県五島の福江島に旅して）

福岡 小林國男

断崖の岬に建てる大瀬崎灯台しるく青海に映ゆ

大瀬崎岬の鼻の無線所に敵艦見ゆとの電波とどけり

日の本の最西端に位置すといふ岬の上ゆ海を見るかな

遣唐船八幡船ばんせんの通ひしてふ南支那海広がりわたる

みはるかす海づら遠く島かげも舟かげもなくうちつづくなり

み戦いくさにいでゆく兵士つはもの船内ゆ岬ながめて手を振りしといふ

祖国見る最後の島と兵士は万感こめて手を振りしかも

青砥兄に

大阪・枚方まいたか 木村松治郎

いまだ見ぬ君をたづねて新阪急ホテルのロビーをさまよひたりし

おほかたはそれと思へど口に出したづねかねてはゆきもどりせし

君をかこむ友の一人のそれと見て名をつげますに救はれたりし

小料理屋の三階なりしか君をかこみ語りしさまの今も目にあり

新婚旅行記

伊勢にて

見渡せばもみちに山は色づきて秋深みたり五十鈴川辺は  
新しき宮居の前に参り来て告げまつりけり妹との契りを

出雲大社に詣で青砥先生を訪ぬ

大空をぬくが如くに聳<sup>そび</sup>えたる千木を高しと仰ぎみまつる  
夕暮れて辿りつきにし湯の町に師のみ姿を仰ぐ嬉しも

萩にて

萩の町につひに来たりき仰ぎみる空はしるけく山もしるけく  
慕はしき師の眠ります萩の地に今参りきてをろがみまつるも

奥富御夫妻を迎へて

待ちめたる友は来ませり新妻と契り結びし初の旅路を  
新しき家作りせしむ誓ひを捧げ来ませり伊勢の宮居に

東京 奥富修一

神風の伊勢の宮居にうけましし御神酒御鈴をたびしうれしも

御空ゆく雲足早みま日照りてたちまち曇る君送る朝

新妻の手をしとるがにかばひつつ君は出でゆく改札口を

汽車まつま君と語りつうちながむ松江の山々しるくさやけし

西の国萩の地めざし心しる友はたちけり妹ともなひて



昭和四十九年（第十六号と第二十六号）

つね見ゆる裏山の木々吹雪くなべたちまち見えてまた消えてけり  
つねづねは寝る太郎め足跡のなき雪の上走りゆくかも（太郎：家の赤犬）  
チエンつけて雪をけたてて走りゆく大きダンブ車いさぎよきかな  
をやみなく降り来る雪にあたり暗みライトをつけて車ゆきかふ  
街道を行く人まれにうつむきてふみしめてゆく雪の中を  
ふりつもるみ雪にたへて寒空に張りし松が枝ながめあかずも

近作

宮城・栗駒  
星野正雄

ゆふやみのせまれる秋の日ををしみ技ねる子らの声たかまりぬ  
愛宕山中野の里のみかぐらの声さえわたるよるはふけつつ  
栗駒のもろ峰もろ沢ふみならし径あないする人のたのものし

雨やまずみる間水ますもみち川つゑをたよりに早瀬わたりぬ  
くりこまの尾の上にふりし初雪を里のもみぢの上にもみるかな  
めさむれば雪降りやみてひえこみのいやまさりくる冬の夜半かな

星野正雄氏を仙台栗駒山麓に訪ふ（同行、加藤三郎氏）

函館 長内俊平

君が家に近づくころゆ夕ぐれて友駈かる車窓に夕星輝く

十いくとせ会はざる友の姿みれば思ひあふれてことば続かず  
友出だす馳走は黄菊白菊露の蓋またたび茸など友つみしもの  
友が立居常ならざるは酌み交す酒の酔のみにあらざるごとし

桑原暁一大人のことに話はおよびて

よき人にめぐり会ひたるよろこびを語らふしましは言葉とだえぬ

帰り路に雁のわたりゆくをみて

一夜ひとよの思ひむねにあたたためゆくみちの空にかりがね列なしてゆく

富山に遊び廣瀬誠兄にお会ひして（二月四日）

風土記より生まれ出でにし人とかもたまげてききぬ君の言葉を

かへしの便りのはしに

富山 廣瀬 誠

わが心揺れかへりつつ数々の君がみうたをよみてこそゆけ

風土記より生まれいでにし人かとふみことばよみてわれ噴き出しつ

古風土記の鳴りひびくことばよみあげしその夜忘れし君にあひし夜を

呉羽山御歌碑あふぎ思ひけむ君がみこころ沁みて思ほゆ

あやにくに立山見えず雪満てる国原さびしく君ながめけむ

み雪ふる高志こしの国原心にとめ君は出雲に帰りけむかも

また逢はむ日はいつならむかきくらし高志こしの町なみ雪みだれ降る

小野田寛郎元陸軍少尉を讃ふ

三十年日夜わかつた上官の命令守りしますらを君は

敵襲そなに備へて夜はかたむける岩いはのふしどにねむりたりしか

英雄にはあらず唯命令に服せしまでてふ君の言葉よ

捕虜ほりよになるより自決せよと母刀自は渡されし短刀を出で征く吾兒に

三十年母と思ひて短刀を君は持ちけむその短刀を

すこやかな体を母が産みて呉れしそのおかげなりと言ふ今まで生き来しは  
一番つらかりしは戦友をなくしたることうれしかりしはなしと君言ふ  
日の本の武人の鑑かがみか降伏の印しるしに軍刀敵將に渡す  
グッド・バイと言ひのこし敵の国を去りしわるびるるさまなく

今年はじめて燕を見る（四月十二日）

啼き声に夕空仰げば電線にあまたのつばめならびとまれる  
おのおのも旅のこしかた語り合ふ夕べ一時ひとときにぎはしきかな  
つばくらめ飛ぶにまじりて家つきの雀とびかふ友迎ふがに  
電線の高どにとまりさかりなる土手の桜をめでてみるらし  
かかなべて二夜三日を吹き荒れし嵐に桜咲き出でにけり  
裏山の冬枯れの木々黄の色にもえ出でにけり春の来ぬらし

天長節奉祝祭に御製のすり文を頒ちて

函館 長内俊平

娘と妻と三人ならびて祈りこめ一人一人にわたしまつりぬ

幼きもみ手出すあれば父上にもちかへりてよとさとして渡しぬ

日の本に生れし甲斐あり今日集ふはらから大方謝してうけとる

夕まけて空にあかねはさしたれど冷たき風の吹き止まずけり

奉祝の祭りはいまか終るべく聖寿万歳の声きこゆなり

思はずも立あがりつつもろ手あげ万歳となへぬ声を限りに

さらでだにめぐきをわれと廊に立ち刷文わかつこれの妻娘は

薩南学舎の開寮に当りて

鹿見島 川井修治

意気高き薩摩をのこらつどひして薩南学舎今日開くかも

日の丸をかざる床まへこもごもに決意のぶるを聞けばたのしも

わが持てる松陰先生の一幅を今日の記念とさづけつるかな

ひむがしのいらかの上に桜島の偉容を仰ぐこの眺よし

桜島のいただき高く吹きあぐる噴煙のごと生命燃やさな

薩南学舎開寮を祝す

心まちにまちにまちたる鹿兒島に学舎開きし知らせうれしも

み友らが幾年期して念じきし願ひかなひし知らせうれしも

み友らをしぬびつながむる南の山波やまなみこめて雲立ちわたる

薩南の友ら思へば桜島煙噴く山うかびくるかも

出雲路は今春はるさか盛り紫の藤波の花風にゆれをり

青木繁作「海の幸」を東京ブリヂストン博物館に見て

十人の男三尾のわにぎめをになひて行くよ波よする浜を

朝日影今さしにけむ顔胸のこがねの色に光り輝く

しとめたる獲物二つに折りなしてもりを竿さそとしかつぎゆくかも

かつぎゆくわにぎめ重くになひ棒のくの字にまがり尾びれ引きゆく

重たげに肩をすくめてこちら向く若者の顔しげら繁なるらし

デッサンの下絵のあとをちこちにのこるをみつつつ君ししぬぶも

遠々し白兔いちめしわにざめをはだかの男退治しけるかも  
西洋の才ざえに学びて明治の世ふることのいのち画かきし君はも  
開花の世流星のごと輝きて燃えつき早く世ををへにけり

「海の幸」を詠み給へる青砥さんの歌に

北九州 山田輝彦

万葉のうたのいのちをさながらにうたひ上げたり高きしらべに  
君がうたよみつつ思ふ不可思議のいのちもちたるますらをの君  
ことそぎてますぐな心一すぢにうたひこめたりこれのみうたに  
わだつみのさやけきひびき聞くごとし思ひこめたるすりぶみよむに

桑原暁一さんの御法要に詣らんと上京の途次

下関 宝辺正久

近江路は水田に山のかげすみて朝もやの中わが汽車はしる  
さみどりの苗の水田をすがしとも見つつ馳せゆく君がみまつりに  
一すぢに国の地熱を思ひたりし君が思ひを恋ひわたるかな  
かけてねがふ今はのきはのみことばはわが耳にいまとどろききこゆ

青砥兄へ

雨雲のふきはらははれてあをあをとほれわたりたりけさの大空

おこたりて言問ふこともなかりけりみ子のみやまひあつかりし時も

ますらをとたのめる吾子のみとりせるかなしき心をうたひけり君は

父母のあつきいのりの通ふごとく生き返りたるみ子にてあるらし

親子はらから相勵まして皇国に仕へまつらむいきほひかしし

わが庭の小松の芽出ち朝の日に輝きたちて夏は来向ふ

み便りに「毎日良い雨が降ります」とありければ

出雲路の友の言葉よ良い雨が降りますといふ便りの始めに

田人我が心に通ふこの言葉声に出してくり返し読む

気疎しと言ふ人多きこの雨を出雲の友は良しと言ひたり

天地の恵みの雨に我が植ゑし小稲豊かになりまさりつつ

故星野正雄大兄の御霊前に捧ぐ

虫の知らせ君にありしかはるばると出雲の国をたづね来ませり

時によりストも良きかなと久々に酒くみかはしし十四日前

横浜 関 正臣



いつかしき顔にはあれど君の笑顔三十年前と変らざりしを

混とんとみだれみだるるいまの世の教へのみちをなげきかたりし

身をもちて正し来れりまたさらに正しゆかむと君のたまひぬ

教へ子ら礼儀正しく玄関にあいさつをして西へ下りぬ

暑き日を北九州の遠征に無理たたりしか思へば悲しき

つはものは大御軍おほみいぐさに人の師は遠征に死にき本懐ならむ

新年にいただきまつりし君のうたとりだしよむに胸はつまりぬ

霧島の合宿にして君のこと語り合ひたり君知る友と

(青砥註……宮城県立・岩ヶ崎高校長・星野正雄氏(国文研会員) 遠征先の福岡県にて突然御逝去さる。高体連全国大会(北九州市)に宮城県代表としてハンドボール女子高校生を引率し、たまたま新幹線ストにて山陰線經由西下の途次、弊館に立寄らる。三十年振りのことなり。それより十四日後に悲報に接す。)

黒上先生の御墓に詣でて

夏の陽のふりそそぎたる青石に師をたたへたる文字を読みゆく

姫路 伊藤三樹夫

おくつきを思ひをこめてをろがみぬ師のみすがたを見るこちして

じりじりと陽は照りとほり墓石をとかすごとくに時すぎゆきぬ

持ちてこし御本ひろげてその文を読みあげゆきぬみ墓の前に

墓まゐりすませてのちにあふぎみる眉山の山に蟬鳴きしきる

(青砥註……黒上先生の御墓は徳島市佐古三丁目清水寺境内にあり。本堂の裏、百米位のところ、墓守りの庵の前。清水寺は諏訪神社の南隣り、この神社目標に行く  
とよい。タクシーの運転手もこの神社は良く知つてゐる。国鉄徳島駅より車で五分)

黒上先生の墓に詣でられし伊藤三樹夫氏の歌を読みて

長野・小諸 宮脇昌三

いつかしき黒上先生のみ墓にぞ詣でしみ歌見つつうれしき

大み墓徳島市佐古の清水寺にありとふ記事を見出でてうれしき

さきつ年インターハイの暑き日にみ墓もとめてさまよひたりし

行きゆけど聞けどわからぬみ墓をば夏の半日さがしあぐみし

やさしかりし母堂の君の阿波なまり年経し今も忘れかねつる

心こめてみ墓のありど記しおきいつかまゐらむ眉山のもとに

『青砥通信』を友らに送るとて

いざやいざガリを切りなむみ友らゆたびにしうたのここだ集ひぬ

いのちなき原紙に文字を切りゆけばいのちみちみつくしびなるかな

み友らの住所名前を切りそろへ封筒に貼るたぬしこのわざ

み友らは目前まきかにあらねど一人一人おもかげうかび力わきくも

うたかきて送り給へやうたぶみを吾待ちてをりそのあけくれを

上京の折、機上より富士山を望む

福岡 小柳陽太郎

流れゆく雲のかなたにおぼほしく富士のいただきいま見えそめぬ

黒々とその頂きのあざやかに迫りくる見れば胸高鳴るも

名も高きアルプスすべて雲にかくれ富士の嶺一つ天そそり立つ

日本一の山は富士の嶺なみつつく雲したがへて天そそり立つ

身じろがでみつむるうちをしづやかにしりへにしりぞく富士のともしさ

ややややに時すぎゆけば見はるかす西空なべて朱あけにそまりつ

目路めぢのかぎりつづく雲海の朱あけにそまりそが上に立つ黒き富士のね

房総の山々見えてかへり見れば朱のうすれて夕暮れ迫る  
黒々と雲沈むかなた遠ざかる富士のみ山に別れつげつも

ニューヨークにこの秋に移転せる長女・静代（公文）より

東京 小田村寅二郎

電話ありき、と妻より知らせ来れば

予定日より二十日も早き安産としかも男の子の生れしとの電話  
海越えつみ空わたりつ来しごときこれのしらせのうれしきろかも  
妻も祖母もわれもことごとこのしらせうけてうれしさとへむかたなし  
高知なるみ母のもとにわが妻の知らする声も張りありたらむ  
娘のみ三たりなりけるわが家に外孫とは言へど男の子生れにし  
嫁ぎゆきし吾娘の生みにし男の子なれどわが家に男の子生れし思ひす  
すこやかに育みたまへ上の子とともども永久に真直ぐなる子に  
一姫と二太郎といふ現し世のみ子のめぐみをかしこみ思ひつ  
母親のからだの痛み一日をも早くいやして立ちませわが娘  
よき父とよき夫兼ねぬる婿どののゆたけきゑまひ見るが心地す

玉造温泉に青砥宏一大兄をお訪ねした折を追想して

倉敷 三宅萬造

はるばるに訪ねしいで湯玉の湯にひたりし旅の念ほゆるかも  
旅人の心しみじみ温く一夜の宿り忘れかねつる

湯にひたりみそぎみそぎで神詣でする湯ときけりこれのいでゆは

旅人の心温むる玉の湯の主人あるしの心清しかりけり

出雲路の神話の国の玉の湯のこんやの大人うしのなつかしきかな

大岡弘君のよめる奥富君長女誕生の歌をよみて

人の親となりし驚き何時の世も変らぬものと思ひけるかな

未熟児の吾子の頬ほほをば指打ちてミルク吞ませし事もありたり

普通児の何分の一しか乳吞まぬ吾子みまもりて日々を過しつ

日当りよき窓べに二児をみかん箱の上に並べて育てたりけり

夜な夜なに双児用にと檻をりの如き寝台作りしこともありけり

狭き家を駆けめぐりつつ忙しくたち働きし妻にてありし

前うしろ子等を背負ひて雪の朝物干しし妻思ひ出しけり

下関 加藤善之

## サイパン島・グアム島紀行

このたび三泊四日にて両島を訪問して来ました。小生グアム島（大宮島）は、昭和十九年二月、戦争中七日間トラック島に進出の途次滞在せしことあり、また戦后復員前（昭和二十一年七月—十二月迄）米軍建設作業に協力すとて、部下百名と共に過しし地である。両島共に玉砕の地であり、曾つて「遊び気分で行く所でなく、身そぎして、かしこんで行くべし」と書いたことがある。縁あつて訪れた。

サイパン島スベ村コンチネンタルホテルにて

ハイビスカスの赤き花はも戦友に会へるがごとく風にゆらげり

NEノースイイの風しき吹きて空青く南洋松は片なびきせり（内南洋は常に北東の風が吹く）

ホテルの庭みぎはべゆけばあな悲し赤茶け朽ちしトーチカ建てり

艦砲射撃のあと生々しトーチカの鉄筋のまがりて大き穴あく

トーチカをのぞきてみれば旗亭にて洋酒ならべりいかなることか

この内にわがつはものは米軍とうち合ひやはて討ち死じにしけむ

あの辺りリーフあるらし浜近く一線白く波くたくみゆ(リーフ……珊瑚礁)

ゴーゴーと鳴る海なりの音ききつ去りがてぬかも昔思へば

夕餉<sup>げ</sup>終へ一人おりたち庭ゆけばそことも知らず虫のなくなり

くらやみに耳をすませば虫のねのいよいよしげし吾を呼ぶがに

朝まだき砂浜ゆけばみぎはべに海藻ただよふ吾は悲しも

黒雲のたちまちわきて風吹けば椰子の葉たたき早雨<sup>はやさめ</sup>の降る

現地人持ちて来りし椰子の実の水をし飲めばほろ甘きかも

中部太平洋方面最高司令長官・南雲忠一中将自決の洞窟またそ

の附近のバンザイ岬、マービ山の絶壁(百数十米の岩の上から

捕虜にはならじとて邦人現地人多数投身自決せり)の地を訪れて

うちなびくタンガンタンガンの森緑こく悲しき島をおほひつくせり

(タンガンタンガン……ねむの木に似て生長が早く、米軍が占領後、

島を緑にするため、飛行機で種をまいた木)

仰ぎみる百米の断崖に艦砲射撃のあといちじるし

この崖の上より下へ飛込みてうせにし人のあまたありてふ

その骨はいまだ草むしそのままに横たはれりとガイド告ぐるも

御軍みいくさはいまこれまでとこの洞にはてたまひしか南雲中将

波枕いくたびなりけむ提督は南のしづめとここに眠らる

おとづれし人らと共に慰霊碑にむかひて歌ふ「海ゆかば」のうた

北東の風しき吹きて目もくらむま下の岩に波くだけ散る

天皇陛下万歳ととなへつつ祖国にむかひ海に入りにしはらからたちは

グアム島慰霊塔にて（十二月十九日）

我が知れる亡き戦友のみ名よびつをろがみをれば涙わきくも

三十年前この島にしてわかれたる友の面わの忘れかねつも

日本より持ちて来りしうまざけをささげまつらむうけたまへかし

両の御手合せし形の慰霊塔グアム高台にそそり立つかも

再びは来ることあらじと思ひ居しにいのち長らへまた来つるかも



北鮮日本人妻のことを

下関 宝辺正久

行くへ知れぬはらからあまたいますといふ北朝鮮の空遠きかも  
囚はれし人にも野にも雪暗く吹きつつあらむと思ふもかなし  
西の海にひろごる雲のひとつとこころ青き空みゆ日本の夕は  
囚はるる如くに生くるはらからを救はむすべもが年暮れゆくに

### ひざかけ

福岡女子信和会一同の皆様(代表、福岡教育大生・味酒景子  
さん)から、日頃御世話になつてゐるとて、「何かお礼をと、  
みなで考へた結果モチーフを手分けして編んでひざかけを作  
りました。色やがらもバラバラですが、寒い夜などにおひざ  
におかけ下さい」と、年末に毛糸の「ひざかけ」を送り来つ  
れば、あまりのうれしさに(十二月二十七日)

寒き夜はひざにかけよと送りこし乙女の心うれしかりけり

雪国の出雲路寒しと乙女らが編みてたびにしひざかけぞこれ

手分けしてあみたまひたるひざかけの糸糸の色の色のよきかな

市松の模様にあみしひざかけの一目一目ひとめに思ひこもれり

ひざにかけもの思ひ居れば乙女らの顔つきつきにうかびくるかも

乙女らがつぎてあみにしこのひれは千人針に思ほゆるかも

あがことを語り合ひつつさよひめ佐用媛のえい裔らがあみけむこれのひざかけ

一人居てさぶしきときはひざかけをかけて思へば力湧きくも

昭和五十年（第二十七号）第三十四号

輪読会に青砥宏一先生をお迎へして

大阪 徳丸雅信

お疲れの御体おからだいとはず輪読に馳せ来てくださる御心ありがたし  
足らはざる会にはあれど師の君を迎へし今日の輪読たのし  
明日はまたお仕事あると聞くにつけいよいよ御心有難く思はる

女子合宿（三月八日・鹿児島県山川町）参加

北九州 山田輝彦

赤茶けし阿蘇の山肌左手に見つつ機は飛ぶ鹿児島さして  
天草の海もかすめる雲仙の山もたちまち目路ゆ遠のく  
こぞの夏友らのぼりし高千穂の山そそり立つ春のみそらに  
しろじろと真日は照りたりつくしなる南の果の鹿児島町  
桜島の白き煙の片靡くかなた弥生のみづいろの空  
玄海の寒きうしほを見なれたるまなこにまぶしわだつみの色  
沿線の駅に木蓮咲きみちておだしき春日にゆらぎやまずも

特攻機つばさふりつつ別れをば告げし山といふ開聞の山

開聞のふもと麦の穂並み立ちて薩摩国原春さかりなり

遙けくも来し心地して山川の潮の香のする駅に下り立つ

かかる地に乙女らつどひひたぶるに学ぶを見れば涙ぐましも

いのち生みいのち育つるをみなごのつとめ説きけり心傾け

女子合宿に青砥宏一先生から電報をいただいて

福岡教育大生 品川順子

幾度も導き給ふ師の君ゆみうただいだきてうれしく思ふ

師の君の三十一文字にたくされし願ひのままに学びてゆかむ

故松吉正資兄の故郷大島墓参

下関 宝辺正久

光り輝く銀波ゆたかにめぐらして大島は立つ瀬戸のもなかに

浦々をめぐりてゆけば濃き海を透して底の白き目にしむ

みかん山のだんだん畑をたづねゆき友が家訪ひし三十年前に

みかん畑の高きにありし友が家はいつくぞ春の空はれわたる

海の辺のしづけき寺のみ墓辺にまゐり来りぬ妻子と共に

亡き友と共にいたたく心地して誦みまつりけり大御歌五首

身をくだきみ国守りしなき友がひた祈りたる忘れざりけり  
年月の願ひ果してみ墓辺に香奉るわが妻も子も

中国地方青年合宿記録及び短歌詠草をいただきて

まづ開く感想文の学生の所感いかにとよみてゆくかな

つたなかるわれの話をかくまでに書きとどめましし心ばせはも

すりぶみをよみゆくうちにしくしくに友ら思ほえ涙ぐましも

一人はも決意をすればそのもとに友ら集ひくる忘れて思へや

(青砥註……この合宿は関西、中国在住の若き国文研究会員の久々宮章、田中輝和、高岡

正人の諸兄が発起人となり、昨年秋、全国の地方別合宿に呼応して笠岡で開かれました。各々仕事を持つて居る者が、忙しき最中に集り、ここでお互に確認したことは、「一人出家すれば魔宮皆動ず」と云ふ聖徳太子のお言葉でした。特に久々宮章兄の悲願によつて出来たと思はれます。なほ合宿は四九年十一月二三〜二四日に行はれました)

たよりのはしに

神奈川・相模原 吉田靖彦

八雲立つ出雲の友ゆおくりこしすりぶみのうたくりかへしよむ  
歌よめば遠くひさしくあはざりし友のおもかげうかびくるかな  
けざやかにむかしの記憶よみがへる歌とふものにくすしくあるかな

御在位五十年の天長節に

下関 宝辺正久

紀の国の沖辺はるかに望みます若き日の大君偲びまつるも  
大御代の雄々しくあれと立山を仰ぎましけむ大君を思ふ  
すめくにの危ふき時はひとりして難に堪へ給ひし大君たふと  
帰りこぬ民をば待ちに待ち給ふ大御心ときけば泣かゆも  
五十年のみいつくしみのおん心したひまつりてみ民らは生く  
おほぞらにみなぎらひつつふるあめに緑の若葉いやあらたなり  
いちはつの花伏しぬれてけふの日を迎へまつるも心しみみに

『青砥通信』を友らに送るとて

五月はも末にはなりぬうただよりいざや送らむ友らのもとに

あちこちの友らたよりをまちますと思へばうたを送らざらめや  
書斎よりみる庭のべのかしの木の若葉日毎にいろまさりゆく  
夕日いまかしの若葉にてりはえて風にさゆらぐうた思ひをれば

かへしのうた

下関 宝辺正久

『青砥通信』を待つとふ友にひとりしてガリ切る青砥よ指なえにけむ  
日の落ちていよいよ暑き夏の夜は汗したたらむ蠟紙の上に  
めいめいに歌ひておくる友の歌を編むとガリ切る友ぞたふとき

伊豆・須崎を訪ひて(六月二十五日)

大君のおなりどころとしたひてし須崎の里に車かりゆく  
梅雨空のふりみふらずみ朝早き下田の港みどりしるけし  
運転手よき男かもこの里の海山がたりききゆくたのし  
五日前大君みやこに帰りたまひ今いままさずと聞くにかしこし

道の辺に金柵かなさくつづくこのあたりいでましどころと身内しまるも

みどりこき林の道を下りゆけば海の開けて船溜りあり

入り海のかなたに見ゆる海にのぞむ建物かしこし御研究所なる

きよらかに澄みし海底ながめつつ大御研究しぬびまつりぬ

入り海の御研究所は遠浅に御一家汐あみしたまふところ

岡の上の林の中の建物をおなりどころとはるかをろがむ

岡こえて利島かすかとよみましし利島は見えず霽もやにかくれて

波風のなき海原はうちがすみ伊豆の七島みんよしもなき

大君もながめますらむ爪木崎鼻つめきの小島に波よするさま

水仙の野生の名所この崎の花のさかりをかけてしぬびつ

七十の媼おうなになるもはらみめももぐる須崎の海女あまはたくまし

雪ふらぬ南伊豆なるなりどころ思ひかなひて今日見つるかも

(青砥註……伊豆須崎は、下田港の北東にあり、車で約十分のところ、御承知の如く皇

室の御用邸のあるところ。昭和四十八年御発表の「伊豆須崎にて」の御製以来、「須崎



の夏」「須崎の冬」「朝」の御製に拝するごとく、親しい地名のところす。下田から定期観光バスも出てをり、これは「爪木崎行き」です。御用邸は、その途中、東側一帯の丘陵深い林の中にあり、また海岸に面してゐる。旧三井氏の別荘のあととのこと。敷地は約五万六千坪。車の前をヨチヨチと野生の雉が歩いて森のしげみに入る様子は、まことに御風格が鳥獣にも及んでゐる様ところ。松陰先生が米艦に乗込まうとせられた地点は、須崎と下田との中間にある)

青砥安一兄より黒上正一郎先生のお墓に参られたことをききて

東京 高木尚一

師の君のみ声なつかしくもみふみもよまずすごしし我は

あひまつることもなかりし友らあまたみ墓にまゐるときくぞかしこき

出雲路は山なみ青く天つ日の光しみ入る夏の木立に

蟬の声しげき庭べに鳥あまたむれてあそべり君がみ家に

目にみえぬいのちのつながりうつしくも信じてゆかむけはしきこの世に

(青砥註……このおうたは高木先輩出張の途次、こんや別館にて御宿泊の折色紙に書いていただいたものです。) ^ 編者註・このお歌は七月十六日によまれたもので、色紙は高

木尚一遺文・遺歌集『ひとすぢの信』に載つてゐますV

あさ（九月三日）

み友らにうた送らむととくおきて筆をはしらす午前五時かな  
窓の辺にしきなく虫の声々を耳をすまして聞きつつうたかく  
虫のねにまじりきこゆるにはとりのなくねよろしもうらの家より  
むしのねをききつつ思ふむしのいのちうたひたまひし明治のみかど  
家人はいまだねむるを文机ふづくえによりてにぎはしき虫のねをきく  
あの声はかねたきぞと藪入りの吾子の言ひしを思ひ出づるも  
まちなかにすめる友らにあさあけの虫のねとりがねきかせてしがな  
くさぐさのことを思ひつ虫のねをきくがまにまに夜は明けにけり  
むしのねをききつつ友ら思ひつつうたかくうちに力わき出づ

故海軍中尉・和多山儀平氏之墓参拜

下関 宝辺正久

朝露になほぬれのこる草わけてはじめてまゐる君がおくつき

支那海に戦死せし君がみたまこのふるさとしづまりたまふ

懐良親王遙拝の瀬も近きこの山かげに君がみたまはねむる

黒の瀬戸のつよきしぶきをうたひたるますらを君のおもかげしるし

墓碑に刻まれし遺歌に「国のためののちの限り

はげまんとちかひしころ万世までに」とあり

国のためののちの限りはげみたる君の一生を忘れておもへや

み墓辺を去りなんとしてはとりのときをききけり日は高くして

天皇・皇后両陛下御訪米御安泰祈願(九月二十五日)

紀の国の沖の海原空かけていでたたします日近づけり

秋空はすみまされどもいでましの近づきくれば安からぬかも

八百万の神たちことごと大御身をもりまつりませと祈るのみなる

アメリカの山川空も心して迎へ奉れ君がみゆきを

しき波の八重のかなたの国をおきてはや帰りませその日待たるる

天皇・皇后両陛下訪米より御帰還をテレビにて見て

スイッチを入れるればまさをの大空に飛行機みゆる御召機らしも

飛行機のかげはみるまに近づきて今しおります羽田空港に

今し今わが大君は日の本に帰りたまひしつがなくては

飛行機の窓ゆかすかに大君の御姿拝すうれしからずや

久しくもおもひたまひしアメリカの旅をへましてかへりたまひぬ

タイ国紀行（十二月四日～八日）

バンコク市より、空路北方二千料の古都チェンマイ市に行く

飛行機の窓ゆ見おろす国原は海原のごとはてもなきかな

国原をまがりくねりて流れゆくメナム河はも大蛇せうちに似たる

黄緑のモザイクはりし絵のごとく美しきかもタイの国原

国ぬちの四分の三は平地にて米産こめさんすてふ瑞穂の国か

遠々し瑞穂の国のみおやらを思ひやまずもこの国に来て

チェンマイゆはるかながむる遠山のつらなるあたりラオスなるらし  
政権の変わりて間なき隣国のラオスの山々この目にて見し

再びバンコクに帰り、夜タイ国古典舞踊を見る

棟方の志功の刻みし舞姫のこの世に出でて舞へるがごとし

バンコク空港を去るに当り、西の方ビルマの古戦場切

にしのばれて

西の方ビルマの方をのぞみつつうせにし人をはるかしぬびつ  
遠山に雲かかれるを見つつあれば吾は悲しもいにしへ思ほえ  
年うつり人ら変りて古へのいくさをしぬぶ人まれにして

帰途、給油のためマニラに寄る

緑濃きフィリピンの山こしかたの思ひかなひて今日みつるかも  
うちかすむ遠山あたりボタンとぞ聞きてはるかにをろがみまつる

昭和五十一年（第三十五号〜第四十一号）

八代、加藤敏治兄へ（二月）

下関 宝辺正久

春早き朝のめざめに球磨くまの瀬を思ひつつあり君いかあらんと

朝の気は冷たくあらんせきこみてあらずや君が臥しどの上に

咳せきくいきを目守りて心いためますなが妻のみこころいかにあらん

球磨のほとりあかるき春の朝空を仰ぎて心放ちたまへや

もの言ひて咳きこまむよりむらぎもの心をうたによみて足らはせ

花咲くや春来りなば球磨の土手を君と歩まんうたもうたひつつ

函館、長内俊平兄へ

わが友のことば光りてわがむねによみがへりくる街ゆくときも

友のことば思ひうかべてやちまたにありつつうるむわが胸も目も

遠くより友がいそそぐあたたかきつよき光を感じをりわれは

玉造温泉に青砥宏一兄を訪ねて(三月二十日)

熊本 瀬上安正

玉づくりのいでゆのさとに一夜かけて語らんものと出でたちて来ぬ

八雲たつ出雲のくにに球磨川の焼酎さげてはろばると来し

すさのをの命みことのいのちそのままに君は居たまふ歌よみしつ

すさのをの命みことなつかしそのははを恋ひわたるとふ命みことなつかし

伏見桃山御陵参拜(三月十五日)

ひさかたのあめにのぼれる心地してきだはしのぼるみささぎさして

きだはしのながくけはしくときどきはいこひてのぼる息ととのへつ

大空に雲はあれども御陵みささぎゆ仰ぐ御空のはてもなきかな

はるかにもをろがみまつるまどかなるみささぎただにかしこかりける

みささぎの大前広く若松のみどりのいろのいつかしきかな

吾子とふたりをろがみまつる「み民われらもろともにまめやかにわが大君に

つかへまつらむ」と

大君の御歌誦すればおのづから心うれしく声たかまりつ

吾が声のとどけとばかり大君の御うた誦しぬ声はりあげて

太宰府・女子合宿にて青砥兄と行き違ひになりしことを

北九州 山田輝彦

たまゆらに相見たちまち別れけり言葉かはさむいとまあらなく

みやこより帰り来ましていこふ間もあらず筑紫にはせ来まししか

一すぢに身もたな知らずつくしますみ姿見れば胸迫るかも

すりぶみのうたのしらべにくぐもれる思ひことごと解き放たるる

かりそめに病みてこもれば一しほに君がみうたのしらべ身にしむ

恩師・久松潜一先生のご逝去の報に

長野・駒ヶ根 宮脇昌三

思はざるつひのみゆきを春浅き信濃の国にただに泣かるる

この秋は信濃の国に迎へんとひたにたのみし心たがひぬ

師の君のみ魂は遠く上つ代のふるさととめて天がけるらむ

たらちねのみ親にまさる師の君の長きめぐみを忘れて思へや

みすずかる信濃の国ゆ天がけるみ魂をただにをろがみまつる



一般参賀にて

東京 青山直幸

お姿を現はし給へばをちこちゆ割れんばかりの喚声起りぬ  
にこやかに御手うち振らるる御姿を見れば覚えず胸高まりぬ  
ただひたに小旗うちふる吾が妻に負けじと吾も小旗うちふる

出雲の友を迎へて(六月十四日)

東京 長内俊平

出雲路ゆ来りてホームに我を待つ友の姿をいち早くみとむ  
手をとらむ思ひに耐へて「おい」と呼べば「おお」と答へて顔あげし君  
たまゆらのそのほほゑみのよろしきはわがむなぬちにやかれてのこりぬ  
車たのむすべはあれども友を率て川すぢ道をたどりゆくかな  
わが友は木々の緑のしるけきを言に出だしてみたび賞めにき  
街なかの川に鯉むれ泳げるをまたおどろきの声あげよるこぶ  
友を迎へ食めば食むもの語らへば語ることみなこころたらへり  
御製拝誦友と並びてつとむればこころひろびろとひろごることし  
朝食を終へしわが友は朗々と木下道雄語録を誦しまつれり

わが妻も嬉しかるべし出だしたる馳走をほめつつよろこぶ姿に

みちのく、えぞ地紀行（六月十六日～二十一日）

仙台に故星野正雄・加藤信克両大兄（共に日本学生協会員、前者病死、後者戦死）

の御墓に詣つ（同行、長内俊平、加藤三郎、小沢甚一郎三氏）

御墓辺にしばしたたずみなき友のありし日のこと語り合ひつつ  
なき友も語りますがに木の間ゆも郭公のなき鶯のなく

津軽海峡をこゆ（六月十七日）

いくそたび思ひゑがきし海峡を思ひかなひて今日渡りゆく  
連絡の船のデッキに出で立てば青森港みなと風寒きかも

本州の北のはてなる青森の駅おびただしく貨車の行き来す  
太く長くいぶくがごとく汽笛鳴る音をしきけばうらがなしもよ  
友どちのあまたうたひしこのうみのうた思ひつつえぞに渡るも

うすれびのうみにうつりてかがやける夕ぐれデッキを去りがてぬかも  
暮れてゆく津軽のうみに本州の山なみいつかもやにかくれぬ  
渡りゆくうみ静かにて船室の温かなれば吾はねぶたし

亡夫「正雄」の墓参を謝す便りのはしに

仙台 星野艶子

昭信のみ友ら四人集ひ給ひ語らふ今宵夫在りてあませば

断りもなしに逝けりと亡き人を慕ふ余りのみ友の言葉

松江なるみ友に残せし言の葉の今宵ぞ聴けばただ懐かしく

篤き信に睦みしみ友と共に在りしその青春のしぬばゆ今宵

み友らの篤き祈りに亡き夫の御霊慰む今宵なるらむ

山室山奥城参拝やまむろやまおくで(七月十八日)

山室の奥城したひはろばろに車はしらせ詣でつるかも

太き杉桜しげれる参り路をいきせきのぼる奥城さして

この山を千年の春の宿としてさだめたまひしみ心思ふ

なき翁ののこしましつる風知らぬ花をもとめてゆかむと思ふ

本居宣長の歌

山室に千年の春の宿しめて風に知られぬ花をこそ見め

奥城の石に手当てて祈るなりくしびのいのち与へたまへと

奥城を仰げばなつかし文にしてみしそのままの墓の立ちます

出雲行（九月三日）

東京 長内俊平

隠岐みゆと驚き告ぐる友のさす海面にかすか隠岐のしまみゆ

神魂神社参拝

神魂宮の参り路よれきだはしはうすずみ色のきよらなる岩

神域の谷水そのまま樋にひきみたらしとせしがまたきよらなる

空へぬけるにやと思ふばかりの急段の盡くるたちまち拜殿の前

簡素にして軽からず豪にして重たからず宮柱太しく天に立てりしみあらか  
をろちふく血にそまるとふるごとに伝ふる肥の川をいまみつるかも

宍道湖はいまやくれゆく雨雲の重なり厚くうみを被ひつつ

同夜、青砥宏一兄宅にて

客に接する友の態度は堂々たる宿の主人よほほ多みてみつ

雨にけぶる枯山水の庭の面に白萩ひともと咲きてすがしき

この萩をみつつうたひし友のうた念ひつつながむれば見あくことなし

今上天皇大御歌「宍道湖」(昭和四十年)

夕風の吹きすさむなべに白波のたつみづうみをふりさけてみつ

夕風の吹きすさむなべにと声合せいくたびくりかへしまつる君か駆る車中に

宍道湖は今日は小雨にけぶるかな見送る友と見あかさざりけり

バスは来ぬいまひとたびと大み歌誦しまつりつつ別れ来にしか

鷺一羽小雨にけぶる宍道湖のみぎはの石に佇ちて動かず(帰りの車中で)

山陰地区視察団・ブラジル親善訪問紀行(九月十一日～九月二十七日)

九月十一日、羽田発ホノルル着

空港を出づれば目につくブルメリヤその白き色何ぞすがしき  
仰ぎみる高き椰子の木雲のなきブルーの空に葉のそよぎをり

九月十三日、ロスアンジェルズ着（十七時）

ああ遂に吾は来にしかさまさまに思ひゑがきしアメリカ大陸

「この浜よする大波はカリフォルニアの岸を打つ」とうたひつつタラップ降りぬ

アナルズ着、ロビーに行けず空港に一步を印せしのみ

ま日うけて白く輝く海山はいづべなるらむ夢のごとしも（カリフォルニア）

北米ゆ南米たかく空かけて行くとし思へば心をどるも

赤茶けし国ぬちひときはみどりこくみゆるところは農地なるべし（メキシコ）

赤道を今し越すらし真夜中に地図開きつつせまき機内に

今吾ら赤道越すらし祭りをもなさず真夜中ねむりつつゆく

九月二十一日、ブエノス・アイレス着、パリを模して作りし

街とのことにて、どことなく垢ぬけした感じの街なり。

到着の日は、南半球では立春の日（日本とは反対）なり。

春の到来を喜ぶアルゼンチンの人達が街にあふれてゐた。

東山魁夷ゑがきし絵のごとき木々のたつかもブエノス・アイレス

アルゼンチン今日春立つと夕まけて歩行者天国人のどよもす

この国はタンゴの本場小夜ふけてちまたの小屋に楽しみにけり

バイオリンの桿<sup>きん</sup>さばきはもものふの快刀乱麻とふるふがごとし

男女<sup>をとこをみな</sup>ペアとなりて足げりに床<sup>ゆか</sup>たたきつつ踊るさやけし

人よりも牛の頭数多きてふアルゼンチンは牛の国かも

春日<sup>はるひ</sup>てる旗亭に座して大きな肉の焼きたて食ひにけるかも

九月二十三日ブエノス・アイレス発(九時)アルゼンチン航

空にて南米の屋根アンデス山脈を越えペルーのリマに着く

飛行機は今し越えゆく南米の屋根といふなるアンデス山脈

海原の上をゆくがに雲の原やまの秀海<sup>はな</sup>の島かともみゆ

リーダーにただにたよりて雲ぬちを空港さして機はくんだりゆく

雲ぬちを大ゆれにゆれおりゆけば雲のあはひゆ空港のみゆ

緑こき国をし去りて今つきしペルーの国内みどりすくなし

黄塵のまきあぐる大路の両側にきたなき家のひしめきてたつ

砂漠とはさびしきものか街路樹に日ごと水かけそだてるといふ

文字もたぬ民族悲し四百年前に亡びししぬぶよしなき（インカ帝国）

百万のインディオオペストの流行に一年にして滅び去りにき

草も木もはえぬ丘べの神殿の遺跡にインカしぬびつるかも

墓ほりて得たるミイラと焼物の博物館に展示されをり

その昔住みてをりけむアルパカの悲しなき声忘れかねつも

天皇陛下御在位五十年奉祝祭に「御製」を配りて

富山大生 澤田哲郎

大君を祝ひまつらむこのよき日吹きくる風もおだやかにして

近よりて御製の刷文下さいと言はるる人のありて嬉しき

配りゆく陛下の御歌読みゆきて喜ぶ人の声の返りく

青砥宏一先生にお会ひして（十二月二十六日）

福岡・甘木 味酒景子



いらつしやいと声の聞こゆれば思はずもとびあがる如くふすまあけけり  
にこやかに入り来ませる師の君の御顔を見れば胸のをどりぬ

こたつはさみ間近に居らるる師の君に御話をうかがふことのありがたし

日の御碕

日の御碕の白き燈台に歩みゆけば雪のまじれる冷たき風吹く

晴れたらば隠岐の島も見ゆるてふ燈台にたてば海荒々し

波の穂に剣刺し立て国譲りのことのは交されし神々のありき

国引きのなされし崎てふ島影の雪にかすみてうすく連なる

師の君のたまひし国引きのををしかるやまことばの思ひ出さるる

母のことを

東京 長内俊平

かたへにあるひとときひとときをひととせと思ふ思ひにつきそひまつる

遺稿集あみつつみとる点滴の母はかすかにね入り給へり

(遺稿集とは国文研叢書『いのちささげて』のこと)

食細き母にくさぐさもとめきてわがすすむれど食は進まず

その母の歌

手術後の便秘になやみたる末にわれははじめて牛乳をのむ（生れて始めて牛乳をのむ）  
あつきタオル絞り替へては病む我の背なふきくれて嫁帰りゆく（僕の妻のことを）

大学生の孫はリュック背負ひつつ入り来り大き手もてわが手握りぬ

昭和五十二年（第四十二号〜第四十八号）

かへし（加藤敏治兄へ）

一年をふり返りつつ来む春を待つとふうたをくり返しよむ

年暮るるその夕闇に雷鳴をひとりきけむ君をし思ふ

妻や母子達も深く憂ひまししその一年を君のりこえつ

遠くゐてすべはなけれどわが目にはしみてうれしき「よみがへり」のうた

くるしみも悲しみもありしこの年に友の思ひ出をかきつぎし君

病押してかきつづりたる友憶念のふみにこもりしいのちを思ふ

ゆかりある人のいのちにつながらりて病いえゆくみめぐみならむ

丘の上の落葉の枝つばらかに窓より見ゆと君に告げむか

雲ひくきその冬空にいのちの枝張りて時待つ樹に力あり

かへし（長内俊平兄へ）

青き空に白雲うかぶ画を刷りて目にすがしかも君の賀状は

下関 宝辺正久

すみ渡る空のかなしさうち仰ぎ祈る心の沁みるばかりに  
遠つ世のみこ（親王）のみうたの旅の空をうつす色とも偲ばるるかな

宗良親王の御歌

ひとりゆく旅の空にもたらちねの遠きまもりを猶たのむかな

病む母の床辺にそひて声合はせ征夷のみこのうたうたふ友よ  
大空の広きをねがひことだまのたかきに祈る君の心はや

愛弟の三十三回忌は来りぬ。汝が魂魄いまいづくにありや。

古きうたくさをささげて霊まつりせんとす。

みいくさに汝を死なせてふるさとの水繩の山をひとり見るかも  
そのむかし二人のぼりしふるさとの水繩の山は見らくかなしき  
天そそる水繩山なみしくしくに汝をし偲ばむ雲なたなびき

耳納山のなぞへに生ふる楠若葉見つといやますわがなげきはも  
汝がめでし野の八千草は咲くといへど相見語らむすべの知らなく  
まなかひに面は見ゆれどうつし世に再び会はむたづき知らずも

北九州 山田輝彦

ふるさとの山べにかかる夕づつの光こほしみ帰り来吾弟<sup>こわせ</sup>  
二十<sup>はた</sup>まり三つの若さに逝きし汝が凜々しき面輪思へば泣かゆ

『青砥通信』の味酒景子さんの和歌を読みて

北九州 田村 潔

若き友の作られし歌を声に出し読みて過しぬ冬の一夜を

すばらしき歌を詠まるる友の心さやけしとこそしのばるるかな

青砥先生と友の話さるる笑ひ声の聞ゆるごとく思はるるかも

長内俊平兄の御母堂様御逝去と聞きて

ああつひに逝きたまひしかよるひるのはらからたちのみとりむなしく

君のねがひ奇蹟をねがひたまひしにみ心つひに空しかりしか

それでもと奇蹟をねがひみとりましし君のみ心しぬび居るなり

母君ののこしたまひしみ歌集をひもときまつる今日のひととき(歌集名『雪の玫瑰』<sup>はまなずき</sup>)

春はいまそこに来たるをはまなすの芽ぶくをみずてみまかりましぬ

みやまひのことよりみとりする人のことよみまししやさしこころよ

かなしみもまたよろこびもうたひはらし心ゆたかに生きぬきましぬ  
天つ日もかげりしならむたらちねの母ゆきませしそのひとときは  
今頃は夫君息子の良平君と語りますらむと思へど悲し（俊平兄の令弟・戦死）  
ますらをのみ子産みましし母君のみたまはるかにをろがみまつる

長内俊平兄に（三月十一日）

熊本・八代 加藤敏治

病む母のきびしきみ姿よみませし君なぐさむるすべなかりけり  
くしびなる力にみ病いゆる日もあれよと遙かに祈りをりしに  
霊送るみまつり悲し北国も春のおとづれま近きものを  
去りませし母のみ魂の後追ひて行くがに君は嘆きますすらむ  
年老いし母もつ我には人ごとと思ほへぬかな君の嘆きは  
手を取りて共に泣かむをいや遠く離りてあれば君偲ぶかな

台湾紀行（六月十日～六月十三日）

台湾神宮跡に大飯店建ちてあるを

在りし日の昔しのびてみどりこき円山背にせしホテル見あぐる

その昔これの島にてみやまひにうせたまひにし宮様憶ふ(北白川宮能久王殿下)

神あがりあがりましぬる宮殿下しぬびまつるもかしこかりけり

みんなみ  
南にただにむかひてみ社は建ちていませし国のしづめと

うつろかもみ社のあと唐風の大飯店のそそりたてるは

みちのべのすすぎが原にこもりなく虫の音悲し風吹くなべに

みおやらのすぎにし夢をしぬびつつみどり濃き山ながめあかずも

宝辺正久兄へ

本州最北端大間のみ崎にわれ立ちて友らの上を思ひやるかな

友ら住むくにのきしべを洗ひこし対馬暖流川なし流る

かへし

大間の崎にながるる対馬暖流にわれらを思ふと君うたふなり

西東よびかはしつたたかひし遠き日おもはしむこの海のうた

青森 長内俊平

下関 宝辺正久

よびかはしつつ日本のいのちを祈りける友の多くはいくさに死にき  
友よ友らよとよびかはしつつ日本に死すべき道はかはらず今も  
川なして流るる北海われは知らずあひ見ることく心をどれども

合宿より帰りて長内俊平兄へ

手をふりて相別れゆく友のパスを送りては思ふいままさぬ君を  
天皇の大御心にはた若き友の遺書にぞ泣きぬ若きら

君に知らせむと筆とれば霧ふかかりしみやまの宿の夢のごとしも

宝辺正久兄へ（函館からの船の中で、八月十九日）

青森 長内俊平

なみがしら白くくたくる海峡をわがのる船は進みゆくなり  
胸をはり足をふんばり甲板に立ちつつ日露のいくさを思ふ  
バルチック迎へうたんずる心地して甲板去り得ず波高き日は

帰郷の日々

仙台 星野艶子

十勝野を過ぎゆく車窓に馬鈴薯の白き花の香むせぶが如く  
馬鈴薯の花摘み遊びし遠き日の真夏の畑の思ひ出懐かし  
ごさを敷き幼き姪と桃を食む故郷の家のポプラの木蔭



弟の五十ヘクタールてふ営農にうちこむ姿いとほしく思ふ

朽葉敷き荒々しき自然なりき三十年前君と共に尋ねしその頃

拓かれて緑豊けきこの園に君いざなひて共にありなば

菜園に汗して父は楽しげに土鋤<sup>+</sup>き給ふ老を忘れて

たうきびの実りの頃に電話すと土を鋤きつつ語る父上

夜明けより早や起き出でて母上は菜草煮つむる薪継ぎ給ふ

わが為につくり給ひし家伝菜重きを持ちて帰り路につく

昭和五十三年（第四十九号～第五十三号）

なき友のふみをよみて

送られしなき友のふみをしみしみと読み味はひぬ友しのびつつ

なき友のふみをし読めばなき友のこゑさへ近く聞ゆるごとし

くるしきにつとめつとめてみまかりし友をあふぎてわれもつとめむ

友らに

東京 夜久正雄

歌よむことおろそかならずうつそみを神代につなぐ道にしあれば

よものくにことむけやはすしきしまのみちのしらべをうたひあげなむ

若き友ら思ひひそめてこの道をきはむべき時今ぞ来れる

この集ひ今ぞくぬちにひろめなむ老いも若きも力合せて

さきつみかどのこしたまひしみ教へはいま生きてあり友らの心に

かく思ひかくうたよめばおのづから身ぬちの力あふれくるなり

東京 高木尚一

かきつけ終りて

別れ住む友らゆ送りたまひ来しうたをしよめば力湧き出づ

「何といふ男らしい男だ」とふリンカーンの言葉思ひ出でぬけさ

(编者註「」の言葉は、リンカーンのホイットマン評“*How he looks like a man!*”をよす)  
おほらかに生きてゆかなむともすれば閉されがちの心開きて

祖父を思ふ

山の上の本妙寺なる碑いしごみぞ我が祖父喜次郎のかたみなりける

名を残すためにはあらずと碑いしごみに名は刻まざりその碑いしごみは

いづくしみ深きみ仏観世音かたどり建てしそのいしぶみは

大君のみことかしこみ幸薄きみ民のために尽しし祖父は

乞食こっじきに使はれてゐしみなし児を養ひ育てし記録読みにし

小国せうごくなる縁者見つけてみなし児を送り届けしと記録にありし(熊本県小国町)

この記録読みにし時の喜びと誇らかなる思ひ今も忘れず  
いくそたび父の慕ひて語りける祖父のおもかげ 俤 吾が胸に生く

横須賀 鏗かすがい 信弘

この祖父の血も魂も吾れに生く力の限り尽さざらめや

遺稿集『いのちささげて』第一冊の校正終る（二月七日）

横浜 香川亮二

如月の空あをく澄み遺稿集第一冊の校正いまし終りぬ

み友らと心をあはせ力あはせつとめきし業のならむとするか

ひそみゐし友よみがへりうつし世にあらはれいづるか三十年をへて

庭先の梅のつぼみはまだ固く今朝も聞きたり大雪の便り

肌にふるる風冷たけれどふりそそぐ日ざしは土にしみ入るごとし

しんしんとしみ入る二月の風の中につややかに赤しあをきの実むれ

国旗掲揚

横須賀 鏝 信弘

屋上の掲揚台に綱持ちて身動きもせぬ二人の友は

やや離れ不動の姿勢保ちつつ時間を待ちぬ指揮する友は

高らかに君が代の曲鳴り渡り今し御旗はのぼり始むる

ゆるやかに大きく円弧描きつつ綱をひきゆく友の白き手

まつすぐに御旗見つむる指揮官の敬礼の白手色鮮けし（白手袋のことを白手と言ふ）

大空にひらめきやまぬ日の御旗われらのいのちすぶる御旗ぞ

三月十一日「新労組設立趣意書」を書き終へて

長崎 内田英賢

わが思ひの通ぜむことを念じつつ一句一語に心凝らしぬ

あすよりはたたかひの場たはに出で立たむ趣意書も今や書き終へたれば

わが力足らはぬながらこれの世に仇なす思想は撃たざらめやも

わが思ひのくもりはらひつつ正道ましまちをただに進まば何かおそれむ

トラック島現地墓参団に参加して(二月十一日～十五日)

トラック島、春島(モエン島)に着く

空港に降り立ち昔しのびつつあふぐまなかひげんこつ山みゆ

戦ひに敗れてのちの半年を米軍作業につきし日思はる

我等住みし宿舎の辺りいづべぞと探せどしかと判りかねつも

再びは来ることあらじと思ひぬしトラック島にまた来つるかも

夏島（ジブロン島）ララ墓地慰霊祭

木蔭にて椰子汁のめばしくしくに昔のことの思はるるかな

トラック島の空をうづめて艦隊の大飛行機群行きし日よああ

椰子の木の茂れる中の道ゆけば名知らぬ鳥のなく声悲し

名の知れぬ鳥のねきけばこの島に鎮もる人の声かとも思ふ

慰霊碑の前にぬかづき大君の大御歌ささぐうけさせたまへ

ふるさとゆ持ちて来りしくさぐさをそなへまつりてをろがみまつる

日もくらく線香の煙立つなべに「海ゆかば」のうたただに悲しき

海ゆかばみづくかばねのいにしへのいのちのままにゆきし人はも

（青砥註：トラック島は、内南洋にあり赤道に近し。第一次世界大戦後、日本の委任統

治領となる。特に大東亜戦争中は、南方作戦の基地で、第四艦隊司令部があつた。敗戦

後米国の委任統治領となる。小生、戦中昭和十九年三月より戦後の昭和二十一年六月ま

で在島）

巡訪を終りて福岡より便りのはしに(六月二十五日)

九州大生 金子光彦

人気なき改札口にて我ら待たる大人(青砥先生)の姿の思ひ出さるる

島根の友へ

我らが拙き合宿の説明に耳傾けてくるるうれしさ

友もなき遠き島根の学びやに友を得たるはうれしかりけり

夜遅く語りたきこと語り終へ松江の駅で友と別るる

島根への旅の終りの車窓より遠き松江の街の灯の見ゆ

書きつけ終りて(七月六日)

みともらのおくりたまひしみうたをばかきつけ終ればうたごころわく

加藤多夏詩・金子光彦両兄に

九大の若き二人の学生のたづね来ませし夜忘らえず

駅頭につきし二人の若きらの手あげし姿今も目にあり

はるばると福岡の地ゆ島根までたづね来ませし友を求めて

礼儀正しくお世話になりますと礼せし姿の何ぞすがしき

つかれたる色をもみせず若きは飲みかつ食ひて語り語れり

若武者と語りしごときすがしき思ひしてをりあの夜思ひて

はるばるとたづねきませしみ友らにこたへまつらむ心つくして

今頃は如何ましまさむ合宿の準備に心くだきたまふか

関正臣氏の齋きまつる舞岡八幡宮に詣でて

福岡 小柳陽太郎

緑こき山を右手に畑中の道をいそぎぬみ社やしろさして

都べゆ遠くさからねど山かげに古いにしへぶりの藁屋根も見ゆ

わが友の齋きまつれるみ社のありと思へばはしきかの丘

神のみ前にささぐる稲をわが友の植ゑますと聞くこれの稲田は

ふり仰ぐきざはし高くそが上にしづまりますか大み社は

きぞの雨にぬれしきざはし苔むして高くつづけりをぐらき中を

ただならぬおもひをこめていつきまつる友偲びつつ仰ぐ神垣

きざはしの右手の丘べ群竹のしるけきみどり眼にしみて見ゆ



拝殿には二拝二拍手一拝の作法こまやかに示されてあり

神々のいのち示すとみ社のかたへ豊かに茂る熊笹

みいくさにいのちささげし英霊をまつるささやかのみ社もありき

塵一つとどめず光る拝殿の板に手ふれておもひすがしも

拝殿のかたへに垂らしし豊かなる稲穂にこもる友のおもひは

神さびし銀杏大木の幹をつたひたるるしづくよ神代ながらに

神さぶるしづくをうけてみ手洗のしづもりてあり銀杏の下に

宝曆の昔刻みし銘ありて心はるけしみ手洗の石

案内あなこへどいらへはあらず静かなる住居に友の日々を偲びつ

思はぬに社務所の方ゆなつかしき野太き友の声いらへたる

合宿終了後、松吉基光君の撮りくれし写真を賜りて

いつのまに年老いにけむうつしゑをみつつし思ふ吾れの顔はも

友どちのおのおのもの顔みれば五百羅漢の思ひ出さるる

こしかたのいきこしさまのしのばるる恐しき顔笑みたる顔に

『青砥通信』第五十二号をいただきて

東京 高木尚一

『青砥通信』いまだきぬなつかしき友らがよめるこの歌ぶみよ

わきいづる友らの歌はかがやける泉の如く心に迫る

友の歌よみつつ庭をながむれば秋深みゆく陽ざしなつかし

木犀もくせいの花散りはてて我庭に餌をついばめり雀がともは

友らいまいかにおはさむさまざまのくらしの中にみくに思ひて

ふるさとを思ひみおやを思ひつつたかひたまふ友ら尊し

新たに買ひ求めし懐中磁石を机上に置きて作る（十月十四日）

下関 宝辺正久

わが窓に見ゆる櫛くしと屋根のあはひ磁石の針は東北を指す

学校の丘の櫛の空遠く澄めるもなかは東北に在り

わが窓は正しく東北に向ひたりみゆるかぎりの秋空のはて

地図見ればわが東北に島根あり青森ありて国後くによしにつづく

知らざりしわがをる窓は友が住む国辺をさしてただに向ふとは

この見ゆる空に向ひて手をかざし友に合図を送らむとする

日本海の波間しぬばゆしかすがにここよりますますの方

みさきめぐりて玉造たまづくりにゆけさらに海をますぐにこぎて青森にゆけ  
東北は国後くわしりに向ひわが北はウラジオストクをますぐに指せり  
夕さりてともしき光に地図よめわが窓の外のいやはてしのぼゆ  
冬くれば高き木末の方遠く雪降る友の国辺偲おぼむ

「磁石の歌」へのかへし、宝辺正久兄へ(十月二十六日)

青森 長内俊平

紅葉も深み極まりて庭前のえぞ山桜の葉露に散りゆく  
われもまた磁石と地図をとり出して机に向へり友することく  
わが机置きたる窓は真南に向ひて朝夕陽のめぐみゆく  
君が住む方には一本柘榴ひともとざくらありて紅き玉実たまみに秋の陽のさす  
わが家と君住む里をむすぶ線の程遠からず父母のおくつき  
十いくたび居を変へたれど捨てがてにこの地図帳はもち歩きこし  
手をかざし合図を送る君にこたへ我も大きく手を振らむとす  
漠然と友は偲おぼぶべからずその方かたを向きてみ友は偲おぼぶべくあり  
大発見にわれもあやかり折々に手をかざさなむ友住む方へ  
わが心淋しきときを知ることく来ませる友の文をかしこむ

なき友ら歌ひ交せしみ心をしみに偲ぶみ便りよみつつ

君がうたよめば楽しくやがて胸あつくなりつつ勇氣湧き出づ

「磁石の歌」「かへしの歌」をよみて

地図出して定規あつればあなふしぎ三か所しよのすまひ一直線なり

きたとみなみすめるみ友のたなすゑの合図のゆきかふもなかにすめり

をちここに別れすみますみ友らのあつきなさけに生きてきしかな

友しのぶとくにみ友のみこころのわが胸にいき力湧くかな

『いのちささげて』続篇の写真とのふ（十月三十日）

横浜 香川亮二

三十四名一人もかけずうつしゑはとのひにけりありがたきかな

み友らの心より合ひて今しここにうつしゑことごとくととのひにけり

『いのちささげて』続篇の原稿とのひて

亡き友のみ文やうやくまとめえて印刷にまはせりと告げまつる今日

桜咲く弥生の頃ゆつとめきて師走半ばとなりにけるはや

昭和五十四年（第五十四号）第五十七号

岡山・国民文化懇談会四年目を迎へて

岡山 三宅将之

ほそぼそとただひたすらに重ね来しつどひもすでに三年を経たり  
おのがじしなりはひしげき身なれどもつどひ来ませる友は数増す  
やまとうたやまと言葉の奇しき力そをたづねつつ会重ねたり  
八雲たつ出雲の国ゆ<sup>うし</sup>大人迎へ四年目に入る会をもちたり

福岡の糸島半島に久米の皇子の遺跡をたづぬ

東京・武蔵野 夜久正雄

たづねきし久米の皇子のみやしろはみやまつばきのしみみに生ふなか  
みささぎのたたずまひなす丘のべのみやしろこめてあかきつばき咲けり  
久米のみこのみはかをたづねまらむと草木しみ生ふ道のぼりゆく  
みはかべに立ちてのぞめば西の方かすめる海に日のおちかかる  
あなかしこみしるしの石は海こえてしらぎの国の方にむき立つ  
み墓への枯草の下に玉石の並べる見えていよよかしこき

火の山にのろしあがらばしらぎよりいくさよせこむしらせとこそ知れ  
みはかべのしげみにしきりとよみなくうぐひすのねよなごりをしげなる  
足とめてきけどもあかずみささぎのしげみがくれにたかなくうぐひす  
聖徳のみこをしたひてやまさりし友ともどもに来てましものを

(編者註・久米の皇子は聖徳太子の御弟君、新羅征討の中道、筑紫でおなくなりになった)

久米の皇子の遺跡をたづぬ

福岡 小柳陽太郎

人知らぬ丘辺ひそやかにしづもりて立ちたまひたり久米の御社  
遠々し志摩の国辺に雄心をいだきて逝きし皇子のかなしさ

遠つ皇子のかたみと思へばなつかしも椿しみみに咲けるこの里

丘のべをおほふ椿の葉がくれの花つばらにも見れどあかずも

み社に絵馬はあれども皇子のすがた描きし絵馬のなきがさびしさ

道もなき雑木の林そがなかにひそやかに立つかなしいしぶみ

そが面に刻みけむ字もすで見えず古びしものかするしの石は

古びたる墓石いまま北の方新羅にむきて立ちけるあはれ

みしるしの石のおもてに手をふれて去りがてにますわが師の君は

み墓べゆ望めばすでにくれなづむ玄海の海けぶりてみゆる

ふりかへるかの丘のべに皇子の御墓ありと思へば去りがてにして  
さりがてに歩むかたはら藪中にしきなくうぐひすの声のともしき  
しみとほるおもひにききぬみ墓べのほとりの藪にたかなくうぐひす  
海ぞひの道ゆけばかしこまかがやく夕日はるかに今沈みゆく  
からくにを伐たむと皇子のみいくさのきほひましけむこの海原に  
沈みゆく夕日うつれる海の面の金色こんじきの帯きらめきやます

長内俊平兄の「大学講師奮戦記」をよみて

下関 宝辺正久

倫理学を講ずる友が夜な夜なに大き書よよむと聞きておどろく

今更に西洋哲学よむといふ友のいきほひ偲びてあるも

ともしびを夜な夜なかかかけて読む書ゆ思ひしことを我にも聞かせよ

学び舎に集ふわかきら君のことばにと胸つかれてどよめくならむ

学び舎の外はふぶくとも君かたれば心打たれて泣く子もあらむ

言へどひびかぬ子らをし睨にらめて言もつまり心に泣く日もあらむかと思ふ

一すぢの思ひもゆたに進みゆく君偲びつつ恥ぢいるわれは

先生稼業はむつかし読書にくたびれしといふさへ笑まゆ君を思ひて

秋田の須田清文君に会ひに行く血田宏君に託せしうた

青森 長内俊平

志功を好きと言ふ君への土産とせむ友と賞でたる絵の複製を

その返し

秋田・本荘 須田清文

わが愛づる棟方志功のうつしゑに歌添へ給ひて贈り給ひぬ

あなうれし師の御姿も青森の街・空・海も目に浮びくる

「風神の柵」をみて

寢食も忘れてうちこみ成りしとふ志功先生の風神すこし

まなこしかと見ひらきひたすら走りゆく志功の風神すさまじきかな

風神よ何を求めて走らるるわれも駆りてともにゆきたし

たくましき大足もちて大地をばひた走りゆく風の神様

出雲紀行

東京・武蔵野 夜久正雄

古事記学会（六月二十三日～二十五日）に出席のため松江に行き、

青砥宏一兄の御厚意にて、鳥髪山（船通山）の麓なる玉鋼たまはがねの製造工

場を見学、翌日安来の和鋼研究所を見学し、宿願を果す。且つ、須



賀神社、稲田姫神社、出雲大社、日御碕神社、八重垣神社、玉作湯社、神魂神社かみに参拝しえたるは思はざるよろこびなり。青砥兄には歌を送るべしとのこと、雑詠二十数首を送る、その歌

宍道湖畔のホテルにて

宍道湖の空ひろくしてさはやかに星あらはれ一つ二つ三つ

宍道湖の逆波くらく立つ見つつ風にまむかひうたひつつゆく

宍道湖の夕波くらく吹く風にまむかひゆけば心ふるひつ

海ゆ吹く夜風にふかれて宍道湖の松江大橋わたるたのしさ

湖をかぎるみさきのそこに灯ともしつきたり夕かげりつつ

なき友のいたもこひしも宍道湖の大橋のうへにピラをくばりにき

須賀神社参拝

久しぶりに会ひたる友とおちつきて語らふまもなくくるまに乗りぬ

鳥髪の麓めざして斐伊川ひいをさかのぼりゆくたたらたづねて

八重垣のうたよましけむ須賀はしも垣山めぐる国のまほろば

八雲立つ出雲八重垣とかしこきや須賀のやしろにとなへまつりぬ

八雲立つ出雲の国の神の代の神のやしろにまうでまつるも

鳥髪トリカミの麓ノのたたらたづねきて神代もいまにかはらぬおもひす

古ことの神代ながらに劍太刀ハガネ鋼ハガネをつくるを見るぞかしこき

思ひきやくしなだひめのみやしろの神さびて立たす木々の繁みに

ふることの神代さながら神々のすみます国をゆくぞかしこき

鳥髪のかた見かへれば暮れ残る八雲白雲垣山ハヤシに立つ

玉造神社の庭にひろひたる石はくるまのなかに忘れぬ

神魂神社カミタマにて

言絶えてただいづまでも仰ぎみつ神魂神社のそのみすがたを

ことそぎてちからあふるるいにしへのこころさながらしめすみやしろ

息をのむうつくしさとはなき友の語りしことばよそを思ひつつ

日御碕神社

神主の打ち打つ太鼓と笛の音とかしこし神の天くだららし

神主がうちうつ太鼓のいさましくみぬちふるふも日の御碕神社

八重垣神社

大太鼓のひびき身にしむ八重垣の奥宮の森にわが立ち聞けば  
八重垣のやしろの壁画の大和絵のをみな顔は生けるがごとし

六所神社

国府あと六所神社のさをとめは大太鼓うちておくりてくれぬ  
見もしらぬわれらおくと鳥居べに手をふりし人のすがた忘れず

出雲の神垣

長野・駒ヶ根 宮脇昌三

友どちのなさけかうむり出雲路の神垣めぐる今日のうれしさ

出雲路の宮居宮居に湧く清水神代の昔ゆ流れ初めけむ

出雲路の山々かけて立つ雲のきほひ並み立ち八重垣なすも

青垣山四方よもにめぐらし清水わくうまし里なり須賀の宮居は

須賀を経て稲田の宮に詣づれば通ひましけむ古へ思ほゆ

切り立ちて雄々しき男千木平らかにやさしき女千木出雲路に見つ

草茂る出雲路ゆけば遠き世も今のうつつに神々親しき

玉鋼たまはがね作る火床に足踏めば大蛇おろちの剣もまさしく思ほゆ

玉鋼作る火床の村下役むらげ二人老いつつ継ぐ人なけん

六所神社参拝

夕立のあがりし夕べ暮れ初めてひそけき六所の宮に詣でぬ

八重垣と真名井の宮居をめぐりきていま額づきつ六所の宮に

夕立に濡れし境内の草ぬきにいそしむ一人の乙女ありけり

夕暮の宮居淨むる乙女子に問へば答ふる社家の娘と

祖父と父と孫の四人してこの宮に仕へまつると聞けば尊し

出雲路の宮居のなべて清らなるは朝夕絶えぬ淨めによりこそ

参り路を戻り来つれば夕暮の宮居にひびく太鼓とどろに

うち鳴らす太鼓のひびきは雨の夕べ詣でしわれらがためにとぞ聞く

車停めて待ちしかひありみ社の木の間ゆやがて乙女見えきぬ

田を隔つ道のべに立ちて手を振れば乙女子深く首垂れつつ

われらのため打ちし太鼓のうれしさを告げ得ていま去る心おきなく

よき友のみちびきうれし満ち足りて六所の宮をさかりゆくなり

古事記学会に御来松の諸大人を迎へて

小田村寅二郎御夫妻、夜久正雄、宮脇昌三の各大先輩、また飛び入りの講談社藤井貢氏を

迎へて、宏一、誠一父子の運転する車二台に分乗して載き、速須佐の男の命の史跡をたづぬ。

東京の大人らむかへて出雲なる『古事記』のあとをめぐるたのしさ

まづわが産土うぶすなの神(玉作湯神社)に詣でよと示しますすみ心かしこかりけり

大人らむかへ車かる日よつゆ空はま青に晴れて山みどりこき

丘のみち車しゆけば南みなみの空山そらやま高く雲居立ちくも

この雲ぞ須佐の男の命のよみましし雲八雲立つとどよめきあがる

この雲をとほにとどむと車とめ大人うつしゑにをさめられけり

うたのみちあに示しましし師の君と共に詣づる須賀の宮居に

すがすがしすがの宮居にみともして詣づる宮居のメ縄太しも

うたよめばすがしくなるてふくしびなるうたのいのちをきくがうれしも

大蛇おろちをば退治しまして妻ごみのうた作らししふるごとおもふ

しきしまのみちのながてにつらなりて生きこしことのえにしを思ふ

斐伊川ひいの長谷ながたに八尾やこえて深山みやまち路たどり鳥髪につく

遠々しやまたの大蛇の住みしてふ鳥髪の里行くに遠しも

川に流るる箸あらずして道標をたより迷ひて鳥髪に来つ

玉鋼うちて鍛ひし大刀こそはやはらかにしてかけずくだけず

夕なづむ横田（鳥髪）の街の茶店にて出雲そば食ひしその日忘れず

鹿児島神宮参拜

東京・武蔵野 夜久正雄

初参りする里人とおほまへに並み居て神ををがむがうれし

大太鼓ならして鈴のしで振りてささぐる神楽きくもたのしき

大前に並み居ればしじま深くしてせみなくこゑのみわが聞くものは

大前の深きしじまに並み居れば思ひけうせてただにかしこき

米国・ダラス市在住の吾子を憶ひて

東京 島田好衛

熱砂舞ふ荒野のはてに掘削の業学ぶ子よすこやかにあれ

メキシコの国境近くを旅ゆける吾子を迎へむサボテンの群

いとちさきサボテンの子を持ち帰り愛でなば良けむと汝が母はいふ

昭和五十五年（第五十八号と第六十二号）

森田維佐男兄より浜木綿はまぎんの株をいただく

北九州 山田輝彦

君もわれも死すべきいのちながらへて生きのいのちをつぎて来にけり

わが庭に植ゑさせんとて浜木綿の株分け持ちて君は来ませり

「み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へどただに逢はぬかも」

万葉の歌思ひつつわが妹と庭土深く浜木綿を植う

来む年のつゆの晴れ間に百合のごと白き花咲くその日待たるる

老いづきし身をいたはれと別るるにかたみに握るたなごころはや

玉造温泉を訪ねて

岐阜・各務原かづみがはら 高木晃吉

いくとせをたづねゆかむと思ひ来し出雲の友をけふおとづれぬ

木の香もあたらしき部屋めづらしき国里の料理賜はりてうれし

溢れ出づる出湯につかり思ひけり尊き友とくにのめぐみを

御一族あげてたまひしみ心のこもれるもてなし有難く思ふ

米國アイオワ便り

米國・アイオワ 小柳左門

なつかしきみ便り届きぬはるばると大海越えて師の御文着く

師の君のなつかしき字に刷られたるプリント歌ぶみありがたく読む

日本各地師のまた友らの数々の歌ぐさよめば楽しかりけり

年賀状に書き送りたるわが歌もともに載せてありこの歌ぶみに

故寺尾博之兄自刃の地をたづねて（女子学生油山合宿）

年月をしぬびきたりし油山慰霊の石碑今日し拝すも

ありし日に君よみまししみうたをばをとめと共に誦しまつりぬ

山道をたどりゆきつつすぎし日の君のおもかげしぬびまつるも

のこしまししみうたをよめばありし日のおもかげいよよせまりくるかな

天皇誕生日一般参賀にて

東京・国立 太田文雄

五月晴れまぶしきばかりの日を浴びて人皆つどへり日の丸を手に

みテラスにすめらみことは出でませり手を打ちふりてほほゑまれつつ



日の丸を高々とあげ打ちふりつ感きはまりて涙こみあぐ

妻を伴ひ玉造温泉にむかふ

福岡 小柳陽太郎

雲低くたれて折しもふりしきる雨に水面は見えわかぬかな

嫁が島の木々の緑の目にしみて見ゆれどたちまち霧にとざせり

空晴れて水面はるかに望む日のうましながめを偲びつつゆく

宍道湖のながめは絶えて緑こき山ふところを車は行くも

友のあたりいづくと望む山かげのあたりあまねく霧にけぶりつ

うちつつく桜並木のかたはらを水とうとうと流るるが見ゆ

底ごもる出雲の国のいのちかもげに渦なして水は流るる

青砥宏一大兄の宿につく

「こんや別館」の表示なつかし我が友のいとなみあます宿はこの宿

玄関に車のつけば奥様も傘かたむけて迎へたまへる

我が友も誠一君も宿の法被着てむかへますみすがたうれし

大なる構への宿よ広やかのプロビーに友と語るうれしも

もてなしのおうすたまはりつ友が宿に来しよろこびをかみしむるかな

出雲本膳とふ朱あけのうるしの一揃ひ揃ふもうましけふの夕餉ゆうげは  
盃をかはすがままにとろとろと酔ふたまゆらよたぐふものなき  
友の情身なさけにしむおもひにひたりたるいでゆ忘れじ時さかるとも

昭和十七年西教寺合宿にて第五班全員よせがきをしるせる書

東京 高木尚一

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（黒上正一郎先生著）

を青砥宏一大兄に送るによせて（八月十三日）

我が書架に見出でしこのふみありし日の若き友らのよせがきしるせり  
おのおのおのペンをとりつつひたひ集めしるしたるらむその日俛よそばゆ  
四十よそとせに近きへだたりおもはせぬ若き友らのまごころあふるる  
聖徳太子のみ教へ仰ぎよみましし思ひこもれりこのよせがきに  
ためしなき大みいくさに征きましていのち捧げし友もあるらむ  
なつかしき君が名もあり四十とせのへだたり覚えすありがたきかな  
しきしまのみち一すちにつとめます君に送らむ有難きふみを  
みくにまもるまごころつきぬしるしとも仰がるるかなこのよせがきに

高木尚一大兄へかへし(八月十六日)

ところどころ鉛筆書きありこの文を仰ぎましけむいたしへ古思ほゆ

寄せ書きにわが名前あり四十年まへ友らと集ひしかたみかこれは  
戦死せる友の名もありゆくへ知れずなりにし友のみ名つらなれり  
忘れぬしこの寄せ書きよみいくさにいでたつまへのかたみなりけり

(「至誠而不動者未之有也」を真中に記して、その廻りに皆で寄せ書きをしたものである)

カーディナルス(十月二十七日)

米国・アイオワ 小柳左門

はつ雪の積りし朝雲あしたはれてさしいづる朝の光まぶしも

仰ぎ見し白樺の枝に紅くれないのもゆるがごとき鳥みつけたり

枝をつたひとびゆく鳥のあと追ひてとぶ紅の鳥かげを見つ

紅のつがひの小鳥白樺の枝間とび交ふ舞ふがごとくに

初雪の残れる庭におりたちし真紅の鳥の何ぞ美しき

妻呼ぶと鳥はなくらしほろほろと歌ふその声澄みてうるはし

(カーディナルスはアメリカ中部の代表的小鳥で、頭の冠から尻尾まで全身真紅の美事な鳥です。その声も大変に美しく、春秋はこの鳥をみるのが楽しみです)

黒上正一郎先生の御墓に詣つ(十一月二十四日)

福岡 小柳陽太郎

心せくままに降り立つ山門の清水寺せいすいじの文字目にもしるけし

師の君のねむります寺よ年月を偲びきにけるみ寺なつかし

本堂の右手を奥にすすみゆけば師の君の御墓しるく見えきぬ

はるばると今たづねきて御墓べに立つと思へば夢のごとしも

手を合せいのりまつればうつしゑの君がみすがたいまのうつつに

すみわたる朝空高くをちこちにしきなく鳥の声のさやけく

若き日に師の君のみ文にふれしより月日は夢のごとくすぎにき

迷ひこし月日恥かしみ言葉に導かれつつ生きてきぬれど

すゑとほくみ心につながり生きてゆかむと誓ひまつりぬみ墓べに立ちて

孫三人来る(七歳、五歳、一歳半、男子のみ)

東京ゆ三人の孫の帰り来てにぎはしきかも昨日も今日も

帰る日を指をり数へ妻と共に待ち居し孫ら今うちめにあり

兄このかみのまねをししつつ遊ぶ弟この遊ぶがままにもの学こぶらむ

末の孫このいだきてくれと笑みうかべよちよち来れば思ふことなし

昭和五十六年（第六十三号）第六十五号

還曆偶感（一月十三日）

北九州 山田輝彦

雲の間の空の碧さよたまさかに風花むぎはなのまふ今朝のさやけさ

めでたしといふにあらねどそこばくの心の昂たかぶりなきにしもあらず

たたかひにあけくれしわが若き日はゆめ忘らえずいまのうつつも

みいくさに死すべきさだめながらへて日々のつとめにけふもいそしむ

うつそみのいのちたまひしちのみの父のみことはすでにいまさず

たらちねは老いましにけり吾を生みし遠きその日は忘れまさぬに

新らしき毛糸のシャツを買へよとて娘むすめらがくれにし銭にあらずや

たまさかにいさかひもしつわが妻とともに越たかえ来しこの月日はも

われの血につながる孫ら生ひ立たむその日のみくに安らげくこそ

カール・ベームに捧ぐ

山口・新南陽 宝辺矢太郎

老いし身を椅子にゆだねて振り給ふ姿まなこにつきてはなれず

老いし身の身ぶり小さくも音のゆくへ定めむとする面輪きびしく  
七番のフィナーレしめくくるひとふりに己が身ささげしベームの偲ばゆ  
ブラボーの叫び館内にとよもしてあらしのごとく拍手うづまけり  
聴衆に向ひしベームの面輪はもけはしさ去りて笑顔こぼる  
なほやまぬあらしの拍手のただ中に立ちて笑みますいかにもうれしげに

五月二十七日、小田村理事長の御誘ひをうけて沖の島

(宗像大社沖津宮)に向ふ折に

福岡 小柳陽太郎

いくとせのおもひかなひて今しわが船すすみゆく沖の島さして  
波わけて島辺すすみゆく僚船ともぶねの舳へさきに高し日の丸の旗  
大島の北の岬に目もしるく白き燈台の見えるてなつかし  
音に聞きし玄海灘よ今朝は風なぎて朝日まぶしく波にきらめく  
朝靄もやの中にいつしか島影も消えてただ広き海原を行く  
何を釣るかいさり舟あまた朝日子の輝く海につらなりて見ゆ  
おぼろなる波の上遠く待ちわびし島の頂いただきほの見えてきぬ  
ふもとべはもやにかすめどいただきの稜線しるし沖の神山

海原遠く島のいただき目にしるく浮ぶもかしこし神代ながらに

四方すべて島かげもなき海中わたなかにそびゆる島よ沖つ神島

たちまちに遠き『古事記』のいにしへのよみがへりきぬ今のうつつに

玄海の波こえて行きし遠つ人のおもひしのびて仰ぐ島山

ややややに船近づけば天そそる岩はだの上に燈台の見ゆ

もろびとの厚きなさけに待ちわびし沖の島辺に今おり立ちぬ

還暦の年も半ばをすぎて（八月二十九日）

いたづらに年を重ねて六十あまり一とせの年むかへけるかな

十あまり九つるとき聖王のみ教へにふれて行手定まる

行手はも定まりたれどかへりみて恥づることのみここだ年月

み友らの厚き情に支へられここまでは来し尚なほし行かなむ

なつかしき一信海よそを思ひしぬびてゆかむとこよゆくまで

八月末、周防大島安下庄あけのしょうの里に松吉正資大兄の御墓を訪ふ

福岡 小柳陽太郎



(占部賢志君夫妻と妻同道)

ひさしきおもひいまはたし得てみ墓べに立つたまゆらよ夢のごとしも

弟君のみ名もいしぶみに刻まれてなつかしきかな君がみ墓べ(「松吉基順建之」とあり)

黄菊白菊ささげまつりてもろともに祈るおもひを友ようけませ

みいくさにいでゆくおもひをよままししみうた誦しけりみ墓の前に

かくり世の君がみ靈にとどけかしと声高らかによみまつりゆく

よむほどに胸とどろきてただならぬおもひにことば乱れがちなる

たれこめし雲いま晴れて夏の日の光まぶしもみ寺の庭は

ふり仰ぐだけ嵩山いまは雲はれてまるやかの肌目にしむるかな(嵩山は安下庄背後の山)

丘のべに遠くつらなる蜜柑畑を仰げばこほし君いますがに

君まししその日もかくや真夏日にきらめきにけむ瀬戸の海原

安下庄あげのしょうはなつかしき里君恋ひてみ空仰げば鳶舞ひやまず

ふるさとびとよと君よまましし歌思へば道行く人のひたになつかし

最近の懐ひ

さかしらに言挙げするを嘆きつつ安らぎ少きうつし世に生く

東京 松吉基順

さかしらに言挙げせざりし亡き兄に悖るか我はさかしらごと言ふ  
さかしらにも言ふ心のいづくゆか知らず生れいづかなしき性よ  
うつし世の不可思議思へば随順の心生れむにかなしき性よ  
捨て難きさかしらごころ矯めむには祈りのほかに道はあるまじ  
聖徳の太子のみをしへ仰ぎつつさかしら心かへりみ生きむ  
解すること難しと思へど生くるかぎり太子のみをしへかしこみ仰がむ

大道にて（宝辺正久君とともに、十月十一日）

熊本・八代 加藤敏治

心知る友とつれだち周防のや大道浦を訪ね来にけり

秋雨のそほ降る日なりきみ友らと初めて訪ねし四十年まへは  
町並も変りてあればとまどひてさがしあぐねつ目ざす家居を

人に聞き見つけし家居しばしの間たたずみ眺めつなつかし家居を

幾度かおとづれ泊りし湯の宿の家は残れり古びてあれども

真砂なる浜は削られ石堤の目路をさへぎり見えずよ海は

部屋内ゆ素足で浜辺におり立ちて散らばる白貝拾ひしものを

わづかにも残りし松に波寄する浜辺につづきし松原偲ばゆ

石の堤にあがれば遠く昔見し沖の鯨島明かに見ゆ

鯨島の沖つ海はろかにうす霞みほのかにも見ゆ筑紫島山

夕風も吹かず入り海なぎ渡り亡き友偲びて立ち去りかねつも

人の世はうつりゆくとも亡き友の残せし願ひ万代までに

(宝辺正久記…大道とは、山口県防府市の海岸、昭和十六年の秋、山口の諸友うち連れて海を見に行かうと散策中、浜辺の松林にふと見つけた一軒の潮湯宿があつた。以来度々ここを訪れ、浩然の気を養つたが、中でも昭和十七年二月、卒業前の加藤敏治君―右の歌の詠者―が、山口、佐賀、熊本、松江、松山の後輩二十人位の合宿を、ひとり思ふさま敢行したことは、記憶に残る。国文研発足前の昭和二十八年にも、小田村寅二郎さんはじめ十名位がここに集まつてゐる。それが三年後の国文研第一回合宿教室の発足につながつた)

昭和十六年九月東京の友、渋谷成弘大兄(当時明治大学生)が四国路巡遊のため徳島に来らる。小生同道して高知、松山に友らを訪ふ。

その時の渋谷大兄の巡遊記の写しを遺稿の整理中見付けたりとて、

長内俊平兄より送られて(十一月七日)

はるかにもすぎにしものか四十年忘れしことの思ひ出さるる

徳島ゆ汽車にゆられて友訪ふと高知に着きしは日暮れなりけり

深き思ひたたへて語りし寺尾兄のすがたきはだち目立ちてありし

(編集註・終戦直後、福岡の油山で壮烈な自刃をされた寺尾博之海軍少尉のこと)

さよふけて高知の友の虫のねの大御歌誦せしが耳に残れり

寺尾兄みまかりましていや遠くその声その顔今も目にあり

その夜に語りし友ら生きませるはいづべにいますかなつかしきかな

「国引き詞章」を読む

富山 廣瀬 誠

八雲立つ出雲国引き寄せかへすリズム海鳴りのとどろく如し

底ごもる神のもろ声国来国来とひびきて止まらずうねりを打ちて

おぞましき病に伏してわれはあれど古ごと読めば力湧きくも

わが口は今ほ拙し読みあぐる声もつづかず古ごとあはれ

君の前にこの古ごとを朗々と読みあげしその日遙く思ほゆ  
拙くも拙きままに読みあぐるわが声届け君があたり

三女・孝子の結婚に(十二月二十七日愛媛県中島町新谷和志に嫁ぐ)

ことさらに悲しみかくしざれごとを言ひて別るる今日のよき日よ(結婚式の日)

幾山河別れすむとも父母のゐる山河を忘れたまふな

娘をばアシハラシコヲにうばはれしスサノヲの心いよよしるけし

中島を全島こめて歌声の里となさなむ心つくして

島のかなた夕日入りこむ中島を親戚はらからと共に眺めゆくかも(式のため瀬戸内海をゆく)

いかならむ悲しみあるも父母が汝思ひをりと奮ひたまへや

古いにしへの瀬戸内をゆく船々を守りてぞ来し島の人は

勤王の瀬戸内海水軍の裔いとし聞かば振ふはざらめや

悲しみに耐へむ心に起き出でてうたかきつくる午前二時はも

昭和五十七年（第六十六号～第六十八号）

お嬢さんの御結婚を祝す

北九州 山田輝彦

み雪降る出雲の国ゆ瀬戸内の島へ嫁がす親ごころはや

幼きゆ蝶よ花よと育てきていよよめぐしも嫁ぎゆく娘は

門辺出づる娘送りて父われは胸あつかりき君も然るか

真夜深き二時に起き出で歌書きし父のなげきよわれも然りき

歌ごころゆたけき君のみ子なればまさきくまさむ嘆きたまひそ

はからずも『青砥通信』第六十六号を拜受して

東京 三浦貞蔵

友とよび友と呼ばれつ幾年をすぎ来しことのかりそめならじ

良き友を数多得にけるさきはひを年ふることに思ひてやまず

かしの実のひとつごころに臣の道たがへず生きたむたづさはりつつ

数々のみうたをよみつつわが胸の高鳴りやまず春浅きけふ

語ること難き病にたへまして歌かきつづる悲し友はも(廣瀬誠兄のことを)

いえがたき病にふして大いなるわざなしとげし子規居士偲ばゆ

四十年の昔相見しますらをの友がみうたの高きしらべよ

梅の花はや咲きいでて都べは春や近しと君に告げなむ

わが胸の高鳴るままに歌よみてみかへしとやせむ拙つたなかれども

四月二十九日天皇誕生日に島根県知事を介して社会福祉法人玉造厚生会(理事長青砥宏一)保育園、母子寮運営に次の如く伝達あり、

「今般その事業御奨励の思召をもつて金荅封を賜りましたからこの旨お伝えいたします。

昭和五十七年四月二十九日

宮内庁長官 富田朝彦

社会福祉法人 玉造厚生会殿」

おほしめし  
思召をいただきて

かしこくも賤しづのいとなみみそなはし玉の御声のかかるうれしさ

その事業御奨励とふみことばよ有難きかも振はざらめや

天皇陛下と黒々と印されし御下賜の金封震へいただく

国引国体（第三十七回国民体育大会）開会式に参加して（十月三日）

昨日までふりにし雨の今日晴れて開会式をむかふるうれしさ

人々は国体晴れと言ふなれど天皇晴れと我れは言ふなり

大君のかしこきみゆき雨雲は遠くそのきつかへまつるか

スタンドゆながむるみ空さみどりに八重垣なして雲のうかべる

八雲立つ出雲国原大君の行幸<sup>みゆき</sup>むかへてみ空晴れたり

空砲の空にとどろき天開く時しも大君着きたまひけり

ああここにまさめに拝する大君のみかほやや赤にみ手振りたまふ

スタンドとグラウンドうづめしみ民我等大君迎へて喜びあふる

大君のみまへに「君が代」うたふなべ国旗はのぼる掲揚台に

み民われ生けるしるしあり大君のみ前に「君が代」うたふこの時

朗々とのべます神ごとみ民らを思ひ祈ります思ひみちみつ

大君をむかへまつりて手たたきてゲームをみるはうれしききはみ



おきさきのみやまひいかがありまさま今年もみ顔拝せぬさびしさ  
大君の御座所の前にかざられし黄菊の大輪目にあざやかに  
大君にあだなす者のあるならば身に代へても身内震ふも

たよりのはしに

下関 宝辺正久

大君を迎ふるよろこびあふれゐてその歌うつすわれに伝はる  
大君にあだなすもののあるならばとうたひし友の目に見るごとし  
このうたをよみゆく友ら四方にゐてよろこび通ふと思ふうれしさ

小田村寅二郎先生、十二月十二日熊本に来られ久しぶり  
にお会ひして

熊本 北島照明

この会合わが生涯のすべてかと心ひそかに決意しいで来も  
約束の時をたがへてなるまじとホテルのロビーに早目に着きぬ  
なつかしき師のみ姿をフロントのかたへにみつっこみあぐるものあり  
かけよりてわれのぶざまを心よりおわびしたくも言葉いでこず  
あまりにもわびまつる事の多くしてお顔を見ても言葉うしなふ

ゆるみたる心のすべてをひつさげて師と真向ふはことにつらしも  
はるばると肥後の地までもいでまして学生勧誘に心そそがる  
師の君のよはひかさねたまへどお心はいつもながらに胸に迫りく  
かかる師とめぐりあひたるしあはせを友と語りぬ冬の夜長を  
師の君の身をふるはせて説きたまふ御姿いまもうつつにうかぶ

かへし

東京 小田村寅二郎

年の瀬も今日終るなる夕つ方君がたよりをまた読みかへしぬ  
心こめて記しましけむそのふみにそへたるみうた十六首をも  
あはただしき日々は過ぎけり今日こそはみふみうたのかへし記さな  
久びさに訪めし熊本はなつかしき瀬上の君のいませしところ

(編者註・故瀬上安正氏のこと)

亡き君のみ心のたけをそそぎてし後輩はげまさで何のわが身ぞ  
かく思ひかく誓ひつつ訪ねける熊本の後輩ら我を待ちにき  
時経つも知らで語らひつきもせず夜半に及びき後輩らと居れば  
語らひの進むあはひに亡き友もかたへに來まして聞き入りますすがに

徳永志賀片岡北島折田に古川加はり前田も来りぬ

汲みかはず美酒の味のよろしきを偲びかへしつ年越さんとす

すばらしき君のみうたにわが心ほのぼのとしてうれしきろかも

来む年をともにはげまむ来む年のみ国のさまはただことならじを

山内健生君(夜間高校教諭のかたはら国学院大学大学院に学ぶ)

の修士論文

(『古事記』神話に関する一考察―日本思想研究序説―一八七枚)

を読みましたへて感あり(十二月三十一日於青山宅)

思ひきや深き学びゆ生れ出でしこれの論文はも読むにうれしき

これの論文よくも綴りし汝が努力たたへやまずもいま読み了へて

なほも励み汝が持つ才をあますなくあふれいだしめよいやつぎつぎに

昭和五十八年（第六十九号）第七十三号

ナイジェリヤより一時帰国せる山口秀範君も加はり、藤

埼玉・朝霞 長内俊平

井頁、飯島隆史、内海勝彦君らと黒上正一郎先生の御著  
書を輪読

わが家の輪読楽しもナイジェリヤゆ帰り来れる友を迎へて

つねよりも誦<sup>ず</sup>す声高き心地してなき師の書を読み進むかな

冬ながら柔かき日光<sup>ひかげ</sup>差し込める部屋暖かし友らと居れば

輪になりて書読み合へる感動を述べしことばは忘れざるべし

ロンドンにて購<sup>あがな</sup>ひしものとネクタイをはるばる運びわれに賜<sup>たま</sup>びたり

くすみたるグリーンの色佳<sup>よ</sup>しとつくづくと掌<sup>て</sup>にとりみつつ妻のいふかも

小野吉宣兄へ、月刊『国民同胞』二五七号の貴稿「王者

東京 小田村寅二郎

の発想」を讀みて

心こもる文とやいふべしこの文を綴りし人の心しぬばゆ

よく学びよく努めてしあとしるく有難きかな読みゆくなべに  
若き友かくも育ちけり同信の協力の道いくとせここに

とこしへに榮えゆきます日の本の国の柱を記せる文はも  
み心をなほも傾け<sup>すゑに</sup>皇国の<sup>まこと</sup>真の姿学び給へや

昭和五十八年三月、萩市・長寿寺における「春合宿」に

向けての「関東地区参加学生所懐表明プリント」(正大寮

発行)を読み

それぞれに憶ひを籠めて綴りける刷りぶみ嬉しく読み終へにけり  
現し世の長き交はり心してかたみに心通はさんとや

かくてこそ良き合宿となりぬべし萩長寿寺のこれの集ひは  
都辺ゆ遠く旅ゆく若き等<sup>ら</sup>に恙<sup>つが</sup>なかれと祈りやまずも

小柳陽太郎さん三十三年間の修猷館高校でのおつとめを

了へ退任されるを詠む

三十三年<sup>みとせ</sup>み心そそぎたゆみなくあまたの国土育てし君はも

教へ子ら集ひて君がご夫妻に謝すとふうたげ聞くにうれしき

師とふ人のあるべき道をうつしみにうつつに示せし君にてありけり

み教へを肌(せむ)に心にみ面(せむ)に学びし人らの喜びいかに

みつとめを終へても永久(とほ)にすこやけく過したまへや御夫妻ともに

かへしのうた(小田村寅二郎さんへ)

福岡 小柳陽太郎

目に見えぬえにしかしこし得がたかるあまたの教へ子にめぐりあひにき

三十三年の長き月日を若きらに支へられつつけふまでは来ぬ

一人一人の面わつばらかにしぬびつつ至らぬ我をただ恥づるかな

寂知(さびち)浩一、八木秀次両兄、萩・長寿寺の春合宿の帰途、小生の

宿に一泊し、東京に帰りて便りあり。その返し(四月一日)

東京のみ友ゆみ便りいただきて白金台の森おもふかな

よくぞわが里訪ひましぬ東京の二人の友らよくぞ来ませる

突然のことにしあればもてなしも思ふがままにならざりしかな

東京に帰るたちまち新しき友を求めて語りたまふか

小柳陽太郎兄より修猷館の教壇を去らるるご挨拶状を

いただきて(五月十日)

教壇を君去りたまふみたよりをいただきまつる春たけなはの日  
その日はもいつかあらむと思ひしにつひにその日は来しか今年は  
三十あまり二とせ九つきのちかたむけ導きませし若きをのこを  
栄達は求めたまはずひたすらに若きらそだてみちびきたまひし  
ともすればくづれむとする吾が心振ひ立たせ来し君のみ文に

(小柳兄論文『勇者、正岡子規』のことを)

かへし

福岡 小柳陽太郎

君がみうたたびにし日よりみ姿のまなかひ去らず今日もおもへり  
至らざる我をかくまで思ひたまふ友の情に生きこしものを  
八雲立つ出雲なつかし日の本のとはのいのちと雲わくところ  
今日もまた出雲の山ははるばるに雲わきをらむ目ぢの限りを  
いつかまた訪ふ日もあらむ玉造いでゆの里のますらをがもと

内海勝彦、佐代子さんの結婚を祝す（五月二十一日）

さはやかに若葉色ますこの時しいもせのちぎり結びたまひし

噂にはききゐたりけりお二人の不思議のえにしことほぎまつる

新郎に新婦よりそひ喜びの挙式のさまをゑがきみるかも

村上は内海に変わるもみりなる父母にも変らずかへたまへや（佐代子さまに）

吾子もまた四月のよき日同じ日に神戸の人にとつきゆきにき（次女信子）

たよりのはしに

朝霞 長内俊平

夕なづむ帰り路にして揚雲雀なきつつ高く昇るをみつむる

いづくまでのぼりゆくらむあげひばりみつし念ふ遠住む友を

まなびの道すすまざれどもこつこつと太子のみことばたどりてゆかむ

ほととぎす二声なきてすぎにけり「義疏」よみまつる子の刻にして

当地の産土神社の老楠、樹齢七百年の由にて天然記念物

佐賀 末次祐司

の指定をうけまことに喜ぶべきことなるに関係者は管理



のことにのみ心奪はれ木の魂を忘れぬるを憤ろしく思ひ  
て詠める

神木の魂を祀らむこと忘れただあげつらふ管理費のこと  
さかしらな言あげにくれもろともに祝はむことを忘れて悲し  
もろともに町人集ひ樹をかこみ御饌御酒ささげ祝はむものを  
此の春も若葉はもえて活き活きと楠の生命は我に迫れり

一條真通氏より比島巡拝記を戴いて返し、真通氏の実  
兄にて共に中国正大寮生たりし亡き一條浩通兄を思ふ

下関 宝辺正久

はらからがルソンの土に落したる涙を君ようけ給ふらむ  
いくさ遠く過ぐるといへど身を捨ててみくにつくししいのちは消えず  
にこやかに部下はげまして往き来せる君の陣地よ低き丘のべ  
もののふの眉もきびしく戦ひし姿しのばゆその戦場に  
砲弾の降り裂け散りしと偲びつつはらからが立つその一とこ  
ねんごろの供養たちまち君のたまやそのふるさとに帰り給ふらむ  
異国の子らも寄りくるみまつりのかなしや君のゑまふがごとく

みんなみに幾千里ぞも君がゆきし広きアジアの空かぎりなく  
亡びざる日本を祈りて身を捨てし君を忘れぬや年はふるとも  
山口のわれらが宿にて親鸞と松陰を読みしころなつかしき  
ふるさとの厚き冬着をかぶりては書よみたりし君にしありけり（一條兄は盛岡出身）  
はらからがルソンの丘に君の名を呼びしときけばたへがたきかな

真珠湾鎮魂のうた

北九州 山田輝彦

開戦の日ははるけくもなりしかな今日たづね来つパール・ハーバー  
手ふるればたちまち色に染るべし波うちしづく紺碧の海

真珠湾扼やすることく外洋に向ひて開く狭き水門

観光船アドベンチャー号進みゆく真珠湾口は狭き水道

湾口の水底深く進みゆく特殊潜航艇うつつに見ゆる

「君の為何か惜まん若桜散って甲斐ある命なりせば」

かく詠みてうなぞこ深く沈みけむ古野少佐のみうたかなしき

かの日には乙女なりけむ夜来イェライシャン香海面ウナムに投げて祈る人あり

そを見つつ妻もうなづく征く日には遺書したためしわれらならずや

征きてまた還らぬ人よかの日よりいくさに失せし友いくたりぞ

西の方ワイアナエ山脈の鞍部より山肌かすめ雷撃機突入す

トラ・トラの発信受けてきほひたち征きしつはものまなかひ去らず

フォード島の岸辺に泊<sup>は</sup>てし米艦隊たちまちほのほとけぶりにつつまる

戦艦ユタの残骸今も赤錆びて将士のむくろとこしへに眠る

アリゾナの沈みし艦を悼むごと白亜の記念館海上にあり

星条旗八月の陽にはためきて戦士のたまに応ふるごとし

たゆみなき国の守りか原潜は今し出でゆく外洋さして

敵味方死力尽して戦ひしかのたたかひの日も遠ざかる

ホノルルの街見はるかす山上の軍人墓地の墓石<sup>ほまき</sup>はてなし

墓にさすブーゲンビリアの紅き花芝生の中に燃ゆるがごとし

たらちねの母のごとくにゑまひつつ静かに立てり聖母マリアは

おごそかにみたままつるは国ぶりのちがひを越えし人のまごころ

われもまたむかしの仇のいくさびとたま安かれと熱き祈りす

華<sup>はな</sup>やげるよそひ身につけこと国のことばゆきかふホノルルの街

天路遠くわれは来りて真珠湾散りにし人のたま鎮めする  
波しぶき顔にうけつつ行く船の舳<sup>つ</sup>さきに立ちて心足らへり  
いつの日か詣でむねがひ果し得つ真珠湾上風さやかなり

ただならぬ夢を見て正に心緒を述ぶ

富山 廣瀬 誠

ソ連軍北海道に押入れりとただならぬ夢われは見しかも

木製の飛行機にわれうち乗りて歯をくひしばり飛び立ちしかも

おんぼろのこの木製機新鋭のソ連の武器にいかに対すべき

何事もなしえぬわれぞ夢うつつ国憂へつつ憤ろしも

松陰の叱咤のみ声天にきらめき雷とどろき響きくるかも

松陰「備へとは艦と砲との謂ならずわがしきしまの大和魂」

大和心振り起さずば日の本のゆくてあやふしまさにあやふし

ただならぬ世にぞありける教育の乱れ正さずばいかなるべき

蒲生君平の「不恤<sup>せつちつ</sup>緯」読みて奮ひ立ちロシアに渡りし志士嵯峨寿安

おそろしき浪天を打ちひた寄せに押し寄せむとぞ海は騒げる

日の本におしかぶさりて暗きかも息苦しきかも熊の如き国

北辺におし迫るもの打ちかへし守りぬく力いま養はむ

八代市・松永みち子さんより晩白柚ばんぱいゆをいただきて(十二月十日)

思はぬにめづらしき柚ゆずいただきてうれしきかもよ君の心の

大きなるみかんなるかも鹿児島鹿児島のざぼんに似たるみれどあかなく

このみかん床とこにかざりて新しき年をむかへむ人驚かむ

かにかくにこの大きなる晩白柚ばんぱいゆいただきすがめつ君ししぬぶも

昭和五十九年（第七十四号〜第七十六号）

故島崎祐司君の不慮の御逝去を悼みてみ霊のみ前に

東京 小田村寅二郎

などてかく疾く逝きましきすばらしき才とみ心持ちたまひしに  
悲しとも言はむすべなし為すありし前途はるけき君にしあるに  
遺されしみ親はらから悲しみにむせびたまひしみ心はいかに  
今日よりはみ魂安けく在しませとただに祈るも友らと共に

沢部寿孫兄の御母堂一月十九日郷里長崎にて御逝去、

千葉・柏 沢部寿孫

長内俊平兄御悼みの歌をお送りしたところ、その返し  
の歌として

とつぜんの電話おきても信じ得ずすこやかにませし母の危篤を

天地もなげきいますか駅めざし歩む路上に雪ふりみだる

疾くゆかばまだ間に合はむとのはかなかる望みをのせて汽車ひたはしる

もの言はず迎へ給ひぬ母上のみ枕のそばに座りしときは

みかん駆除田植糸草取り稲刈りにいそしみ給ひし母みまかりぬ

子供らのことのみ思ひて生きませし母上なりしと思ひつきざり

孫四人育て給ひし母上のみまかりまして支柱の失せぬ

母上の死を知らずして部屋中を走り回れる子らのかなしも

弟妹と力を協せ日の本の人に恥ぢずに生きむとぞ思ふ

わが母の死をいたみますふるさとの人のなさけのあたたかさかな

三月二日満年齢が古稀に当り生母より祝ひをいただきし

東京 小田村寅二郎

お札の手紙のあとに

たらちねの母ゆたばりし紫の色あざやけきこれの蒲団は

み心のこもる品かもわが古稀をことほぎたまふ九十路ここのそじの母は(生母は数へで九十七歳)

若かりし頃のか弱きこれの身の今に永らふることのかしこさ

母上のみ心わが身に注がれし七十年ななそとじなりなにと謝すべき

御眼みまゆ悪き御不自由あれどみからだはすこやかにま在すことのうれしも

伊勢神宮参拝（二月二十六日）

バスおりて参宮橋を渡りつつみおろす五十鈴川にぎりたり

大雨の降りにしあとの五十鈴川茶色ににぎり流れ早しも

五十鈴川清き流れのま清水をくみなむ思ひむなしくなりぬ

うつしよの最後のねがひ五十鈴川の水飲みなむと云ひし人はも（故桑原暁一さん）

参り路をゆきつつ仰ぐ神路山雨あがりして雲たちあがる

春あさき伊勢神宮の参り路はうす寒くして身のひきしまる

参る人かへる人らのうちつづきにぎはしきかも参道ゆけば

宝辺正久・小柳陽太郎・長内俊平先生を迎へて箱根を案

小田原 岩越豊雄

内す（五月十三日）

はろばろと箱根に來ませる師の君を案内せむと勇みたちきぬ

足柄の碓氷古道にさ霧たち尊往時のおもかげ深し（日本武尊）

年ふりし杉の木の間にしき曾我兄弟のみ社の立つ

親鸞が弟子と別れしといふ笈の平のみあとに深く霧のたちこむ



師と共に山深き寺訪ねきて念仏供養するはかしこし(阿弥陀寺)

テレビNHK特集「皇居」にて、天皇陛下御署名の御姿  
を拝しまつりて

富山 廣瀬 誠

心こめ署名したまふみ姿を間近に仰ぐ涙ぐましも

一筆一筆御心こめます指の先息つめて見つ畏かれども

畏くも物珍しくも筆執らす大御姿を見守りまつるも

夢(七月三日)

ただ一人鳥にまします大君ををろがみまつりし夢のゆゆしさ

何事か悩ませたまふ大君をま近に仰ぎ胸とどろきつ

水を渡り水かきみだし近づけばわが大君は気づかせたまふ

畏けれどわが大君を背負ひまつり腰なづみつつ水を渡りし

後醍醐天皇隠岐の島より負ひまつり荒海渡りし古事を思ひつ

大君はわれを召し寄せ近々と喜びの言葉かけさせたまふ

富山かと富山のふみをとりにて語らせたまふぞうれしかりける

立山の御歌碑のこと立山の美しきことも語りたまひき

玉の緒もゆらに揺れつつ大君のやさしきみ声かかぶりしかも  
なごりをしくさめし夢もありがたきうれしき夢はさめにけるかも  
いつまでも夢のなごりに浸りつつこの朝床に時を過ぐすも

合宿からの帰りに孝明天皇の御陵にて

東京 加納祐五

夏の日の木々のみどりはむせるがにとふ人もなしこのみ陵はかべは  
音もなきみ陵のみまへしまらくはただにかうべをたれてゐたりき

泉涌寺御座所庭園

夏の日のだだしづかなりこの庭に蟬の声のみときをりはして

長内俊平先生より見舞ひの便りを頂きて

東京 松田信一郎

御見舞のみふみ頂き有難き思ひに胸のあつくなりゆく

かたじけなきみふみをいただき恥かしき思ひと共に気力湧き出づ  
師のもとにはるばる集ひてみ友らのつとめ合ひますを偲びまつるも  
黒上先生の御声を聴かむとくり返し読みつとめますみ友ら忘れず

九月二十二日、慰霊祭に赴く途上、ふと立ち寄りたる古書店にて

富山 廣瀬 誠

高木尚一先輩ゆかりの『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』

を入手して

思はざる人のゆかりと喜びて手もふるへつつ古書を求めつ  
なき人のみたま祭に手に入れしくしきえに<sup>ひとまき</sup>はただ事にあらず  
はるかなる太子のみちびき降りそそぐ亡き師のみ心沁みて思ほゆ  
贈りし人贈られし人世になくて形見の一卷とは<sup>ひとまき</sup>にかなしも  
かはるがはる手に取り持ちて披きつつ亡き人恋ふる心かなしも

(本書裏扉の書込みによれば、高木尚一先輩より伊崎晃氏に贈られし書なり)  
慰霊祭に参列して

神づかさ読みあぐる御名の一つ一つ耳澄ましつつ心にとめゆく  
うら若くいのち果てたる友の名を耳にとめつつ涙こぼるも  
献詠歌朗々とひびきなき人のみたまに<sup>こたま</sup>弔して返りくるがに  
久々に逢ひしうれしさ名札見てその名確かめ手を握るかも

長内俊平兄へ(八月二十五日)

みちのくの里に帰りて虫のねを心ゆくまで聞きてねませしか

虫の音をこころゆくまでききましてねませしといふうたのよろしも  
われもまたこの日夜ごろはしくしくに虫のねききつつ暮らしあるかも

長内俊平兄へ（九月五日）

君のこと思へばたのしおのづから心たのしくなりくるものを  
君のことしぬべばふしぎおのづから心豊かになりくるものを  
あかときに戸を開け放ち庭もせになく虫のねをあかずきくかな

昭和六十年（第七十七号〜第七十九号）

思はぬに胃潰瘍にて松江赤十字病院に入院す（二月二十二日）

胃カメラをのむ

名前のみ聞きをりたりし胃カメラをくす師の指示に今日のみにけり  
食道は麻痺しをるらむ思ひしゆいたみのなくてカメラのみたり

胃壁をば診みますますらむくすしはもパチパチ音させカメラとります

何やらむドイツ語言ひて看護婦に指図したまふ暗き部屋にて

思ひしゆカメラの時間長かるはいづこか悪あしきところのあるか

内壁の一部に潰瘍あると言ひくすしは糸にかき示したまふも

今日すぐに入院せよとの指示うけてくるべきものがきしと思ひき

ややややに心しづめて電話にて家なる妹いもに仔細告げにし

入院す

とつぜんのことにしあれば妻も子も驚き急ぎ病院にこし

をしものを食ひすぎたればしばらくはこやせと神のみしめしなるべし

六十あまり三つとせにしてはじめてにやまひを得たりかしこみいこはむ

はつば年は大事な年と出雲なる宮の司つかさは示しませしを(はつば 六十四歳)

年なるぞむりをするなど人々の言ひにしことのまこととなりぬ

別るるにくすしにみせよとさとしたる友の言葉の思ひ出さるる

(二月三日福岡市で行はれた「国文研」理事会にて)

しばらくはなりはひ忘れあめつちのみめぐみうけつついこはむともふ

寒かんのさむさぶり返す(二月二十五日)

ぶり返す寒かんのさむさよ病室の窓風打ちて小雪ふるなり

くれなつむ冬の日ざしのむれ立てるビルを照らして目にはさやけし

病室は五階にあれば高どよりみる街なみのみれどあかぬかも

ビルの上松並木の上冬空に寒げにみゆる千鳥城はも

家居する妻子は如何しをらむ暗れなむとしていまだ来ざるは  
このやまひ神のさとしとかしこみてやしなはむかも心豊かに  
寒風の吹く大空を羽根ひろげ風にのりつつ舞ふ鳶ともし

たより(三月二日)

朝霞 長内俊平

飲む酒もうまからぬかなわが友がふかいたづきに臥しある思へば  
友の便り神に供へてひたすらにたひらかならむを祈りまつりつ  
三食昼寝つきなりと冗談を添へつるふみにしばし息づく  
今朝みれば糸蘭一輪咲き出でぬ友の病のおこたるしるしに  
近からは日ごと朝ごとゆくべきをせんすべをなみ遠祈るかも

外泊を許され、自宅に一泊してまた病院に帰る(三月四日)

家族みな病室に来て語り合ひ別れしあとのさびしさまさる  
さびしさをけしなむものと廊下に出夜の街並ながめやるかも  
ながめやる街並ネオン輝きて夜さかりなり夜のちまたは

別れこし家族のことの思はれて吾はさぶしも一人しあれば

ますらをのゆくてふみちをきはめなむこれの縁えにしをばのどにすごさじ

長内俊平大兄より歌便りいただきて返し（三月四日）

はしき友有難きかな便りすればたちまちうたの便りのつきぬ

吾がことをかくまで心に掛けたまひうただよりする友有難し

近からば日毎夜毎に訪はむてふ友の心の有難きかな

吾が便り神に供へて早やいえよと祈り給ひし心ばせはも

目にはもよ見えはせざれど温かき友の心に力わきくる

吾と同じ病にかかりし人あまたありけるものを恐るべしやは

今はただくすしの指示にしたがひて病いやさむことし思ふも

くさぐさのなすべきことはあるなれど心豊かに養はむかも

神々のみしめしなるぞ有難くしたがひ養ひ行かむと思ふ

きはまればまたよみがへる道あるを信じ病を養ひゆかむ

今日はしもみ空は晴れて向つ尾ものどかにみえて春來るらし



たよりのかへし(三月四日)

朝霞 長内俊平

いたづきに臥しある友を思ひつつ雲の姿をかしこみ拝す  
わが友の心いやすとたちのぼる出雲の雲を偲びやるかな  
安くませ神の守りのゆたかにもみ友の上にあるを信ぜむ

たよりのはしに(三月五日)

やや空は明るくなれど友の住む西空かけてひさめふりくる  
友はいまいかにかあらむ遠住めばただかくあらむと偲びやるのみ

たより(三月七日)

わが友はいかにあるらむ夜をこめてわがぬばたまの夢にみえくる

たよりのはしに(三月七日)

福岡 小柳陽太郎

ますらをの雄心ふりおこし身に迫る病魔ことごと切りそけたまへ

たよりのはしに(三月八日)

下関 宝辺正久

わが家のなりはひ思ひつつ妹の君を待つとふ歌のさびしかりけり  
夕陽てる雪の山なみ見はるかす友かしこみて病に伏すか  
われらまた君の心を天地の神もみそなはしませとただに祈らむ

ますらをのゑがほ思ひつつ春さりてまたあはむ日の待たるるものを

長内俊平大兄へのかへし（三月八日）

一人ねにさびしきときは君ゆたびし便りよみつついねにけるかも

東にゆく雲みつつ都なる友の上をばひたしぬぶかも

堀川の柳ほのかに黄の色に芽ぶくを見れば春は来ぬらし

あしたよりこの降る雨に冬枯れの草木の今や芽ぶきそむらむ

友への便りのはしに（三月九日）

陽はいまや登らむとする山の端にかかりし雲を朱あけにそめつつ

さしのぼる朝日のごとくさはやかな心におのづとなりてゆくかも

東ひしがしに日毎夜毎に吾がことを思ふ友あり心ひるむな

ますらをの雄心ふるひ起し病魔切れと西の友より便りのつきぬ

手術までは不愉快なれど耐へませと西の友はもはげましたまふ

今日はしも日曜なればたまさかに人の話声きこえ静かなるかも

友へ、三月十日の福岡市での「国文研」理事会を思ひ出しつつ

熊本 徳永正巳

いつになく酒ふふまずでもだしたる君が面わのさみしかりけり  
今しばしくすしがわざを頼りにて癒ゆる日待ちませ心豊かに

十三日(明日)手術だと聞き、明治神宮に君の代りにお詣り

朝霞 長内俊平

して来た。必ず成功することを信じてゐる(三月十二日)

よべよりの雨のあがりて玉砂利の参り道清し代々木大宮

くすのきのはむれきよらにかがやきてひかりてみゆる空くもれども

君とめでし神宮橋の楓木かへぎの木ぬれ萌えつつ枯葉のままに

大み前に明日は青砥が手術ですとぬかづきかしこみつけまつるかな

参り終へ仰ぐみあらかのはれそめし空にひとつら鴨のゆくみゆ

手術明日に迫れり(三月十二日)

くすしました友らの教へかしこみて明日はいよいよ手術するなり

全身に麻酔をかけてするなれば痛くもかゆくもなしと人言ふ  
わが身には初の試練のことなればいささか心の乱れむとすも

ますらをの雄心ふるひおこしいさぎよくことにしたがはむほかにみちなし  
入浴を早めに体をよく洗ひ薬をのみていねにけるかも

手術室にゆく(三月十三日)

今ははやはらからたちにおくられて車椅子にて手術室にゆく  
いかめしき部屋ぬち廊下いくまがり手術の部屋に今やつきたり  
寝台にあふむけにねて両手横に上半身ははだかになりぬ

キリストのはりつけのさま思ひつつ今はなさるるままになりゆく  
さきみたまくしみたま守らせたまへさきはひたまへ、南無婦依仏、南無婦依法、  
南無婦依僧ととなへまつるうちとこよに入りぬ

注射され鼻にマスクをあてられてなさるがままにねむりに入りぬ  
手術終了

終りましたよの声に再びうつしよに帰りぬもうろうとして  
しばらくはあの世この世をゆききしてこの世の人に今や帰りぬ  
はらからの喜びの声よそにして我は痛しも傷口いたみ

たんつまり身動きすれば腹いたみ子規の思ひのうつしくなりぬ

手術の翌日(三月十四日)病室より

カーテンをくれば夜明けの東の空高遠く大山のみゆ

いのちありてながむる朝けの雲の間ゆ赤き太陽かがやきのぼる

再びもよみがへり来ぬ友どちの厚き思ひに支へられつつ

奇しびなる国つみ魂のふゆうけて手術ことなく終へにけるかも

痰たんつまり息苦いきぐるしもよ子規居士の思ひ思ひつつ一夜すごせし

妹いもと二人昇る朝日にま向ひて祈る心を何にたとへむ

長内俊平兄へ(三月二十八日)

友どちの酒飲みしてふ便りみつつ吾は独りして牛乳のむも

日毎日毎病いえゆくよろこびを都の友につぐるうれしさ

たゆまずもすすむがををしの大御歌仰ぎまつりつつ臥してをるかも

友どちの厚き思ひを思ひつつ今しばらくはいこひてをらな

たよりのはしに、長内俊平兄へ(四月五日)

花盛る新宿御苑のうたよみつみやこのあけくれしぬびつつあり  
胃袋の細くなりければ少しづつひねもす食しをり牛のごとくに  
朝床に夢よりさめてまづ思ふ今日一日のいのちありしを

四月二十六日退院す

病院にふた月あまり五日ゐて吾が家に帰ればうれしさあふる  
ともどちの厚き思ひに支へられここまでぞこし有難きかな  
目もさやに色のましたる葉桜の並木めでつつ家に帰りぬ  
家人のまた従業員の祝ひごときくがうれしも病いえたり  
妻子孫うちそろひつつ語りつつ食べる夕げの何ぞ楽しき  
ビスケット孫とあらそひ食む吾を思へばをかし病みあがり身に（間食なり）  
朝戸出にうぐひすききつつ吾のことをしぬばす友の情忘れじ

たよりのはしに（四月二十七日）

下関 宝辺正久

わが庭にはじめて咲きし石楠花しやくなげの散りつつ春はなほさかりなり

朝戸出にうぐひす鳴けばいたききずいえゆく友をはるか思ふも

よく噛みて飯食いひはむらむか一日一日いえゆく友を思ふがうれし

いかばかり憂ひたまひし妹の君のせつなるゑみが君をつつむらむ

神々の出雲の里のますらをにことほぎまをすみきをささげて

たよりのはしに(五月十五日)明治神宮参拝

朝霞 長内俊平

わが友の大き手術の無事終へしお礼参りにと参り路たどる

楠くすのぎの若葉明るく萌ゆる芽は紅葉とまがふ赤味を帯びて

わが友に賜たびよと祈りし大み守りうつしきしるしいま謝しまつる

はればれと松の秀枝ひゆ仰ぎみるみ空を西に行く雲のあり

### 退院ご挨拶

拜啓、八十八夜もすぎ、いよいよ春酩の候益々ご清適のことと、お慶び申し上げます。

小生今回の入院に際しましては、ご懇切なる御見舞を賜り、誠に有難うございました。

心から御礼申し上げます。お蔭様で四月二十六日退院致しました。何しろ生まれてはじ

めての入院であり、人生六十四年にして胃潰瘍の切開手術であり、手術迄は心痛致し

ました。その間先輩諸賢、よき人のおほせをかうむりて、心からはげまされ、御助言により勇氣を振ひ起して手術にのぞみました。

手術后、麻酔から覚めたとき、再び生き返つた喜びは忘れられません。

神仏のご加護、主治医の献身的治療、看護婦さんの手厚い看護、家族の者、親類、知己の方々の心からの温い見守りにより、日に日に回復して来ました。

本当に生かして頂いてゐる喜びを味はひ感動致してゐる昨今であります。この上は余生を「世のため人のため」につくしたく、感謝の念で一杯であります。どうぞ宜敷く、ご教導の程お願い申し上げます。退院致しましたものの三度の食事を六度に分けて取る状態であり、体力も充分に回復致してをりませんので、ぼちぼち日時にまかせて養生する所存であります。

先づは乱筆をもちまして、退院ご挨拶迄。

合掌

ひとたびはうせにしいのち再びも生きかへりきぬ有難きかな

はからざるえも言はれざるいたつきをのりこえてきぬ神のまにまに

ひんがしにさしのぼりくる朝日子を日毎ごとをろがむ何のさちぞも



昭和六十年五月吉日

青砥宏一

諸大兄に

大患にかかりたまひしを癒えますを寿ぎまつる(五月二十五日)

東京 三浦貞蔵

久しくも歌ぶみ来ざれば病みこやしいますにあらずやと心にかけて来し

はからずもみ名しるしたる封筒をこころときめきいそぎひらきぬ

吾が憂ひゆめにはあらざりき歌ぶみをよみつつ知りぬ君病みませしを

知らざりしこととはいへどお見舞のたよりもなさで許させたまへ

心知る友が病のいえませと宮居まうでしとふ友がまごころ

まごころをこめたる友らの数々のうたをよみつつ心はれくる

ビスケットをうまごとあらそひくらひしとふみうたよみつつ心やすけし

やまひいえ力づきまししか歌ぶみを書きますまでに力づきまししか

み病のいえしとはいへ大手術のあとにしあれば身をやしなひたまへ

こまやかのかくすしがことばよくまもり心しづかに身をやしなひたまへ

みいのちはひとりのものならずはらからのことを思ひて身をやしなひたまへ

現し世に生くるえにしを畏みてこころあせらずやしなひたまへ  
はろかなる出雲の国に住む君を偲びつつたなきうた書きおくる

たよりのはしに

下関 宝辺正久

なつかしき『青砥通信』届きけり五枚一杯につづられし歌よ  
すこやかに病いえたる友の喜びあふるるかと思ふこの『通信』に  
一七二首かきつけ終りて安らぐか君を偲ばむこのすり文に  
日をおかず君を励ます長内の歌にはわれも涙せりけり

青砥宏一兄を偲んで

埼玉・越谷 星野 貢

いまあるは何の幸ぞもとみ歌よむすがしみ心偲びてやまず  
朝夕に朝日子をがみいたつきの身養ひ給ふみ姿浮びく  
来む夏は友らうち集ひ無事を祝ひ語りあひなむ君をかこみて

たより

富山 廣瀬 誠

驚きてむさぼり読みつ大き手術に君耐へぬきし歌のここだく  
病とも知らでありしをここだくのみ歌おそろし『青砥通信』  
病床の歌見舞の歌返しの歌こもごもにリズム急なり『青砥通信』

手術受くる思ひはわれ知る君が歌ひしひしひびきわが心痛し  
子規しのび君が歌ひし歌のひびき心に迫る潮騒のごと

手術終へ一夜は明けつ昇る日に真向ひしみこころ切に思ほゆ

よろづの病みな癒ゆといふ出雲の湯に浸りてみからだ養ひたまへ

(出雲風土記に「一浴則身体穆平、再灌則萬病消除」とあり)

ただれたる胃を切り捨てて新しく目ざむる力によみがへれ君

長内俊平兄へのかへし(六月二十日)

若き友と太子の御本読むといふ友のいとなみたふとかりけり

わが居間ゆながむる栗の白花の今盛りなり昨年のごとく

日々日々の妹のつくりし飯はみて元気わきくと君に告げなむ

『青砥通信』をいただきて(八月三日)

朝霞 長内俊平

その<sup>あたり</sup>辺に君あるごとき思ひして足袋をもぬがず読みまつるかな(家に帰ってすぐの意)

『青砥通信』を要かなめに友らよびかはす心のにぎはひ何にたとへむ

阿蘇の絵葉書に「車窓より」と題して（八月七日）

阿蘇望蘇閣より 宝辺正久

こたび会へぬ友の三人を偲びつつ空の遠くに立つ雲を見る

（青砥宏一兄のほか、小柳陽太郎、加藤敏治両兄合宿不参加）

青山の阿蘇ぞ目に沁む青き上を雲影動きゆくよしづかに

青山につづきて立てりあらがねの岩の中岳空にそびえて

中岳の噴煙を草千里より見た絵葉書に（八月七日）

阿蘇望蘇閣より 長内俊平

来るべき友みえざればあまた友いませど何か心淋しき

縞しまなして田の面をわたり風ゆけどわがむねはれず君をおもへば

（青砥註……小生七月末より風邪にて発熱、仲々熱とれず遂に合宿行きは病後のことであり、中止のやむなきに至りしが、この宝辺正久、長内俊平両兄よりの望蘇閣からの便りを得て、病氣忘れて中途から参加致しました）

お会ひ出来た嬉しさを（八月十三日）

下関 宝辺正久

山田さんと同じ目方に瘦すといへど心たけくも馳せくる君か

廊下にて加納さんかと思まがへりスマートになりしますらを青砥

手術して日も浅ければ心してすごしませよ友よいでゆの里に

秋風の寒き夕を蟹食ひて君と語ればたのしからまし

合宿より今帰つた(八月十三日)

朝霞 長内俊平

君ありと思へば心ふるひたち思ふことみな語りおほせたり(合宿壇上にたちて)

二日なれど寝起きを共にせしことをただ有難くうれしく思ふ

稲穂つづくひろぬゆたかに雨ふりて音しづかなりあその国原

長内俊平兄へのかへし(八月十七日)

すぎにける阿蘇の合宿思ひつつ裏山になく蟬をきくかな

ともどちの厚き思ひに支へられ二泊三日のつどひ終へけり

二泊を共にねおきしすごしたる楽しき思ひ何にたとへむ

壇上に君語りたる桜島の船上の思ひ心離れず

たよりのはしに(八月十七日)

福岡 小柳陽太郎

病める身の病忘れて合宿にゆきましにけむ君がをごころ

やむにやまれず合宿に来しとふ御心のその高なりのしのぼるかな

出雲路ゆ友よ来ると長内のうしらいかにかよるこびましけむ

よく来たと君を迎ふるみ友らのおもはさながら偲ばるるかな

加納祐五大人へ（八月十七日）

合宿ゆ帰りしのちもみ体のいかがまさむと思はぬ日なし

ありたけのみ思ひ我等に語りたまひやまひの床に伏したまひしか

みからだを心ゆたかにいこひたまひはやいえませとひたに祈るも

たよりのはしに（八月二十日）

君よりの便りなければ日をふるにつれつつ不安つのりくるかな

合宿の疲れいちどにおそひきて臥してあらずやと心をののく

君と我と食事をしつつ語りたることばおもしろしと若きは今も

君のことばに素直に従ひ合宿の流れを話にとり入れたりき

朝霞 長内俊平

加納大人も入院加療ときくほどに出雲の友のつれて思ほゆ

たよりのはしに長内俊平兄へ

東の友の腰痛いかにぞと思ひつつあるに日は過ぎてゆく

あまりにも重きみ仕事されしかば腰なづみけむいこひ給へや

(青砥註・合宿講義や『小田村選集』編集作業など)

すぎし日の慰霊の祭りしぬびつつ献詠集をよみまつるかな

かにかくに小柳兄の夏のうた献詠のうた胸にしむかも

都べもあしたゆふべはひゆるらむ腰温めてすぐしたまへや

「青砥後記」

早いもので合宿后、二カ月半経過致しました。貴兄御元気のことと存じます。

『青砥通信』もおくれ勝ちで申訳ありません。どんどん歌稿をお送り下さい。

「思ふこと思ふがままに言ひてみむ」てふ大御言葉の歌のまにまに(十月二十六日)

青砥通信 第七十九号

昭和六年十月二十六日

○たより(八二) 新田

新田 長内俊平

○たより(八三) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(八四) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(八五) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(八六) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(八七) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(八八) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(八九) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(九〇) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(九一) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(九二) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(九三) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(九四) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(九五) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

○たより(九六) 新田 何子新田 何子新田 何子新田

『青砥通信』最終号



日記・その他から



大道にて共に学びし友らに

『消息』(昭・二九・二)

(編者註・昭和二十八年八月、山口県防府市大道海岸で、

国民文化研究会前身の同志による合宿が行はれた)

大道にてお別れしてより失礼の限り御許し下さい。大道より帰着以来、増築工事に着手。昨冬を以て工事完了。新春より再び客引きに専心出来る様になり、余裕が出来ました。月々の消息御編輯の御努力厚く感謝致して居ります。本年より連絡を密にさして頂きます。昨年の工事中は物価の高騰で工事が予定通り進まず、加ふるに資金が欠乏し苦心しましたが、その間友らの御言葉に支へられ貫徹しました。これまことに同信誌友の厚き情と感謝して居ります。工事中丁度小田村大兄も立寄り下され左記の御歌を下さいました。

青砥大兄に(昭・二八・一一・一九)

君います出雲の国の玉造いでゆの里はなつかしきかな

宿のあるじ君がつとめのにぎはしくさかゆくさまを見るはうれしき

訪ぬるは二度目なりけりこの春のつきぬ思ひに今日も訪ひ来ぬ

近頃問題になつてゐる隠岐の竹島また李ラインの事ですが、海上警備隊に武器あらばと、切齒扼腕する漁民の総決起を新聞紙上に見る時、軍備は速かに成されねばと思ふのですが。何だか他人事のように国民に思はせる政府のやり方、本当の事を訴へて国民の一人一人の肩に国難がおしかかつて居るといふ感情を起さすべきと思ひます。

吉田首相の言ふ耐乏生活も国民的感激裏に展開せざれば失敗でせう。人民を政治せんとする意志こそ国民を分離せしめてゐる原因と存じます。国民的感激こそ如何なる欠乏にも耐へ得られるでせう。(昭・二九・一・二七)

日記を求めて

日記(昭・三〇・二・一二)

日銀松江支店・吾妻哲夫氏に御会ひした日にこのノートを求む。

この日は私の生涯に於ける、戦後初めての十年間のしこりが吹き飛び、雪空の雲の

合間より見ゆる青空の今日位すがすがしく感じた事はありません。吉村大兄とも御会ひ出来、三人で語り合つた短い時間は楽しくなごやかで、今後の私の思想生活に一大開展を約束づけたものと信じます。氷の解ける如くお互の今迄の経て来た体験は別々であつても、語り合ふうちに何物か打ち出せる靈感を感じます。この思想生活に全てを統一し、迷ひつつ来つた今迄の生活に、生命を与へ、生気満ち満ちた日常を送り度く存じます。広江君にも近い内に会ひます。二人よりも三人で語り合ふ交流の早さ、四人になれば不動のものになるでせう。研究発表でなくてもよい、お互に感じて居ることを語り合へば必ず道は開けて来るのだ。

語り終へ別れゆけども語らひの言葉は消えず街ゆくたのし  
あふぎみる御空みそらに雲は多けれど合間あひまゆみゆる青空さやけし

戦死せる亡き友にささぐ（村の慰霊祭にて）

日記（昭・三三・三・二一）

一年ひととせはまためぐり来てなき友のたまよばひする我等つどひて

悲しみの琴の音ひびきあまがける亡き友今や集ひますらむ

川端の柳芽をふきゆく水の春のひざしにさざなみ光る

あたたかき春日をあびてあふぎみる空には雲の一ひらもなし

空ゆかば散る桜花大空に散りにし友のおもかげ浮ぶ

椰子の木の木蔭にねむる亡き友も今し集ふらむまつりにはに

とふ人もなきみんなみの草むらに君眠れるを吾は忘れず

君のいのちとはに亡びず国守る人いやつぎつぎにたえずと思へば

戦ひに敗れたれども日の本とはに亡びずと思ふ友守りませ

にぎやかに我等集ひておくつきの魂たまよばふいとなみみそなはせ君

夜更けに目ざめ寝られざりければ、明治天皇御製を拝誦

日記（昭・三三・四・八）

して後、歌心わきくるまま

小夜ふけて小雨降るらし軒端に雨だれの音静かに聞ゆる

堅き石に瑪瑙めのうこすりて形よき勾玉まがたま作りその砥石とじここに

みおやは昔ゆ今に玉磨みがき夕べはいで湯にひたり来にけり

みおやらの思ひのこれり堅き石にするどく玉をすりしあとあと

するどくもつきし砥石のすぢのあとに昔の人のいたつき偲おぼはる

遠遠し高天原ゆ降りきて玉作りたりわれらの祖先は

弥生式酒壺ゆかしどぶろくを神のみ前に供へけむかも

酒壺を手にとりまなことをればいにしへ人の歌ごゑ聞ゆる

次女・信子（数へ年七歳）入院し、ひと月あまりとなる 日記（昭・三四・六・二六）

親の言ふことをききわけただ一人親とはなれて入院してをり

汝れ一人さびしかれども父母はつねに汝なれのこと胸をはなれず

病院のあけくれしぬぶに父の心はりさけむとす早くいえてよ

神のまもり汝の上うへにありおのづからいえつつあるを深く信ぜむ

「信はこれ義のもとなり」の神言かむこといただきてつけし名前よいつはりあらず

父のふところ

まだ子供の時、おやじとおやじの生家に  
よく行つたものだ

夜、便所にゆくと、ゆく途中に

牛小屋があり、牛が頭を出して居つた  
それが恐しくて

便所にゆけなかつたことを思ひ出す

法事に行つた時のことだらう

向ひの山畑で、一人の男が

畑を打つてゐた

それが妙に印象に残つてゐる



夜明け方、暗いうち

近くの寺から勸行のごんぎょう

鐘が大きく一つなつた

驚き目をさまし

また父のふところに入つて

ねたものだ

忌部いみべの山越えして

野白に行つた

途中寂しいところがあり

とんでうちに帰つたことを思ひ出す

松江から中国山脈の

山並をみると

なんだか懐しいものに  
出合った様な気がする  
特に忌部、野白辺りの  
雪の積つたのをみると  
むしやうになつかしい

日頃の思ひを

遠山に積りし雪をひと目にて室ゆ眺むる居間をつくらむ

日記（昭・三六・二・二）

長女・道子松徳女学院（中学部）入試に失敗す

日記（昭・三六・二・一五）

凍てつきし坂道のぼり松徳の学校いづこといきせき登る

笑みうかべかへる婦人ありその子供パスしたりけむ吾が子は如何に

正門にいたり掲示を胸をどりみれど見当らず七八番

夢のごと帰る吾やもいづこよりわが家に知らせむ足は進まず

二三日夢見は悪くもしもやと思ひ居りしにうつつにここに

吾が力出し得ずして中学に入られざりし悲しかりけむ

「なにごともおもふがままにならざるがかへりて人の身のためにこそ」の大御歌

説ききかせたり吾子に

こたつふとんにくるまり泣く吾子をみて父親吾も男なきしぬ

長府合宿に出で立たんとして

日記（昭・三六・四）

母刀おとこ自はみ病なれば母上に問ひて行きませと言ひし妻はも

良い行儀して待つからに安らけく行きて来ませと子らは言ひたり

くさぐさのしごとはあれど友つどふ合宿さして出でたちてきぬ

下関より長府にくる途中

瀬戸の海朝日にはえてまぶしくもさざなみ立てりバスよりみれば

関門の山はなつかしすぎし年いくさに行きし昔しのぼる

とこしへに悲しみひめて海峡にのぞみたちます赤間神宮

「こんや別館」の地鎮祭をいとなみまつりて

日記（昭・三六・六・二八）

本日は我家にとつて一大記念すべき日なり、即ち玉造一二四六番地に地鎮祭を行つた日である。当日朝来、梅雨模様にてありしが午前十時、祭を行ふ頃には、雨も止み、正に絶好の日となつた。先づ遠藤宮司、橋の渡り初め式と、地鎮の祭を併せて行ひしため、橋を清め、天地の神にまた産土うぶすなの神に、いや榮ゆかむ事を祈念し、後程のちほど、地鎮の祭行はれたり。

つゆぞらの晴れたる今日やまちにまちし地鎮の祭いとなみまつる

新しき土地の鎮めと御湯立ての神事かしこし神うけたまへ

御湯立ての笹のそよそよ別館の敷地きよまる今日のよき日に

うぶすなの神を真先につゆはらひつゆはらひつつ橋渡りそむ

緑なす山のかたへにねむの花赤く咲けるがともしかりけり

おごそかにのりとひろがる葉末吹く風のまにまに新しき地に

世渡りの手だてのなかに旅人の宿を業とぞ吾は定めぬ

人の世の厚き情に今日の日を迎へて祝ふ波止山のもと  
み祭の庭のかたへに建築の材木おろす音山にこだます

大男一人は上に二人下に鳶使ひよし木をおろすさま

この木々をたくみにくみていや高く棟はそびえむ「こんや別館」

穴道湖

日記（昭・三六・九）

穴道湖をうたつた歌があるか

ノー ノー

人の心を底からゆすり動かすものがあるか

ノー ノー

よし それでは俺がうたはう いのち死ぬまでに

大雪のため客足絶ゆ

日記（昭・三八・二・一三）

雪やめばなだれ起ると新聞のつぐるに旅をする人もなし

客室はともしびたえて泊る人なくてすぎゆく二月十三夜

雪の下耐へて松が枝色かへぬみさとしいつかし耐へて忍ばむ

中京方面宣伝の折に熱田神宮に詣づ

日記（昭・三八・一一）

赤き袴はかまつけしみこらのゆきかふをみつつすがしもまゐりぢゆけば

厚く深きひさしの宮居の奥深くしづまりいます倭建命

大神の御前にぬかづき遠とほし古事記のみ言葉誦しまつりぬ

誓ひまつる言葉も知らに大前にぬかづきまつり去りがてぬかも

去りがてに木立に入りて思ひをばしづめて書きぬたかまる思ひを

黒上先生のお墓（徳島市佐古四丁目、真言宗清水寺） 『国民同胞』（昭・三九・八月号）

に詣でて（昭・三九・五・三）

バス降りて記憶をたどり道ゆくに諏訪の社のきだはしのみゆ

諏訪のふもと右に廻ればなつかしき古き御寺の門のみえたり

ふるさとのみちゆくごとくなつかしく師のおくつきにまゐる今日かな

友どちとまうでまつりしくさぐさをしのびてゆくに心しまりぬ

うつしよにあひまつらざりしが奇しきえにしにつながら来りしこの二十年よ

師の君の御墓の横の青石の碑文は立てり昔のごとく

つたなかる吾にはあれど師の君の御教あふぎ生きむと思ふ

師の君の御墓をろがみ去りがてにみあぐる山のみどりさやけし

合宿に出発せんとして

第九回「合宿教室」八桜島V詠草（昭・三九・八）

夕ぐれの宍道の湖うみに陽は沈みさざ波たてり道ゆくなべに

南みなみのみ空をかぎる群山むらやまの上ゆく夏雲力ありけり

なりはひのくさぐさのさやりそをおきて友集ひます薩摩路へいざ

母刀自と妻子供たち従業員も見送る心有難きかな

秋ははや立ちにけむかも人気なき暗きホームにこほろぎの鳴く

筑紫路に汽車入りぬればうちつづく青田の中に蓮畑のみゆ

野にいまだ人は見えぬに朝露にぬれつつ咲ける蓮の花はも

筑紫野や朝空かけて飛ぶ雁のひとつらはつか見えてかくれぬ

筑紫辺のながめあかぬかもあまざかる出雲の国ゆ旅に来ぬれば



昭和四十年代

岡山合宿にて

『国民同胞』(昭・四〇・三月号)

三月六、七、八、九日の岡山大学バルカノン合宿に参加して今日帰つて来ました。都合により七、八、九日と三日しか参加出来ず、六、七日参加の名越、三宅兄とは入れ違ひになり会へませんでした。大学生八名と寢食を共にし古事記、平賀元義、黒上先生の御本を共に輪読、和歌もつくりまことに得るところが大でありました。国家永久の生命を、二十五年間も思ひつづけて来たのですが、友らと別れてから、汽車の中で黒上先生の御本の事、終つた合宿のことなどをあれこれ思ひ浮べてゐるうちに、何か分つた気がしました。まことに有難かつたと思つてをります。(三月九日夜記す)

遠々し和気のおとどのあれまししゆかりしたひて我は来にけり

(和気のおとどⅡ和気清麿)

うたよむと宿舎出づればまゐりぢの松の小枝に小鳥なくなり  
いかにしてわが胸ぬちを若きらに告げむと思ひ一人もの思ふ  
川原の石のさざれをセキレイの身の軽やかに飛ぶがともしき  
御社の前を流るる清き瀬のすめるを見れば心すがしき

草も木もいまだ芽ぶかず吹き来る風肌寒し日は照らせれど  
静なる宿舎にこもり歌もへばたまさかきこゆ汽車のゆく音  
霜白き御社の前大御歌誦するなべにうぐひすのなく

友どちに見送られつつゆくみちに朝日まばゆく霜原てらせり

合宿へ向ふ道にて

第十回「合宿教室」八城島V詠草（昭・四〇・八月）

山の上の入道雲に入日さし豊後国原日の暮れむとす

夜のしじまあたりおほへどさしてゆく宿舎おもへば心にぎはし

吾子とともに合宿へ参加するよろこびを

第十一回「合宿教室」へ雲仙V詠草（昭・四一・八）

なりはひのくさぐさあれどそをおきて雲仙さして出でて来にけり  
去年までは一人なりしが吾子とわれ二人の旅の心にぎはしこぞ

はるかにみたままつりの庭を偲びて

慰霊祭献詠（昭・四一・九）

東のみやこのまつりあまざかる出雲の国ゆをろがみまつる

おほいなるいくさにいのちささげたる友も祭りにつどひますらむ

年月はいやさかれどもなき友のみ顔み言葉今も忘れず

ぬばたまの夜空みあげてなき友のありし日しのびぬ虫なくなべに

うたつくるよろこびを

日記（昭・四二・三）

うたつくる心たのしも泉なしわきくる思ひ紙にかきつく

妻を思ひて

日記（昭・四二・三）

いらだてる心おさへえずいまし方妻をどなりしことを恥ぢたり  
朝早く子等字び舎に送り出し夜遅くまで勤むる吾妹わが妹

阿蘇山

第十二回「合宿教室」ハ阿蘇V詠草（昭・四二・八）

ただけしき神のつくりし山なるかごつごつ岩の天にそき立つ

日本漁船メキシコ海軍に拿捕されしニュースを聞きて

日記（昭・四二・九）

日の御旗風になびかせメキシコの海にすなごるはらからのあり  
ますらをのたけき雄心しぬぼんと子の世界地図開きしらべぬ  
ふるさとを遠く離れて幾千里大和の男鯉釣るなり

遠々し神の御代よりうなばらを渡りし民の思ひ新たに

日の本の保護の及ばぬメキシコの沖にすなごるはらからのあり  
ふるさとに妻子をおきて幾千里海ゆくなりひけはしかりけり  
身のきけんかへりみずして外つ国にすなごる大和の男さちあれ

霧島高原にて

第十三回「合宿教室」入霧島V詠草（昭・四三・八）

身につもるけがれはらひて高原に神のみ声をきかむと思ふ

空也上人を念ふ

日記（昭・四三・一〇）

彼は念仏を唱ふること、間髪を容れなかつた。それで阿弥陀の聖（编者註・空也上人のこと）とよばれた。彼は念仏を呼吸してゐたのである。その念仏は仏に訴へるといふよりも、仏の呼びかけに應へるものであつたであらう。彼はどこでも仏の声を聴いた。水の音、鳥の音、風の音、虫の声、それは全て仏の呼び声であつた。彼はそれに應へずにはゐられなかつたのであらう。

岡山の宿に妻を思ふ

日記（昭・四三・一〇）

家戸出に言ひ合ひをして岡山に出で来しことの今ぞくやしき

かにかくに人は言へども妹よりも恋しきものは他にはあらず

故定巖和尚の霊前に

日記（昭・四四）

あらたまの年のはじめの総代会言ことかはししがさいごととなりぬ

暖かき冬日にはかに粉雪の降りつむ朝あしたみまかり給ひぬ

常日頃住まひ給ひし庵の辺に白梅咲けり主あまじなくして

阿蘇登山

第十四回「合宿教室」八阿蘇V詠草（昭・四四・八）

熔岩のこごしきみちをなづみつ登るかたへに白き花咲く

青砥君への便りのはしに

愛媛・西条 長内俊平

『国民同胞』（昭・四〇・一二月号）

久しくも願ひてありし友の住む出雲路つひに訪ふを得たりき

行く車峠を越えて山陰に入りゆくままに心ときめく

山深くわが乗る車のたどるらし紅葉の色の美しさ増しきて  
深みゆく秋のしじまに並み<sup>な</sup>たてる紅葉の色の美しきかな

宮柱太敷くとふことばさながらに出雲の大社の構へ<sup>やしる</sup>壮なる

友の姿駅舎にありてにこやかにほほ笑み立てりわがゆくさきに

言の葉に出して言はねど友の肩抱けば互<sup>かたみ</sup>に心は通ひぬ

友と会ひしその喜びにまさらむか友が常いふ母堂に会ひ得て

夜遅く訪れし故にみ子達の頭<sup>かしら</sup>なでられざりきよく申してよ

奥さんが土産<sup>つと</sup>にと賜びし瑪瑙<sup>めのう</sup>石何か尊く神に供へぬ

忙しきなりはひあらむをわがためにさきて二日を尽させ給ひぬ

帰りきて玄関入れば吾子のよき声飛び出しぬ妻もつづきて

一夜とは思はれざりき遠くゆきて友を訪ねしこれの旅路は

友と会ひし一夜のうれしさあたたかく心に残る筆とる今も

友と歩みし松江の空よ青深く柔げる陽ざしのみちし小道よ

かへし

『国民同胞』（昭・四〇・一二月号）

わが里を訪ねて伊予に帰りきと思ふたちまち便りとどきぬ

四国なるみ山の木もて漉<sup>す</sup>きにたる和紙に寄せ書うたかきてあり

みづくきのあともしるけく書きつけしうたよみあげぬ声も高らに

ふたたびも三度もよめば君のなさけ通ひくるなり我等の契りよ

けはしかる顔したらむと思ひしに福々し顔と妻は語りぬ

今頃は家居にありて奥様とみ子らと語り居まさむと思ふ

君のうたいいただきすぐに四首つくりこよひ六つくり君に送らむ

長内俊平大兄に東京転勤の知らせをうけて

日記（昭・四五・四）

「熊のたより」よみゆくうちに吾もまた熊となりしか力わききぬ

（長内大兄、自らを熊になぞらふ）

君の便りよみゆくままに庭先に咲ける紫陽花<sup>あぢさゐ</sup>みればさやけし

上京のたのしみ一つふえたりき君と酌<sup>み</sup>みなむ御酒<sup>み</sup>を思へば



真珠湾にて

日記（昭・四五）

胸ぬちに思ひひそめて偲び来しここが真珠の港なるかも

黒人の水兵あやつるボートにて沈みしままのアリゾナを訪ふ

ワイアナの峠上空谷づたひ空のつはもの襲ひ来してふ

アリゾナの魚雷をうけて飛びちれるうつしをみるに身内ふるひぬ

この海に水漬くかばねとことはに鎮もるみ魂をろがみまつる

再びもかへらぬみ魂わだつみゆうけたまへかしそそぐ豊御酒

海底を潜り来してふ小さき艇いづこにねむるや海はこたへず

今はとて去りがてにしてみはるかすワイアナ山脈雨雲たちこむ

ほととぎすの声をききて

第十五回「合宿教室」八雲仙V詠草（昭・四五・八）

頂の展望台に国見すとながむるなべにほととぎす鳴く

全国植樹祭（於島根県三瓶山）に参列して（四月二〇日）『国民同胞』（昭・四六・五月号）

谷間より花火あがればほどもなく御召車はつきたまひけり

一萬あまり五千の人ら全国ゆ集ひてここに御迎へまつる

頭ごしをろがみまつる大君とおきさき今やまさかに立ちます

白髪のいとふえたまひ猫背して御歩みたまふ帽をふりつつ

旗をふり萬歳叫ぶに応へたまひ右に左に御会釈たまふ

集ふ者見渡したまひひとしきり帽つよく振り御座したまへり

植林にいさがある人大前に賞をうけとるものの司ゆ

「諸君ト共ニ会シテ苗ヲ植ウルハウレシ」とのたまひし御声御言葉とはに忘れず

大みことただに拜してみたまわれ流るる涙とどめかねつも

大君の辺にこそ死なぬそこつ岩根堅き心をふるひ起して

大君のみそなはずなべ坂なせる広場にゆきて苗をうゑけり

短けど太き苗とり黒土を掘りて植ゑけり根づきのびよと

植ゑをへてあふぎみすれば三瓶山まひる日うけてまぶしかりけり

こぶ二つらくだの背なしさみどりの空にそびゆる三瓶山はも

大君は今ぞ発ちます萬歳のとどけとばかり誦しまつりぬ

馳せゆく思ひを

第十六回「合宿教室」八霧島V詠草（昭・四六・八）

ひととせの思ひをここにみ友らの集ひの庭にゆかざらめやも

八木山の朝（昭・四六・一一・二五）

西日本地区秋期合宿八木山青年の家V詠草

あさみどり御空はすみて茜雲あかねひとひら向つ山にかかれり

日の丸の旗のぼりゆく朝空に姿勢正して見まもるなかを

合宿の広場のすみのコスモスの花枯れはてて秋ゆかんとす

草むらのひとむらすすき穂のゆれて八木山の朝今や明けたり

小柳陽太郎兄へ

福岡信和会『短歌通信』（昭・四六・一一・三）

つもりにし胸の思ひをみ友らに語りしその日とはに忘れず

み友らの前に語れば吾が思ひ開け来りぬ岩戸の如く

語りにしその日の朝よ竜王の山ますみたる空にそびえし

帰り路のかなちの中よ思ひ湧き思ひ湧き来てはてもなかりき  
うれしさの思ひあふれて君のうた吾子とえぞ地の友に送りぬ

青砥兄にかへし

福岡 小柳陽太郎

躍るとき君がみ心しぬばれてよめばうれしきこれのみうたよ

遠ざかる車の中に合宿をしのびたまひけむ君がみころ

こころこめて語りたまひし八木山の合宿の夜の忘れがたくして

八木山合宿の記録をいただきて（熊本「時習義塾」の友へ） 日記（昭・四七・一・七）

ずつしりと重きすりぶみ正月の三日の朝に吾はうけとる

二日には博多の友ゆうたぶみを三日は肥後よりすりぶみつきぬ

忙しき学びの中夜もいねずここだあみしかこれのすりぶみ

進めてふ軍楽ひびくみおやらのいのちかしこみすすみゆかなむ

阿蘇山の谷のそこひゆふきあぐるマグマの地熱たゆる日あらめや

瀬上安正大兄より「顛倒夢想を遠離すべし」の  
賀状を頂きて

日記（昭・四七・一・一一）

この言葉頭はなれず大兄幼年のはじめに頂きしより

顛倒夢想とは概念思弁することなるか頭の中で

肥の国に君住まひまして一筋に国を憂ひて叫び来ませし

功業も名誉もすててひたすらに来ませしここの年月思ふ

吾が心迷へるときはみ友らをしぬぶ心にまた力得ぬ

歴史とは——聖徳太子を憶念しまつりて——

日記（昭・四七・一・一一）

この日記を松江市千鳥書房にて求む。

この日、頭の中に浮んで離れなかつた太子のみ言葉「菩薩は心益物を存するが故に

生死を厭はず、萬徳常果を證せんと欲するが故に涅槃を畏れず」（編者註・聖徳太子の『維摩經義疏・仏国品』にあるお言葉、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』五四頁参照）である。

この二、三日黒上先生の本につかれた様な気で読み、太子を憶念しまつり共に共に友等と研鑽してゆかうと心を固めてゐる。

歴史とは自分が体験したことが歴史である。

葦<sup>あし</sup>牙寮の友らへ

福岡信和会『短歌通信』（昭・四七・二・二四）

新しき年のはじめにみ友らのうたぶみよむはなんぞうれしき  
葦牙の寮につどひてはげみます友のあけくれしぬびまつるも  
み国はも乱るるにあらず吾が思ひ乱れゐることつつしみ思はむ

天本和馬兄に

敷島の道はかしこしまそ鏡心そのままうつす思へば

福山宏一兄に

吾と同じ名前の人のうたみいで顔は知らねどそぞろしたしき

川井泰彦兄に

くろがねの的いし人もあるものを友と思ひの通はざらめや

久々宮章兄に

学び舎を去る日近づくあますなく心のたけをうたひたまへや

友池仁暢兄に

こぞの秋集ひしときの事務局のつつましつとめただ有難き

堀田真澄兄に

竜王の山さがしみとしりへよりおしてたびにし心忘れず

小野吉宣兄に

心打つ言葉かずかず福岡のなまりまじへて語りたまひし

吉田哲太郎兄に

今生の思ひのたけを語らむと君のたまひし班の友らに

前田秀一郎兄に

（前田兄と語ると亡き寺尾博之兄の学生時代の話し振りとよく似てをり、道のつながりをひしひしと感じます）

君のとしぬびまつれば油山自刃したりし友思ふかな

小柳左門兄に

正行よはげみたまへや父君の開きたまひし道はごごしも

また友ら一同に

かくばかりはしき友らにうたかきて送るえにしに力湧き出づ

なつかしき思ひあふれてみ友らにうたかき送るうれしひととき

聖王のみをしへかしこみともどもにつとめ合はなむよびかはしつづ

息子・誠一の成人式を祝ふ

日記（昭・四七・一・一五）

本日出雲大社に詣づ

吾児誠一の成人式の日なり

左の電文を打つ

セイジンシキオメデタウ「イツモナルタイシヤニマウデイノルナルアコマスラヲ



ノミチユクベント」チチ」

成人式なる言葉吾が意にそぐはず、「加冠の日」「元服の日」と改むべし。成人とは生理的香ふんぶん。加冠、元服と云へば、厳肅な襟を正さず様な語感あり。小生も子供の時（十三歳頃か）一人前の着物と袴はかまを作つて頂いた日が忘れられない。

長女・道子結婚式に出発の朝

福岡信和会『短歌通信』（昭・四七・二・二四）

（昭・四七・一・二三）

高島田ゆひてうちかけ装ひて吾子はすわりぬ別れの膳に

身内みないま嫁ぎゆく吾児かこみ御酒酌みみかはすゆく末祝し

二十あまり四とせの月日悲しみつなきつ笑ひつ共にくらしし

かなし子はわが家出でゆく永き日を御世話になりしと両手つかへて

ちちのみのちちは泣きにき来こし方の思ひ一時に胸をふたぎて

あまたひとつどひてあれば心強く持ちて居らむと誓ひをりしに

今日よりは内田と名のり背の君に仕へまつれや白髪生しらゆるまで

参り道をおほふもろ木の葉もたわに動きやまずも吹き来る風に  
帰る人詣づる人も玉砂利をふみならしゆくリズムをなして  
ところどころ昨日ふりにし雪のこる参り道をゆく御代しぬびつ  
口すすぎ手を浄めけりをちこちゆ詣でし知らぬ人にまじりて  
みあかしのともる御社大前にぬかづきまつる醜の民はも  
ひなごとを語りまうづるひなびとの老いに若きにしたしやおぼゆ

桑原暁一大兄をむかへ名和に遊ぶ（四月二日）

『国民同胞』（昭・四七・五月号）

昨日まで降りにし雪の晴れあがり桜のつぼみ開きそめたり

後醍醐天皇御着船所にて

伯耆のや名和の湊の御着船所友とつれだち訪ひし今日かな

あなかしこ隠岐の島をば出でましてこの湊江に着きたまひしか

長年<sup>ながとし</sup>はおそれかしこみ大君を背負ひまつりて迎へまつりき  
遠き代をしのぶすがとみ腰掛の岩に祠<sup>ほくら</sup>をいつきまつれり  
沖ゆ吹く風はつめたく防波堤に波うちよせて裂けてちるかも  
海原は遠くかすみてみはるかす隠岐の島影見むすべもなし  
海原に島影見えずさびしくもただ白波の寄せ返すのみ

島根大「教問研」合宿にて（於枕木山華藏寺）

日記（昭・四七・四）

春浅き山路たどるもみともらの集ひ語らふ華藏寺さして  
杉の井の霊水うまし千年の昔ゆ人ら飲みて来にけむ  
医王山額のいつかしこの国のしづめと建ちし遠き御代はも  
山かげに雪ののこりて並み立てる直き<sup>みとすぎ</sup>太杉天をおほへり

今は亡き井山実兄のみたまの御前に

日記（昭・四七・四・七）

病室に見舞ひしときに「なんぞかんぞたのむ」と言はれし言葉忘れず

君植ゑし裏の山手の桜花主あるじなくして今咲かんとす

長内俊平兄に

日記（昭・四七・四）

しやくやくの芽赤く出で鶯の裏山に来なく春となりけり

北の国如何あるらむ穴ごもるひぐまもねむりさむらむ頃か

組合（旅館）の仕事ゆづりてやうやくに吾にかへりし行手急がむ

み友らのなさけかしこしはしき子も正大寮にうつりすむてふ

親と子と同じき道につらなりて生きてゆく幸君につげなむ

青砥兄に

東京 桑原暁一 日記（昭・四七・四）

「同信の友」と簡単に考へてをりましたが、それは実はあなたたちが僕を同信の友としてみとめて下さるといふことで、「同信の友」といふことに甘えてゐた自分が恥かしく思はれます。ただ僕があなたにてのひらをに向けたことがあると、あなたから言はれたことが嬉しくなりません。（編者註、てのひら療法——たなすゑの道のこと）

友のゐる出雲の雪は寒からず

青砥兄に

東京 桑原暁一 日記（昭・四七・四・一四）

お礼のハガキを出したあとすぐおてがみをいただきました。そのときのお歌、わたくしすべきものではないと思ひ、書きぬいて『同胞』誌の方にまはしました。御諒承ねがひます。『同胞』にお歌の一部（「師のおともして」など）を変へましたこともお許しねがひます。誠一さんと一夕会食しました。居合術をやつてゐるといふことで今年中に三段を取りたいと申してゐました。老人にも向いてゐるから、やつてみると云はれてうれしくなりました。あなたもしごかれたのではないですか。

春雨や素尊すけんの裔こゝろと酒を酌くむ

酔夢

（一）スサノヲノミコト （二）誠一さんのこと

福岡葦牙寮の友らの歌集にグアム島生残りの

日記（昭・四七・四・二二）

横井庄一氏を憶ふ歌ありければ吾もそれに和し

グアム島を憶へば悲し数万の屍るいるい横たはるみゆ

天皇陛下万歳母よ父よ子よ妻よ恋人よの声島にみちみつ  
国のため命すてにし救はれぬ靈は泣きをり南の島に  
打ちよする波を枕に草むらに眠るみたまを忘れせぬかも  
全島にメ縄張りて身を清め船ゆをろがむ島にしあるを  
たまさかに上陸せむに塩ふりてお許し受けて素足にてゆけ  
語りつぎ言ひつぎゆかむ南に大和を恋ひて眠るみたまを

息子誠一に

日記(昭・四七・四・二九)

東京の寮にうつりて一カ月吾子如何して暮しをるらむ  
心知る友としあればにぎはしく語り居らむか若葉さす部屋に  
武蔵野も若葉萌ゆらむ若き日のいのちことごとうたひたまへや

○

吾妹子もさびしとみえて夕さればおのづうはさす子等のことども  
連休に子は帰らずとよその子の帰りし聞きてぐち言ふ吾妹

江田島合宿にて

「江田島合宿」詠草（昭・四七・五）

集ひこし友に語るも神代よりうけつぎ来たる和歌のまさみち  
みおやらののこしたまひしこのいのち心のかぎり吾は語りぬ  
今生こんじょうの思ひをここにしるしたる若き兵士のうたも語りし  
みどりこきこの江田島よ数知れぬ海のをのこは夢をむすびし  
夕そとげをへ外に出づれば対岸の呉の灯ともしびまたたきやます

葦牙寮の友らへ

福岡信和会『短歌通信』（昭・四七・六・九）

電停に今着きにきと電話すればまつままもなくむかひ来ませる  
なつかしき友等の顔よ緑こき木立の下を語りつつゆく  
五月晴広き参り路み友らと共に詣づる宮崎宮に  
遠き世にみかど敵国降伏の願かけまししこれの宮はも  
宮居はも西むきたまひ日の没す海の彼方の国を望ます

忙しきみわざをさきて福岡の友ら来ませり老いも若きも

すき焼を食ひつ語りつ飲みかはすこれのうま酒とはに忘れじ

長内俊平兄へ

日記（昭・四七・六・一四）

一年をへて今日よりは奥様とみ子と住むてふ便りうれしも

父熊と母熊子熊うちつどひ喜ぶさまをしぬびまつるも

十勝の地いまだ見ねども百千<sup>ずもち</sup>花<sup>ばな</sup>いまをさかりに咲きいづらむか

ヨーロッパに旅立たんとして

福岡信和会『短歌通信』（昭・四七・七月号）

ヨーロッパの国のありさまつばらかに吾は見てこむしばしなれども

目に見ゆるそれもあれども底はしる人の心を吾は見て来む

我等はも言の葉もちて全宇宙うたひはらさむ生けるしるしに

長内俊平兄へのかへし

日記（昭・四七・七・二二）



ローマより帰りてみれば水のまが気遣ふ君の便りつきぬぬ

わが里はやすけかりしを水の渦松江の街は畳つきかりし

葦原の国はさやげり天つ神雨をふらしていましめたまふ

あかがちのさまなし流るるをろちはも人をのみにき家をも田をも

身内はも皆元氣にて誠一も今家にあり何かおそれむ

友を送りて

第十七回「合宿教室」八阿蘇V詠草（昭・四七・八月）

まがりかど友は消えゆく地の塩となりて萌えんをひたにいのりつ

鹿持雅澄翁の墓に詣でて

日記（昭・四七・八・二四）

奥つきの石に手あてて祈るなりうしのみ魂のふゆたびたまへ

をがみつつふと気のつけば草むらのあたりをこめて虫のなくなり

高知なる城下の西の丘の上草むらなかにうしねむります

足摺岬にて

朝風のさやに吹き来る高どより太平洋をみはるかすかも  
かつを釣る舟かとも見ゆ朝まだき岬めぐりて出でゆく舟は  
雨風に年月耐へて根づきたる緑ときは木片なびきせり  
このごし絶壁岩に根づきたる黄色鬼百合花さかりなり

なきみ友らに捧ぐ

慰霊祭献詠（昭・四七・九・五）

年月はいやさかれどもみ友らと交はしし笑まひ忘れかねつも

福岡信和会より『短歌通信』を頂き、片岡健兄を

日記（昭・四七・九・一九）

訪ねし時の歌をよみて、片岡健兄に捧ぐ

母のなき子を脊に負<sup>か</sup>ひてあかりなき夜道ゆくてふこれの歌はも  
またとなき友の太声耳そこに忘れ思へや妻<sup>め</sup>をばなくして

そのことをほのに聞きしをうたぶみに今更しぬぶ君のあけくれ  
なくさむる言葉知らなくうつし世の定め悲しと思ひ返せど

青山を枯山なして泣きまししふるごと思ふ君をしのびて

長内俊平兄御母堂長内いし刀白の歌集『雪の玫瑰』

はまなす

日記（昭・四七・一〇・一）

の出版記念会が、青森県建設会館にて挙行される由聞き  
て祝電を打つ

カシユウシユツパンヲシユクス」「ツガルノヤミユキ

ニタヘテイキヌキシツヨキハマナスタフトカリケリ」

「スコヤカニミイノチナガクウタゴコロユタカナラ

ムヲヒタニイノルモ」シマネアヲト」

日記（昭・四七・一〇・一四）

長内俊平兄へ「かへし」のうた

母そばの歌の出版記念会と忙しかりしか便りのなきは

送りこしうたのしらべに十勝野のみ空山川花咲くごとし

ますらをのたてし雄心大雪の峰に比べてしぬびまつるも

長内さんが来て泊り共に焼酎飲みしと電話かけこし東京の子は

### 生涯の願ひ

日記（昭・四八・二）

之こそ真に我を親とし一生を通じて変るまじと信じ得る学生一指を屈するに至らず。余の大望は一生の間に五人にてもよし、斯かる学生を育てむこと之なり。

男一匹生れ来りて命にかけて五人の偉丈夫を育て得たりとせば瞑して可なるに非ずや。松下村塾八畳敷の一室は幾千萬坪の大学よりも偉大なりと知らずや。

教育とは人を育つるなり。人に貴きは精神なり。真心篤き、人を育つる之れ教育の生命なり。

### 桑原暁一先生の御霊前に捧ぐ

『国民同胞』（昭・四八・六月号）

ふたたびもみたびも御手を握り合ひあひ別れしが最後となりぬ

別るるに眼あけられあひみたる今はの思ひとはに忘れず

三池港より島原に渡る

第十八回「合宿教室」八雲仙V詠草（昭・四八・八）

いま船は三池の港たち出でて海原をゆく島原さして

海原のかなたに見え来る雲仙の頂こめて雲たち渡る

甲板にはやて吹き来て布張りの屋根はたはたとなりやまずけり

夕あかり空にのこりて鋸刃のこほなす雲仙嶽を雲動く見ゆ

船はいま陸くがに近づき仰ぎみる雲仙嶽は神さびて見ゆ

御題「朝」歌会始の御製を拝誦して

『国民同胞』（昭・四九・二月号）

朝

岡こえて利島かすかにみゆるかな波風もなき朝のうなばら

幾度も幾度もこの御歌を拝誦すると、堂々たる調べのなかに、大自然に憩はしめらるる感じがして来る。平易な御言葉で朝の散歩の途次、岡としまごしに利島をながめられた

ときの御感懐である。前半句の畳みかけるカ行音、前半句から後半句へ結ばれるナ行音、そしてカ行音とナ行音の交錯「…カ、ナ、ナ、ミ、カ、ゼ…」と続くなめらかさ、カ行音は「足による動作的意義の本性本能を持つ」（林武先生著『国語の建設』九七頁）「岡を越えて行こう…」と言ふ流行歌があるが、これは歩いて岡を越えるのであるが、陛下は目で岡をながめその向かふの利島を目でとらへられるのである。多分須崎からの御眺めと拝察する次第であるが、利島は伊豆半島から地図で測つて海上約三十料、伊豆七島中最小の島で、北から南へ大島あり次の小島だ。笠形をして居り、面積四平方料の小島だ。そして新島、神津島へとつづく。

ナ行音は「ねばねばした滑らかな柔軟な意義の本性本能をもつ語類」（『国語の建設』百頁）とある。実になめらかな御表現である。心眼で大自然をとらへられて、広い柔かい御心で一瞬のうちに統一して居られる。

陛下青年時代の御製、海ばらと波についての

旭光照波（大11）

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にはへるおほうみのほら

朝海（昭8）

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

この二首は具体的な自然を詠まれた歌ではない。青年皇太子、天皇の若き血の躍る荒々しい御決意だ。それに比べると昭和四十九年発表の何とおだやかなしらべであることよ。実朝の有名な「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ」も絶唱であるが、やはり迷ひがある様な気がする。

「君に二心われあらめやも」とうたつたこの薄命の將軍詩人も地下で「ウーン」と言つて感嘆してゐる気がする。

この「朝」の御製のことを書かうと思ひ色々考へて寝に入つたのであるが、この詠まれた時は何時頃であつたかと、ふと考へが及び、あれこれ考へ眠れなかつたのである。日の登る前なのか、曇り日の朝なのかといふことである。朝日といふ表現がないのである。夜明け前ならば莊重である。かすかにとあるので曇り日かも知れない。やはり前者ではないかと思はれる。

岡をながめ、そしてその岡ごしに利島に一心に目を凝らされる天皇、そして利島は

かすかに見える。気がつくと眼前は波風のなき朝のうなばらがひたひたと横たはつてゐる。「岡こえて」の表現が中々出来ない。「利島かすかに」と未明に未来を凝視される天皇。そして「波風もなき朝のうなばら」と世の様を祈念して結ばれるのである。

これを書きをへ何気なく皇后陛下の

くれなゐのよこぐものへに光さしつかのまにして伊豆の朝明く

を拝誦したとき、陛下の連作の歌ではないかと目を怪んだ。やはり陛下の御歌は朝明の歌だ。かう確信した。同じ場所と同じ景色をお詠みになつたものだと自分に言ひ聞かせた。亡き三井甲之氏は『明治天皇御集研究』「坤徳対照」(東京堂版)の項に「『明治天皇御集』ををろがみよみまつるとともに『昭憲皇太后御集』ををろがみよみまつることをめぐまれたる、われら国民のよろこびは、いひあらはすべき言葉もたえて、ただ感涙にむせぶのみである。ここに『昭憲皇太后御集』より、空ゆく日月のごとくならびいましし大御身にちかきあけくれのさましぬびまつるべき御歌を、引用しまつらうとするのである。」と両陛下の御集をよみまつる感激を述べて居られるが、また今、昭和の大御代にこの両陛下の御歌に大御身にちかきあけくれのさましぬびまつる



しあはせを思ふものである。

友らへ（（编者註、ご子息誠一君春季岡山合宿  
において、急病にたふれしことを）

『国民同胞』（昭・四九・五月号）

なつかしき友らと心ゆくまでに語らなと思ひし思ひたがひぬ

しかすがにまた会ふ日あらむそのときをたのしみにして病ひみとらむ

意識乱るるままに合宿のこと語る吾児みれば心に泣かゆ

ひにちはも病の薬おのづからいゆる日待たむ長くはあれど

一時は思想戦線に戦死せしと思ひし吾児蘇り来ぬ

夜明け

第十九回「合宿教室」へ霧島V詠草（昭・四九・八月）

ほのぼのと夜の明けそむる霧島の空に輝く望もちの月ほも

暁の空に雲なく中天に輝きわたる月の影ほも

まんまるの月をし見れば繁二郎の描きし月の思ほゆるかも

あたり早はやや明るみて緑こき山になきそむかなかな蟬は

霧島はうまき里かも夜明け前ふとんの中も肌寒くして

ほこ杉のほなみのかなた鹿兒島の街の辺りかともしかがやく

夜はいまだしかと明けぬを今しばしねむらなと思へど夢はさめつも

このながめ友に見せむをつかれ伏す姿し見れば起しかねつも

朝の集ひ

第二十回「合宿教室」へ阿蘇V詠草（昭・五〇・八）

よべまでも降りにし雨の今朝晴れて朝露ふみて集ふうれしさ

さしのぼる朝日まぶしも晴れ渡るみ空仰ぎて広場に立てば

夏草の葉末におきし百千玉露ももちたまの光れり朝日にはえて

広庭に友らとつどひ日の御旗あがるをみれば心すみゆく

朝礼のつどひ終りて人まれの広場にしげし虫のこゑはも

なつ草にまじり咲きたるうすもものひるがほの花見らくさやけし

高杉のひとむらごしに阿蘇山の峯をかすめて雲のゆくみゆ

最近感ずること

『国民同胞』（昭・五一・五月号）

——第四回春季女子合宿にて——

「女性の生き方」と云ふテーマが研修の一つになつて居りますが、「女性」と云ふ抽象的な言葉から考へ論じては駄目であり、例へば家では、娘であり、姉であり、学校では学生であり、また母であり、町民であり、国民であり、その立場立場の女性として論ぜねば、空転します。自分のその体験から意見を述べることが大切と思ひます。

私の長女の東京に嫁いで居るのが、二番目の子供の出産のため、昨年十二月帰つて来ました。その長男は二歳と六カ月ですが、車で迎へて帰つたとき、この坊主が嬉しかったのか、突然走り出しました。小生の家の居間はコンクリートの階段を五段下がり、又上がる様になつて居ります。夕方でしたので、この階段から落ちたのです。その時その母がこの階段を降りて、子供を抱き上げることの早かつたこと、一瞬、間髪の出来事でした。一心同体とはこの事を云ふのでせう。小生はその子供より臨月の身重の母親が転げでもしたらとその方を心配して冷汗ものでした。母の愛とはこの様な

ことを言ふのでせう。

その母親が病院で無事出産を了へ、二日目に小生出産祝ひかたがた、孫の顔を見に行きました。窓のガラス越しに対面しましたが、高天原を夢みて居るのか、無心に眠つて居りました。病院の廊下で、病室で「出産お目出度う」の言葉が聞かれました。病院で「お目出度う」と云ふのは、産科だけでせう。何だか云ふに云はれぬ萌え上がるものを感じます。小生しばらく廊下に腰掛けて居りましたが、ふと気が付くと廊下に行く産後の母親たちが実に神々しく見えました。その美しさに驚いたのです。一つの生命を産み出した満足感なのでせうか。安心感と責任に満ちた姿位美しいものはな  
いと思ひました。その姿が伊耶那美の命と二重写しになつて見惚れて居りました。

明治天皇御製 地（三十七年）

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける

「この世の母」との御表現に思ひを致すとき、これは大地を御詠みになつたものでありますが、人の母も大地に比すべき偉大なものであることを忘れてはならぬと思ひました。

小生の友人の母親がかつて、「私のそばに居るのは戦死した次男だけです。長男は独立し、長女、次女は他に嫁いで行きました。独身のまま、予科練から艦上攻撃機乗りとなり、ポート・モレスビーで敵艦を雷撃し、戦死したあの子のみ私の心の内に居ります」と。

まことに戦死した息子は母恋しさに今も泣いて居ることです。古事記に「かれ伊耶那岐の大御神、速須佐之男の命に詔りたまはく、『何とかも汝は言依させる国を治らさずて、哭きいさちる』とのりたまへば、答へ白く、『僕は妣の国根の堅洲国に罷らむとおもふがからに哭く』とまをしたまひき」。この文章の前に有名な「青山を枯山なす泣き枯らし海河は悉に泣き乾しき」と云ふのがあります。この言葉は本当に悲しかつたとき、周囲を忘れて泣いたあの経験の悲しさの表現であると思ひます。死なれた母の居られる国、黄泉の国の母恋しさに泣かれたのです。「古事記には日本人の心の原型がある」とは畏友廣瀬誠氏の言であります。よくよく味はつて頂き度く思ひます。母こそ日本人の心、ますらをの心、荒ぶる神々の心の故郷ではないでせうか。また「見ずや、偉人の母は常に傑出せる婦人なるを」(母なき世―河村幹雄)を思

ふときいよいよ母となる人の任務の重大さ、気高い情緒の大切さを思ふものです。「一  
国の文化は母により伝へられる」とも言ひます。

ここに今上陛下が、母宮、貞明皇后様（昭和二十六年御崩御）をしのばれてお詠みに  
なつた御歌を拝誦したく思ひます。

母宮より信濃路の野なる草をたまはりければ（二十年）

わが庭に草木をうゑてはるかなる信濃路にすむ母をしのばむ

夕ぐれのさびしき庭に草をうゑてうれしとぞおもふ母のめぐみを

終戦の年の御歌である。母宮は信濃に御疎開になつて居られたものと思はれる。二  
十年と云ふ年は誠に恐れ多く、語る言葉もないのであるが、母宮の御心に応へられ、  
野なる草の賜物に母宮をはるかに、さびしさに耐へて、憶念し給ふ御歌と拝するので  
あります。

貞明皇后崩御（二十六年）

かなしけれどはふりの庭にふしをがむ人の多きをうれしとぞ思ふ

いでましし浅間の山のふもとより母のたまひしこの草木はも

池のべのかた白草を見るごとに母の心の思ひいでらる

一首目の「かなしけれど」の御表現、かくのごとき悲しい表現を小生は知らない。

声を出して拝誦すると、悲しみにじつと耐へてをられてゐる陛下の御心がひしひとせまつて参ります。「はふりの庭」は御葬送の場所、御葬送なされつつ、「ふしをがむ人の多きを」「うれし」「とぞ思ふ」と絶唱し給ふのである。言の葉の奇しびのいのち、悲しみを歌へば、そこから開ける解脱の境地と云ふのでせうか。「悲しみの歌を作る詩人は、自分の悲しみを、よく見定める人です。悲しいといつてただ泣く人ではない。自分の悲しみに溺れず、負けず、これを見定め、これをはつきりと感じ、これを言葉の姿に整へて見せる人です」「これ（悲しみの歌）を読んで感動する人は、まるで自分の悲しみを歌つて貰つたやうな気持ちになるでせう。……悲しみの安らかな、静かな姿を感じるでせう。そして詩人は、どういふ風に悲しみに打ち勝つかを合点するでせう」と云ふ小林秀雄——『美を求める心』——の言葉を思ひ出さしめられます。二首目もやはり浅間の山から送られた草木をお詠みになつて居ります。三首目「かた白草」はハンゲシヨウの別称、茎の上部に表面だけの白い葉があらはれるドクダミ



科の多年草、母宮から送られた草木を見て、涙新たに母宮の御心を思ひ給ふと拝するのです。以下御歌のみ記します。

母宮をおもふ（二十七年）

母宮のめでてみましし薯烟いもぼたけことしの夏はいかにかあるらむ

あつき日にこもりてふとも母宮のそのの畑をおもひうかべつ

折にふれて（二十八年）

冬すぎで菊桜さく春になれど母のすがたの見えぬかなしさ

昭和十八年御軍みいくさに召されしとき海軍施設部にて駕がしの浦

貯木場工事に従軍せしことあり。ホテルに帰りて

第二十一回「合宿教室」八佐世保V詠草（昭・五一・八月）

友どちとひるまめぐりし九十九島ホテルの窓ゆみはるかすかも

船着場みるがうちにもうかびくるいにしへあまた丸太浮びし

いにしへのひたに思へて見おぼえの岸壁広場ひたになつかし

浦めぐりしつつも心いにしへを思ひくさぐさ思ひつきずも

昔みし家は変れど見おぼえの山の姿よああなつかしき

再びもみはるかすかも夕なづむ夏日のてれる九十九島を

まさ目にて今一度と思ひ居し貯木場跡今日見つるかも

新年発表の御製・御歌を拝誦して  
『国民同胞』(昭・五二・一月号)

元日の新聞に発表された御製・御歌の全部を載せてゐるのは北日本新聞・富山新聞・サンケイ新聞東京版等と『国民同胞』には昨年記してあるが、小生の住む地区の中国新聞・山陰中央新聞にも同様全部載つてゐるのは有難い。多分地方紙では他にもあると思ふ。

高萩の宿にて

古くよりつたはる浅川のささらの舞音にあはせてはげしくをどる

高萩たかはぎは茨城県高萩市(日立市の北約一〇キロ)、「浅川のささらの舞」は、茨城県大子だいご

町浅川の熊野神社に伝はる能の神社獅子舞で三頭の獅子が、笛、太鼓に合せて踊る舞、

「ささら」は田楽の楽器の一種で、一尺位の竹を細かく割つて束ねたものを打つて音を出すものであるが、この舞とは関係ない（茨城県観光課調）。大子と高萩は約三〇キロ離れてゐるが、恐らく大子町の有志が高萩まで出向いて御覧に入れたものと思はれる。御製を再読、再々読すれば音に合わせて踊る三頭の獅子が目に見える様だ。それもだんだん踊つてゐるうちに、踊る者も、笛、太鼓をならす者も熱狂して佳境に入つたのではなからうか。御覧になる陛下もそれにつれて御感を深めてゆかれるのか、と拝察される。最高の「音」を出し無我で「はげしく」踊つたのだらう。

「楽に合わせて」、「節に合わせて」ではない御表現が、感ぜられたままに表現されてゐる。「天上の極楽」「日本の歓喜」とはこの瞬間であらう。よつて「つたはる浅川の」九字、「ささらの舞」六字と字余りになつたと拝誦するのである。五九六の前句の字余りを「はげしくをどる」でしつかりと統一してをられる。

「古くより」と親から子へ、子から孫へと伝へられて来たささらの舞を御嘉賞になるのである。この舞はまた子孫に永遠に伝へられることであらう。

KDD（国際電電）茨城衛星通信所

### 新しき衛星通信のかずかずの施設をまもる人をしおもふ

この御歌は第一首と共に昭和五十一年五月下旬に茨城県での植樹祭に御出ましの折での御作と拝するのである。この通信所は高萩市と大子町にまたがる、四万五千坪の広大なる土地に、さまざまの施設があり、職員はわづか六十名で処理してゐるとのことである。世界最新最高の通信技術で、太平洋上に静止する人工衛星（地球の自転と同じ速度で回つてゐる衛星であるから、静止したことになる）を中継として電波を送受信し、主として国際電話を扱ひ、其他テレビ、テレックス等も送る。実験電波を送つてゐるとき、たまたまケネディ大統領暗殺の模様を受像したのは有名である。太平洋岸に面する全ての国々、北南米大陸の国々、また中国、フィリピン、其他東南アジア諸国からの国際電話全ての中継衛星である。世界の出来事を一瞬にして伝へ、直接の肉声で悲喜を伝へる人工衛星である。神業とも云ふべきものである。

御製はここを訪れられたときの、新らしき技術と、ここにこれを駆使して仕事をする人々の労苦を御思ひになつて御詠みになつたものと拝する。「新しき」と言ふ御表現では、特に

原研東海研究所にて（昭和四十九年）

新しき研究所にてなしとげよ世のわざはひをすくはむ業を

の御製を思ひ出すのである。「なしとげよ」と仰せらるる至上命令、身を粉にしても報ずべき至難の業を全国民一体となりて、御応へすべきと思はるるのである。

このゆふべ南伊豆にて大雨のふるとしききてうれひはふかし

この御製には御題はついてゐない。多分七月十日から十一日夜にかけて、南伊豆を襲つた風水害のことをお詠みになつたものと拝する。新聞の報ずるところでは、雨量五〇〇ミリ、各地に山崩れを生じ、交通は寸断、山津波に家屋は埋没、死者九、行方不明六、家屋浸水約七千三百棟、崖崩れ二百二十一カ所とある。大奥に居られつつ、ニュースを聞かれつつ、御心痛、思ふだに恐れ多い極みである。陛下は毎年毎年各県にお出かけになり、山に植樹されるのも、風水害の災難から国民を防がうとの御悲願からであるのは、その折にふれて御発表になる植樹祭の御歌でも拝するところである。この御製を拝した南伊豆の人達の喜びを思ふものである。陛下は自分達を忘れて居られないのだと思ふとき、復興の無限の力が湧いて来る。まことに「よろこびもかなし

みも民と共にして」(昭和四十五年御製「七十歳になりて」)である。

水害(昭和二十八年)

嵐ふきてみのらぬ稲穂あはれにて秋の田見ればうれひ、深しも  
を合せ拝誦するのである。

佐賀国体 二首

ことそぎて秋の国体はひらかれぬ人々はつどふ佐賀の広場に  
ゆく秋ををしみつつけふは若人のハンドボールを神埼に見つ

一首目「ことそぎて」と云ふ言葉、「事殺ぎ、言殺ぎ」(物事や言葉を)簡略にする  
とある。贅(ぜい)を排した佐賀国体、ケチケチ国体などといはれた。

「ハトも風船もない開会式、地味でも県民は満足」(毎日新聞佐賀版)。「ことそぎて」  
とおつしやられた心の素直さ、簡潔なご表現に心打たれます。

「ことそぎて力ある古の道よめざめよ」(三井甲之、「祖国礼拝」の『ことそぎて』の言  
葉の語感!)

右の新年発表の御製を知らせて下さった東京の島田好衛氏(元共同通信記者)は拝読

した感激を以上の如く綴つて来ました。

明治天皇御製

家（明治三十八年）

ことそぎし昔の手ぶりわするなよ身のほどほどに家づくりして

旅宿（明治四十年）

事そぎてあればある世と思ひけり旅のやかたに日数かさねて

「ことそぎて」は言葉で表現出来ない。感ずるより仕方がない。浮華放縦、輕佻詭激の反対で質実剛健とでも言ふのであらうか。大正十二年十一月十日御発布の「国民精神作興ニ関スル詔書」を思ひ出す。この世相と考へ合せてみて。

佐賀の広場に全国から集まつた役員、選手の開会式の様がしのばれる御歌である。

「ひらかれぬ人々はつどふ」に躍動する様がしのばれる。

第二首目「ゆく秋ををしみつ」の、つつ、とたたみかける様な御言葉、「をしみつつ」との御表現は発表されたものでは始めてと拝する。「秋ふけて」「ゆく秋の」「秋晴れの」とその秋の国体での感じをそのままお詠みになる。多分佐賀平野の燃ゆる様

な真紅の櫨はせの紅葉を賞でたまひつつ、若人のハンドボールを神埼（佐賀市北東八キロの町）にて御覧になつた御感懐であらう。それにしても今年御発表の御製では二句目の字余りに感づかしめらるる。「秋の国体は」八字、「をしみつつけふは」八字、第一首五八五八七、第二首目五八五七七である。「国体は」の「は」「人々は」の「は」に具體的正確に表現遊ばさるる御人格がしのばれる。

佐賀の宿にて

朝晴の楠の木の間をうちつれて二羽のかささぎとびすぎにけり

「うちつれて」「二羽のかささぎ」につねに御同伴で御出かけになる陛下と皇后陛下の御姿が思ひ浮んでくる。宿は「ホテル、ニューオオタニ佐賀」で樹齡數百年の楠の大木が茂るお濠端に面しての御部屋からの御眺めと拝する。

佐賀の末次祐司氏（佐賀東高校教諭）に電話で当日の模様を聞いたのであるが、小生何気なく拝誦した「朝晴れ」の御言葉、前日來のはげしい雨が、当日はきれいに晴れたとのこと、国体日和と当事者では合言葉になつてゐるらしい。常に陛下の御幸されるところ晴となるらしい。小生も昭和四十六年三瓶山（島根県）の植樹祭に奉仕した



をり、前日迄の雨で当日を憂慮したのであるが、当日起きてみると快晴で、「大君は神にしませば雨雲は遠そきのきてつかへまつるも」と拙詠したこと、またその不可思議を思ひ出す。

「かささぎ」は胸、腹、肩は白、他は黒色。尾長、羽根長各々二十種位の鳥で佐賀ではカチガラスと称し天然記念物として、また幸の鳥として大切にされてゐる。陛下もこの鳥を御好きである。

佐賀市附近のかささぎ 鵲（昭和三十六年）

のどかなる筑紫路ゆけば小山田にさちをつたふる鵲の飛ぶ

晴れ渡つた朝の秋のみ空、亭々と茂る老楠の深緑の木の葉は朝日に輝いてゐる。それを御覧になりながら、「天気になって良かったなあ」と人々と共に御喜びになつてゐると、楠の木の間を、いかにも仲良ささうに、うちつれて白黒のかささぎが飛んで行つた。その得難い一瞬を見事に御詠みになつてゐる。

夕餉をへ辞書をひきつつ子らとともにしらべものすればたのしくもあるか

夕食後の天皇御一家御団らんのおさまを「しらべものすればたのしくもあるか」と仰せられ、四句と五句を八字八字で力強く結ばれる。たのしかりけりではない。「たのしくもあるか」との仰せを心を集中して拝すべきである。私は人の楽しみを御示しになつたと目が開かれる思ひがした。

ゲーテ「宝掘り男」 竹山道雄訳

これ奴、眞実に生きる氣力を飲めい

掘つても何も出ては来ん

昼は働き、夜はまどひ団樂

六日は流す酸い汗に、たのしい祭りの休みの日

今後はこの語を祈念せい!!

が思ひ出される。

「子ら」は皇太子、常陸宮さま、辞書とは「字引」ではなく、生物か植物の辞典と拝察するのである。

心して子らと共にたのしむ家庭を築かねばと思ふものである。

皇后御歌

大子の宿にて

ひさびさにみやこはなれたる宿の宵蛙の声に心やすらぐ

陛下と共に植樹祭にお出ましの折の御歌である。みやこを離れられ緊張のとけたひととき、のどかな蛙の声を御賞で給ふのである。拝誦する我等も心やすらぐ思ひのする御歌である。

那須にて

木洩日こもればの流れにひかる紅葉谷はるぜみのこゑ遠くきこゆる

めづらしき草をたをりてみつくゑにかざれば辞書にてをしへたまへり

一首目は陛下と御一緒の植物採集散策の途次の御作か、または皇后様は絵をよくされるので写生の時の御作かと拝するのである。女性らしい、繊細な美しい風景の御表現である。「流れにひかる」てふ言葉よ。

二首目「みつくゑ」てふ美しいお言葉、陛下の七首目の御製と共に辞書と云ふ言葉をお使ひになつてゐる。陛下の何事をも正確に御研究になる学問の御態度を知らしめ

らるる御歌である。(註、文中の圈点は筆者が付けたものです)

御製を拝誦して

第二十二回「合宿教室」八雲仙V詠草(昭・五二・八)

今上天皇御製 「福岡県大牟田」(昭和二十四年)

海の底わたのつらきにたへて炭ほるといそしむ人ぞたふとかりける

海底に働く人らにみ心をそそぎたまふも有難きかな

阿蘇登山

第二十三回「合宿教室」八阿蘇V詠草(昭・五三・八)

吾子どこに登りをるらむうつしゑを共にとらむとかがせどみえず

合宿終り一人部屋あて

合宿の若きら去りし旅宿の静けさやぶりひぐらしのなく

霧島神宮に詣でて

第二十四回「合宿教室」八霧島V詠草(昭・五四・八)

みどりこき木立にはえて御鳥居の朱塗しよぬりの色の目にはしむかも  
ともどちと大き杉立つ参り路を玉砂利ふみてあゆみゆくかも

思はぬに昇殿許され大前に近く拝するかしこかりけり

大前のみ旗み盾に金色の菊の紋章光り輝く

遠々し神代の昔高千穂あもに天降りましけむ神ぞかしこき

夕なづむ帰り路にして桜島開聞岳見つバスのなかより

長内俊平兄の和歌全体批評をききて

紹介を受けし君はも落着きて壇上さしてのぼりゆきけり

心もち高ぶりをるか声つよめ顔赤らめて語りはじむるは

己が声後うしろの人に聞ゆかと友の名よびていらへ求むる

思ひをばととのへをるか友の名を呼びていらへを求むる君は

「くやし」てふことばをあげてその思ひ大切なりとうつたふるかも

閉したる友の心は通ふらむ君がえらびてよみゆくうたに

班員のうた正します君の言ききつつあれば涙ぐましも

慰霊祭準備のため宿にのこる 第二十五回「合宿教室」八雲仙V詠草（昭・五五・八）

部屋にゐて歌かきつづる窓の外は霧雨ふりて晴ることなし

友らみな山に登ると行きしかどこの霧雨をかこちをるらむ

霧雨の早く晴れよと窓に立ちながむるましたあぢさゐのさく

あぢさゐの花にまじりて赤き花のむらがり咲けり霧にぬれつつ

この雨にいづちゆきけむ明け方になきゐし蟬のこゑもきこえず

御題「音」歌会始の御製、御歌を拝誦して 『国民同胞』（昭・五六・三月号）

天皇陛下のお歌

伊豆の海のどかなりけり貝をとる海人の磯笛の音のきこえて

静岡県下田市の須崎御用邸での御作と拝し奉る。お歌は五七五八七と四句目が字余りになつてゐる。拝誦するうちに「の」の字音が五つあるのに気が付く。の字音の歌

の調べにいいよのどけさを拝誦する者に感ぜしめられる。作意的でなく、自然にお詠みになったものであらうが。

お詠みになった季節は何時であつたかと思ふに「春」であると思はれる。「のどかなる」のみ歌を調べてみると、

若（三十六年）

のどかなる春の光にもえいでてみどりあたらし野辺の若草

佐賀市付近の 鶺鴒（三十六年）

のどかなる筑紫路ゆけば小山田にさちをつたふる鶺鴒の飛ぶ

三十六年の佐賀県長崎県のみ幸は春である。

折にふれて（四十四年）

のどかなる春もなかばの新宮にのみやにいろとりどりのつばき花さく

のどかといふお言葉はいづれも春にお詠みになつてゐる。次に貝は何貝かと云ふに（以下はいづれも下田市漁業会で調べたもの）あはび、さざえとのこと。また海人あまとあるので

男と女か区別がつかぬのであるが女が潜つて貝を取り、男の人は舟上で海女あまの命綱を

持つのださうである。磯笛は百科辞典其他で調べてものつてゐないのであるが、海女が長時間潜つて貝を取り、海上に浮上したとき、息を調へる為に息をするときに自然に発する音。ヒューヒューと聞える。磯笛は磯で海人がのどかに吹く笛と思ひがちであるが、さうではない。また海人と云ふ字であるが、陛下独特のお言葉の様な気がする。例へば田人、若人、老人、あて人等。

前言葉が長くなつたのであるが、次の様に拝誦致しました。長い長い冬が去つて、伊豆の海に春が来た。政務ご多端のご日常も一段落して、須崎御用邸へお出ましになつた。ご研究の海洋植物をご採集にお出かけになり、伊豆の海をお眺めになると、海は日ねもすのたりのたりとしてのどかである。ああ良いなあと大海原と一瞬同体におなりになる。ふと耳をすまされると貝をとる海女の磯笛がのどかに聞えてくる、と云ふことであらうか。

富山の広瀬誠さんは次の様に知らせて下さつた。「伊豆須崎の御用邸と海人の漁場はたぶんかなり離れて居ること存じますが、従つて波の高い日には、海人の磯笛はきこえぬと思ひますが、穏やかに凧いだ日には、遠くからその音が聞えたのではない



かと思ひます。伊豆は東海大地震の危険があるといはれ、住民不安の地。しかしながら憂慮すべき災害もおこらず、のどかな平和な日がつづき、民の生活が常日ごろと変らずつづいて居るのを、喜ばれた大御心が拝察されるやうに思ひます」

小生の伊豆の須崎とのかかり合ひは、かつて昭和五十年下田温泉に一泊の折、須崎御用邸が恋しくてたまらず、早朝宿を抜け出し、タクシーで訪れたことがあります。

その時の連作に（『国民同胞』五十年八月号、本書六六頁参照）

入り海のかなたに見ゆる海にのぞむ建物かしこし御研究所なる

入り海の彼方から、御研究所の建物を遥かに拝した感動は今に忘れません。また、海女については、その時の運転手さんが非常に良い人で、説明してくれましたが「この辺の漁師は良いぞ。女房が潜つてたくさん稼ぐからなあ。そして婆さんこはらみも子孕こはらみの女も潜るぞ。たくましいものだ云々」と聞き、

七十の媼おうなになるもはらみめもぐる須崎の海女はたくまし

と詠みました。去る二月八日上京の途次、高度八千米の上空、ジェット機上から伊豆を眺めました。丁度須崎の辺りは翼の関係で見えませんでした、山々、海岸、入

江、漁港など地凶さながらで、コバルトブルーの海の色、また海岸に打ち寄せる白波、はや伊豆は春であり、心洗はるる思ひにながめました。一時間前に飛び立つた出雲空港は厚い雲に覆はれ、宍道湖はどす黒く濁つてをりましたのに。

皇后陛下のお歌

朝日岳の裾すそにひろがる笹原ささはらをさわさわわたる風の音をきく

栃木県的那須御用邸でのお作と拝する。那須御用邸でのご散策の途次、勿論陛下とご一緒であらうが、朝日岳を仰ぎ見られ、そしてその裾にひろがる笹原をさわさわと風の行くへにしたがつて葉うら返しつつ音をたてて渡りゆく笹原の光景、多分夏であらうから、涼しい風に吹かれ乍らお眺めの姿が目に見える様なお作である。「ささはらをさわさわわたる」のさ音の連続にさはやかさを、又わ音の連続に重厚さを感じる。そして陛下の

雲（三十三年）

高原のをちにそびゆる那須岳に帯にも似たる白雲かかる

を思ひ出さしめられ、風の音については、明治天皇の

月前薄（明治四十年）

はるばると風のゆくへの見ゆるかなすすきが原の秋の夜の月

を、また笹原については柿本人麿の

小竹の葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふ別れ来ぬれば

また実朝の

武士の矢並つくるふ小手の上に霰たばしる那須の篠原

を思ひ出さしめられ有難く拝誦した。

兩陛下は夏は那須、其他の季節は須崎にお出掛けが多い様である。したがってお歌も兩陛下共に、植樹祭、国民体育大会以外のみ歌では、那須、須崎でのお作が多い様に拝する。

皇太子殿下のお歌

うなりゆく車椅子の音きしる音籠球場は声援に満つ

身体障害者の国民体育大会へお臨みの時にお詠みになったものと拝する。身体障害者の国体には必ず殿下妃殿下御同伴でお出掛けの様である。小生残念乍ら身障者のバスケ

ツトボールの試合を見たことがないのであるが、大体の想像はつく。車椅子に乗って試合をするのであるから、大変と思ふ。その光景をまことにありのままにお詠みになり、拝誦する者の眼前に試合の模様がありありと浮ぶみ歌である。身障者に対して、心からの思ひを馳する者にしてはじめて詠めるみ歌である。

球を追つて、パスしながら、それを求めて、車のうなりゆく音、きしる音、競ひ合ふ選手、またそれに一喜一憂する応援者の歓声、声援。入り乱れる選手の車椅子、その音。実にその混雑の光景をよくまとめてお詠みになつたと感嘆する。愛情をそそぎ、自他の二境を存せざる者にしてはじめて詠める歌である。

皇太子妃殿下のお歌

わが君のみ車にそふ秋川の瀬音を清みともなはれゆく

奥多摩にお出ましの時にお詠みになつたものと報ぜられてゐる。「わが君」は勿論皇太子様、「み車にそふ」のそふはわが君にそふと、み車が秋川にそつて走つてゐるのと掛け言葉になつてゐる。一首は次の様に拝誦致しました。皇太子様のお供をしてお車に乗つて奥多摩にやつて来た。そして川にそつて川をながめつつその瀬音を聞き

つつゆく。その音はまことに清らかに聞え、また川の流れも清らかである。心が洗はれる様な思ひがする。

まことに一幅の絵を見る様な美しい、やさしい心のこもつたみ歌である。そして背の君、皇太子様を心からお思ひになつてゐる事をしみじみ感ずるみ歌である。

浩宮殿下のお歌

懸緒断つ音高らかに響きたり二十歳の門出我が前にあり

一読して、全身びりびりつと緊張を感じしめられるみ歌である。昨年二月成年皇族となられた、成年式での冠の懸緒を切る音を詠まれたものである。それは陛下の次のみ歌に対するお応へであり、成年になられたご決意をお詠みになつたものと有難く拝誦するのである。

成人式（五十五年）

初春におとなとなる浩宮のたちまさりゆくおひたちいのる

「たちまさりゆく」とお示しになり、「おひたちのる」とご祈念になるのである。「たちまさりゆく」のみ言葉の高く強い調よ、又ご慈愛に満ちたみ言葉よ。（懸緒―

冠かんむりの緒、冠が脱げないやうに、あごの下で結びとめる紙稔紐こよりひも）

古式に則り、束帯をつけられ、最後に冠をつけられ、その懸緒を切つて、成人式に臨まれる服装は完了する。そして神前に進まれるのであらう。「断つ」と云ふ言葉は強い。勿論懸緒を断つ音であらうが、幼な心を断つ、いよいよ一人前の成人になるのだといふ強い強いご決意を感じる。若いスマートな、青年皇子のきりりと引きしまつたみ姿が彷彿とする。

富山の広瀬誠さんは次の様に知らせて下さった。「新年発表の御製には浩宮御成人のことをお詠みになられ、また歌会始には浩宮様が成人式典の折の懸緒断つ音をお詠みになられ、まことにありがたく拝誦しました。実は私の詠進歌は、

凜として缺ひびけり加冠の儀テレビに見つつ涙あふれく

といふ、加冠の儀の折の、皇孫殿下の御冠の懸緒を断つ音を詠じたもので、浩宮様も同じ音を詠ぜられたことを知り、感激にたへませんでした」

はじめて浩宮殿下のお歌を拝し、皇室に伝はる日本文化の源流を思ひ、正しく敷島の道が受け継がれ、国民に民心をお示しになり、我等もみ歌を仰ぐことの喜びを、日

本の民と生まれし喜びを感じるのである。

附記、「歌会始」のみ歌は、昭和五十六年一月十四日、中国新聞（本社広島）紙上に発表されたものに依つた。尚ふりがなは字の下に括弧してあつたが、字の横にふりがなをした。例、海人（あま）を海人<sup>あま</sup>に。

慰霊祭の前に

第二十六回「合宿教室」ハ阿蘇V詠草（昭・五六・八）

今宵はも魂祭る宵晴れてよと祈る心にみ空ながむる

瀬上安正大兄のみたまに捧ぐ

慰霊祭献詠（昭・五六・九・二三）

ことしあらば車を駆りて東の都にのぼると言ひし君はや

夕べ空をみつ

第二十七回「合宿教室」ハ霧島V詠草（昭・五七・八）

夕されば青空みえて入日さしこよひ晴るらしたままつりせむ

三十二班の友らと別れて

来しときの不安消え去り晴れ晴れと喜び語り別れゆくかも

不可思議の縁えんによりてこの班に語り合ひしはかりそめならず

この山を下りておのおのふるさとに帰りゆくなり思ひいだきて

学び舎やに帰りゆくとも相呼ばひ助け合ひつつ学びゆかなむ

朝永清之兄に

第二十八回「合宿教室」へ雲仙V詠草（昭五八・八）

年々の齋庭うちは作りのリーダーの君のみ姿見えずさびしも

みやまひはいかがあるらむ病院ゆかへりましぬとききにしものを

みからだのすこやかになりこむ夏はともにつとめむ齋庭つくりを

今年はも夜空の晴れてたままつりぶじにをへしを上げまつりなむ

班員（女子）を送る

にこやかに笑ひて別れのあいさつに来る乙女子の何ぞはしきも

はじめごろ発言なかりし乙女子のさやかな顔をみればうれしも

来年もまた会ひませうとあいさつを交はしつ手にぎりわかれゆくかも



バスはいま友らをのせて出でてゆくまさきくませよまたあふ日まで

長内俊平兄へ

（昭・五九・二・二三）

福岡でつもる話も語り得ず別れきにしぞ今はくやしけ  
すこやかに生きゐることをお互ひにたしかめ合へばよしと思はむ  
おおと云ひおおと云ひつつあいさつをかはせば通ふ吾等の世界

友へ（長内俊平宛）

（昭・五九・五・一〇）

思はぬに電話のありて君の声きくがまにまに力湧き出づ  
葉桜は風にふかれて牡丹ふかみくさの花さきそめて春さかりなり  
亡うき大人おのみ文をあむと一人してつとむる君のみ姿思ふ

（高木尚一遺文・遺歌集『ひとすぢの信』——昭・五九・一〇・一〇刊——のこと）

あさつては総会にして下関の友も来るぞとはづむ声はも  
くさぐさのなやみあつまるうつつしみをなげ出だしつつ生きてゆかなむ

澤部寿孫兄（在カナダ）より合宿の我等にうたぶみを

いただきて

第二十九回「合宿教室」ハ阿蘇ノ詠草（昭・五九・八）

阿蘇の地に集ひし我等をしぬびましカナダゆたびしこれのうたぶみ  
はるばると大海原を渡り来し電文のうた何ぞうれしき

今日はもよみ空は晴れて大阿蘇のさやかにみゆと君につげなむ

根子岳に巻雲かかり阿蘇盆地稲穂ゆるるを君にみせばや

このつどひしぬびつつみうた送りこし友のこころにこたへざらめや

亡き高木さんの遺稿を編みて

高木尚一遺文・遺歌集『ひとすぢの信』編集後記

なき大人ののこし給ひしふみを編む奇しきえにしの畏かりけり

爽やかな声して道を説きまししみ声うつつによみがへりくる

栄達はただに求めずひたすらに道をただして生きぬきましぬ

赤きもの赤しと言はぬ学匠を批判し給ひしみ文なつかし

のこされしみふみ学びて亡き大人のかなしきいのちうけつぎゆかむ

昭和六十年

福岡の理事会を飛行機の時間の都合で早退、友と別れて飛

行機上より——長内俊平宛

日記（昭・六〇・二・五）

うつりゆく景色をみつつ別れこし友らのかたらひしぬびやまずも  
別るるにわれの体を案じつつみ送りたまひし心かしこし

日毎夜毎いたみし胃痛もこの一日いたみ忘れてすごしつるかも  
友どちと語らふうちに心開けくしびの力わきてくるかも

かく思ひかくしぬびつつ歌かきて機上ゆながむる冬の山はも

筑紫路は小春日なりしがふるさとの空雲たちて八重をなすかも  
出雲とはうましきことばみおやらの伝へたまひしことだま思ふ

夜久正雄さん歌会始に预选の栄をうけられしことを祝ひまつりて

道の師とあふぎまつりて四十年選ばれまししがただにうれしき

君のみ名よばひたまへば立ちあがり最敬礼し給ふをテレビにて見つ

なつかしき君のみ姿大君のみ前にうたのよみあげらるる

み民われ生けるしあるてふさながらに君のみ心しぬびまつるも

長内俊平兄へ

（昭・六〇・七・二七）

合宿は二週間後に迫りけり体調ととのへ行かむと思ふ

合宿に集ふ友らの少しときけどすべなし力足らはず

南の空に湧きこし夏雲をみつつ集ひの日をし思ふも

慰霊祭にて

第三十回「合宿教室」へ阿蘇V詠草（昭・六〇・八）

みおやらのみたままつると祭壇の前に集へば風吹きしきる

ふりあふぐ夜空ま黒に星もなく蛙しきりなく近くの田より

警蹕けいひつの声おごそかにみおやは今つどひますかこれのゆにはに

集ひたる友らと共に拍手かっはでを打ちてをろがむさまみそなはせ

み祭りを終へてみあぐる大空に雲のあはひゆ星のかがやく

病床の小柳陽太郎大兄に

合宿に行けずと一時思ひしに友呼ぶ声に合宿に来し

君のみと思ひをりしに奥様もけがなされしと聞きて驚く

まがごとのうち重なりて日毎夜毎心いためます君ししぬぶも

天神あまつかみの神のしめしとかしこみて心豊かにしたがふほかなし

雄心をふるひ起してすこやかになりまさむ日をひたに祈るも

長内俊平兄に

（昭・五〇・一一・二四）

しばらく失礼して心配をかけましたが、元気で居ります。その間色々なことがありましたが、貴兄もお元気と思ひます。『歌人・今上天皇』に原稿が取上げられ、お互ひに慶びに耐へません。唯今、出雲神在月、全国の神様が集つてをられます。そして

宍道湖も毎日西風で荒れる日が多くなつて来ました。

大空に雲たちこめて宍道湖を吹く夕風に波の立つかも

みづうみの岸边に生ふる葦原の穂波ゆるるも風に吹かれて

すぐる日に君とみづうみながめつつ大君のみうた誦しまつりし日を思ふかな

月日はも射る矢の如しこの年も残り少なくなりにけるかも

奥様によろしく。

『歌人・今上天皇』へ増補新版Vをいただきて 『国民同胞』（昭・六〇・十二月号）

わが文も掲載されてなりにける『歌人・今上天皇』有難きかな

かけまくもあやにかしこししづの身の文ものりけりこれの刷り文

大君の大御心をしぬびまつりしるしし文を読む恥かしも

同信の友らの文にわが文もならびて載りぬ嬉しからずや

御在位六十年を祝ひまつる有難き年に成りし書ふみはも

大君のみのち長くすこやかに御代しろしめせとひたに祈るも

附・御葬儀における弔辞





## 弔 辞（「島根錨会」会長）

時あたかも、寒風吹きすさび、日本海に怒涛逆巻く嚴寒の今日、青砥副会長の悲報に接し、痛恨のきわみであります。

省りみれば、貴方は、大東亜戦争益々風雲急を告げる昭和十七年十月、桜咲く祖国を守らんと、勇躍学窓より海軍技術見習尉官を志し、難関を見事に突破され、青島チンタオにて、基礎訓練の後、設営中隊長としてトラック島に派遣され、炎熱身を焼く南方の地で、海軍航空基地の建設に日夜奮闘されました。然し戦局我に利あらず、多くの友を失い、終戦の詔勅に涙を流すにいたりました。

戦後は、生れ故郷玉造の地で、温泉旅館「こんや別館」の経営に努力され、その傍ら、戦後日本の復興と平和に尽さんと、旧海軍の同志相集いて昭和二十七年、いち早く「玉湯町錨会」を結成し、会長に推されて、会の発展に努力され、これを原動力として、昭和五十年「島根錨会」の発足の発起人として、献心的に努力されました。以来「島根錨会」の為努力され、第二回玉造大会、第八回大会には、大会委員長として良くその重責を果され、会の発展に寄与されました。また「錨会」の行事として催した呉方面の研修旅行、第五回松江大会には、会長代理として重責を

果された事は、あまねく会員の衆知するところであります。

また貴方は、かねてより、会員が先の大きな戦の貴重な体験を後世までも伝え遺さんとの意慾を燃やされ、会員の手記の編さんを計画し、「島根錨会十周年記念事業」として、昭和五十八年「島根錨会戦記刊行会」発足するや、事務局長として会員の手記の督促に、また、編集の激励にあたり、初期の計画通り、見事に昭和六十年五月二十七日松江大会の日に、『想い出・桜と錨の男たち』の堂々七〇〇頁にも及ぶ手記を発刊し、後世までも残る大遺業を完成させました。

この事は、オール・ネービーにも取り上げられ、「島根錨会」の存在を高く評価され、日本の隅々に存在する旧海軍軍人の共感を呼び起しました。これもひとえに、貴方の日本を愛する情熱と、「錨会」を想う心以外には何もありません。

それと、「こんや別館」の別館完成と相俟って、二つの偉業が完遂された事は、その努力と心労が如何に激しかった事か、想像に余りあります。これと同時に、この心労が引がねになり、貴方は病魔に侵される事となり、入院され、その甲斐あって元気で退院され、養生の傍、旅館の経営に「錨会」の運営に、心をいたして来られました。春が来てやがて迎える「大田大会」には、何時もの元気な顔が見られると会員一同楽しみにして居りましたのに、無情にも今日の悲報に接するとは。

想いを御遺族にはせませす時、孫も抱けて満足であつたらうと、云うものの、余りにも早過ぎて

お慰めの言葉もありません。

在天の靈よ、どうか安らかに眠って下さい。貴方の靈は「錨会」と共にあります。遙か遠き空の彼方より、靖国の友とともに、貴方の御遺族や我々会員の行末を見守って下さい。

貴方が好んだ

「神勅相違なければ神国は亡びず」

をもって、おわりとします。

最後に今一言

「島根錨会」のはじめよりお世話いただき本当にありがとうございます。

昭和六十一年一月二十九日

「島根錨会会長」 千家達彦

## 弔 辞〔玉湯小学校同窓会〕代表)

青砥宏一君 永い間何かとお世話になり寔まことに有難うございました。

昭和の初年、玉湯小学校に入学以来の付き合いですが、思えば永いような短いような歳月でございました。当時より君は、成績も良く模範生で、女生徒達の人気ものであったように記憶しています。

その後、松江中学校、徳島高等工業へ進まれ、やがて海軍へ入隊されました。

戦後復員されるや、温泉旅館こんや別館を経営する傍ら、玉湯町議会議員を始め幾多の要職を歴任せられました。昭和四十六年三月、社会福祉法人・厚生会の設立に尽力、その後、理事長として活躍せられて参りました。

亦、昭和五十八年玉造L・C（ライオンズクラブ）の第二代会長として頑張って頂いたのも、哀しい思い出となつてしまいました。

また君は、玉湯町錨いかり会の会長でもありました。そして春秋の慰霊祭には必ず出席して、得意の和歌などで遺族の方々を慰め、且つ励まして参られた事など思い出されます。

吾々は毎年同窓会を行います、その宿は、殆ど君が経営される「こんや別館」でお世話にな

って参りました。宴が進み興が乗ると、よく君のオハコの阿波おどりが出たものです。手振り身振りがよく、大騒ぎをした事など哀しく思い出されませす。

君は、一見無愛想で、とつづきの悪いような面もありましたが、仲々の人情家で、よく勉強もされ真面目な人柄でした。物事に拘らないあの飄々とした風貌、亦一人惜しい友達を送る事となつてしまいました。

思えば昨年五月、君が大手術の傷も癒え、無事退院された折下さった歌に

はからざるえも云はれざるいたつきを乗り越へて来ぬ神のまにまに

ひとな一度は失せにし生命再びを生きかへりきぬ有り難きかな

ひんがし東にさし昇りくる朝日子を日毎おろかむ何の幸ぞや

とありました。

君は、生きる事の喜びを感謝し、神を信じ、一途に快復を念じ努力して参られました。そして吾々も、一日も早く元氣になられ、楽しくお付き合う事を信じ願っていたしましたのに……

昨日君の訃報に接し、言葉もなく、唯々痛恨の至りであり、今更乍ら無常の感を深くするものであります。

奥様始め御家族の皆様の中如何ばかりかと御慰めの言葉もありません。謹んで哀悼の意を表するものであります。

然し乍ら、君には立派な御子息が居られます。必ずや君の遺志を継いで頑張って行かれる事と存じます。

安らかに眠って下さい。さようなら。

梅薫る春をも待たで逝き給ふ君飄々の面影かなし

昭和六十一年一月二十九日

玉湯小学校 同窓会代表 新宮 承紀

「あとがき」に代へて——青砥宏一さんを偲びつつ——

社団法人国民文化研究会・常務理事 長内俊平 記

青砥宏一さんがこの世を去られてから既に一年に垂なんんとし、今も世にあらばとの嘆きは絶えないが、その遺された歌を一書に編んで、一周忌に間に合せて御霊のみ前に捧げうることは、我らのせめてもの青砥兄を偲ぶ作業であつた。

○

青砥兄のことを思へば、直ちに同兄が生前、多忙な温泉旅館の主人でありながら、戦前からの深い付き合いのあつた全国の同信の友らの詠草を集め、ただ独りでそれを手書きの騰写刷りにして全国の友らに送つてくれてゐたあの『青砥通信』が思ひ浮ぶ。同信の友らの心を「しきしまの道」によつて結び合せてきた『青砥通信』が同君のいのちそのものであつた故であらうが、それを随時プリントして発送するに至つた動機、目的を同兄は次の如く記してゐる。

——この「すりぶみ」を二回諸大兄にお送りしたところ「つぎのすりぶみを待つ」と言ふ友からの便りあり、また次々と来る友からの便りよむことのうれしく「一人居て喜ばば二人と思

へ、二人居て喜ばば三人と思へ、そのうちの一人は親鸞なり」と言ふ同信同行の有難さをひしひしと感じてをります。子規の「雑誌を己の生命と思ふ程の人が一人なくてはなりません。なぐさみに出す雑誌ならば、盛にならうと衰へようと構はぬとはいふものの、とかく一度生れた子は成るべく無病息災であるのが親の望む所でありませう。云々」をよみ、この『スリブミ』は己の生命と思ふ様になりました。

友から返事が来ぬ様になれば、私の生命もなきものと思ひ、つづく限り続けようと決心致しました。

今を去る三十年前の学生時代、今は亡き寺尾博之大兄（编者註・国文研叢書『いのちささげて』参照）が、旧制高知高校生のころ、「生命は交流なり」と言ひ、しげく便りを呉れたことが思ひ出されます——（昭和四十七年十月十八日、『青砥通信』第三号）

と記してゐる。しかし目的意識は、深く魂の内奥に存してをるべきであつて、それが眼にちらつく様であつては、永続もせず、友らの心を深く長く結びつける力もたなかつたであらう。

同兄は昭和五十六年、「還暦の年も半ばをすぎて」と題する連作のなかで

十あまり九つるとき聖王のみ教へにふれて行手定まる

と詠んでをられる如く、十九歳にして志を立て、それを生涯つらぬき通されたのである。その



志の一つのあらはれが『青砥通信』であつたと思はれる。青砥兄は、生涯、旅館の主人といふ在俗の身を以つて、聖徳太子のみ教へを友らと共に慕ひ、それをいまの世の生活に具現せんとする道を歩み続けられたのである。そのいのちの軌跡が、形となつて残されたのが『青砥通信』であつた。

○  
本書に取り上げた『青砥通信』は、本人の意図したところではないであらうが、巧まずして、『国民文化研究会』の「外史」の役割りを果してゐたのではあるまいか。

昭和三十一年から今日まで三十一回も続いてきた国民文化研究会主催の「合宿教室」は、その合宿記録として、『日本への回帰』『合宿教室感想文集』『各地方合宿の合宿記録』等があり、それが「国民文化研究会」の正史とすれば、中国・九州地方を中心として全国の同信の友らが、「もろともにたすけかはしてむつびあつた」世界を『青砥通信』は記録に止めてゐたのである。青砥兄に依つて編まれた『青砥通信』は、われらの生の記録として世にまたなきものになつたと共に、後に続く人達への貴重な精神的遺産となつたことを、ここにつつしんで青砥兄のみたまに告げさせていただきたい。

「あとがき」に代へて

また『青砥通信』は「親を思ひ子を慈しむ」家庭の恩愛の情の尊さを、我々に無言のうちに表示してくれてゐる、と気づかされる。青砥兄の御母堂に対する孝養は、同兄を知る者の敬服してやまなかつたところである。同兄はどんなに夜遅くなることがあつても、母上の起床の時間に合せて母上を訪ね、姿勢を正して朝の挨拶をし、朝食を共にされたと聞く。

また奥様、お子達、お孫さん方に対する愛情は、本書の歌々（詠進歌始末記）10頁、「八雲たつ出雲八重垣の舟」15頁、「初孫晴久誕生」37頁、「孫三人来る」118頁、「三女孝子の結婚に」127頁、「父のふところ」178頁、「妻を思ひて」189頁、「息子誠一の成人式を祝ふ」202頁、「長女道子結婚式に出発の朝」203頁等）に偲ばれるところであるが、その慈愛心はまた五十数名の従業員にも及び、青砥兄を親とも慕ひ、「社長が居られたから勤めて参りました」と告白された従業員の方々の言葉にも、また、その勤続年数が極めて長い事実にも証明されてゐると言へよう。青砥兄は、「自他の二境を分たぬ」との聖徳太子のみ教へを、家庭の芳縁に、そして従業員とのつき合ひのなかに、体现されてゐたのである。

○

青砥兄は、海軍の戦友達の集ひである「錨会」<sup>いかり</sup>に出席すると、必ずと言つていい位に「神勅相違なければ日本は未だ亡びず」との松陰先生のお言葉を、誰彼問はず説いて倦まなかつたといふ。

青砥兄のその言葉が戦后うちひしがれた戦友達の心を如何に奮ひ起し、生きる希望を与へたことになつたかは、「錨会」の戦友の方が、青砥兄への弔詞のなかで、そのことを万感の思ひをこめて述べられたことで知ることが出来た。

同信の友らとの心の交流の体験が、同じ日本人として生れた同胞に通ぜぬ筈はない、との信となつて、接する人達に祖国への信を説いて止まなかつた兄の生活態度は、かくのごとくであつたのである。

○  
青砥兄の友情の深さは、本書がすべてを物語つてくれてゐるので付言は無用であるが、若い友らに対する思ひやりの深さは、また格別であつた。若い友らが「青砥先生!! 青砥先生!!」と慕つてゐた姿は、いまなほ眼に見える様であるが、青砥兄を慕ふ女子学生班の人たちが、一針一針編み寄つて毛糸の「ひざかけ」を送つたときに詠まれた歌々(本書59頁)。また、たつた一度会つただだだけの男子学生にも『青砥通信』を送り、送られた学生が「ただ一度お目にかかりし先生のあたかき心有難きかな」(昭和四十八年一月、九州歯科大 小田耕平君詠)とよんだ歌にも知らるるところである。

「あとがき」に代へて

○

我々は青砥兄との歌のやりとりによつてまごころを磨くといふか、かくれてゐるまごころに出会ふといふか、曇り切つてゐる心に光が当たるといふか、さういふ得がたい日々を送ることが出来た。

「たすけ交す」といふことは、ひとり困難な状況にある友を励ますといふだけでなく、ともすればくもらむとするまこと心呼びさまし合ふ、といふことではないだらうか。

それは信ずる友への呼びかけである。その道を、青砥兄は『青砥通信』を出すことによつて、私達に呼びかけ続けてくれたのであつた。

○

青砥兄の残された遺歌、遺文は『青砥通信』を中心として膨大な数にのぼる。それを取捨して二百頁五十程度にまとめるだけでも容易な業でない。それを敢へて青砥兄の歌のみにとどめず同信の友六十名に及ぶ方々の歌もともに載せることとしたのは、丁度仲よく遊んでゐる仲間の子供達のなかから、無理に青砥兄の手を引いて一人だけ連れ出すに似て、それは決して青砥兄のよるこぶところではあるまい。いなそのつながりのなかに於てこそ青砥兄は生きつづけてをられる、と信じたからである。

また頁数の関係で同兄の若い時代の作品は、殆んど割愛せざるを得なかつたが、学生時代の相

貌を偲ばせる和歌と記事があるので、ここにその若干を書き留めておくことにする。和歌は昭和十六年六月、同兄が二十一歳の折、私宛に送られ、仙台の東北正大寮旬報『をたけび』に載つたものである。

北の国ゆ戦のみふみ受取れば身内ゆるがされ振ひ立たされぬ

「をたけび」てふ誠心こめし御文見る度に幾度振ひたたされしか

文としては、戦死された近藤正人先輩（「一高昭信会」出身で当時、精神科学研究所所員）が、昭和十六年三月、関西地方の学生運動を指導して帰られたあと、東京正大寮旬報『たたかひ』に載せた報告書簡にある次の一節である。（戦中学徒、遺詠遺文抄―『統いのちささげて』三二〇頁に所載）

「去る八月下旬高知合宿を終へて徳島にて共に黒上先生の墓前に額づき、駅頭に分れし青砥兄の決死の目ざしは、今も僕の胸に刻みつけられてをるが、兄がその目ざしにあふれし死闘の決意を巖をもきり通す力たらしめて、学内改革に直進し来れる歴史を思ふ時、大阪の友らよ、兄らも必ず一切に堪ふる力を今日より発現してくれる事を確信し祈念する」

僅かの歌、そして近藤氏の簡潔な報告文が、青砥兄の青春の純烈の情意と、生涯を貫く志の息吹きを伝えてくれる思ひがするのである。

本書は『青砥通信』を中心に、国民文化研究会発行の『国民同胞』『日本への回帰』（全国学生、青年合宿教室記録）『合宿教室感想文集』『地方合宿記録』等の諸誌のほか、青砥兄の奥様・智子夫人よりお借りした青砥兄の『日記』九冊のなかから選ばせて戴いた。

○  
年代別分類は、原則として所載誌の発行日によらせていただいたが、なほ作成年月日の明らかなもの（ ）を以つて表示した。

『青砥通信』の号数は各年単位とし、それ以上の詳細については省略させていただいた。ちなみに『青砥通信』第一号は、昭和四十七年八月十四日（兄、五十二歳）に、最終号となつた第七十九号は逝去される三カ月前の昭和六十年十月二十六日（兄、六十五歳）に発行された。毎号青砥兄の自筆騰写刷（のちゼロックス）で、全国の友ら約百五十名に送られてゐた。

○  
本書の編集に当つては、小田村理事長を始め多くの同信の方々のお力添へを戴いたが、就中、

編集全般に關し、若い時代から青砥兄が、「しきしまの道」の先輩として慕つてをられた、亜細亜大学名誉教授、同学園理事の夜久正雄氏に懇篤な御指導を戴くと共に、書名を、青砥兄の苗字が万葉時代に尊重された青瑪瑠と並ぶ青色の翡翠を詠じた万葉集（卷十三）

「淳<sup>ぬ</sup>名川の底なる玉 求めて得し玉かも 拾<sup>ひ</sup>ひて得し玉かも 惜<sup>あたら</sup>しき君が 老ゆらく惜しも」の歌を連想させるので、『青砥通信』の名をそのままとつて、『青砥通信鈔』としては、との御提言を戴くと共に、題字の揮毫をして戴いたことは、青砥兄に対する何にもまさる供養となつたものと信じ深く謝するものである。

また割付け校正には、講談社勤務の磯貝保博、藤井貢の両会員にひとかたならぬお世話になつた。ここに記して深く感謝の意を表する次第である。

また元福岡教育大教授山田輝彦氏に、編集上の貴重な示唆を戴き、戦前の資料収集には元法政大学人事部長香川亮二氏の御助力を戴いたことを併せて深く謝す次第である。

○

最後に簡単に青砥宏一氏の履歴を記して置きたい。

大正十年四月二十五日、父・榮 母・千代の長男として島根県玉湯町玉造に生る。

昭和十四年三月、島根県立松江中学（旧制）を卒業後、徳島高等工業学校（旧制）土木工学科へ入学。在学中（昭和十五年）信州菅平で行はれた日本学生協会（国民文化研究会の前身）主催の全国学生合同合宿に参加、以後昭和十六年（比叡山）、昭和十七年（西教寺）とそれぞれの合宿に参加。

昭和十七年十月、学徒として出陣、先づ、遼東半島の青島ちんたうで根拠地隊（桑原部隊）で三カ月間、海軍士官になるための教育を受け（この間、本書「はしがき」執筆の国文研理事長小田村氏の令弟、小田村泰彦氏と一緒であった）、後、佐世保に移り、二二七設営隊長としてトラック島等に転戦、最終は海軍技術大尉、正七位。

昭和二十一年十二月、九死に一生を得て帰還。帰還後、約一年間、松江市の島根県庁土木部に、あとしばらく松江工業高校教諭として勤務のあと、御生家の玉造温泉「こんや旅館」の経営を継承され、社長として尽瘁された。更に社業の発展を目指し「こんや別館」の新設を果たし、今日の地盤を築き上げた。

その間、昭和三十一年には、「国民文化研究会」の設立に参じ、以後同会主催の「全国学生青年合宿教室」及び「地方別合宿」に和歌の創作指導を中心に学生、青年達の教導に尽力。昭和三十九年に同会が社団法人の認可を得



ると共に、同会理事に就任、この間昭和四十七年八月から同信諸友との短歌通信紙『青砥通信』を、死去直前に至るまで刊行。

昭和三十年から、玉湯町町議会議員、玉湯町消防団長、玉造厚生会理事長、島根県旅館環境衛生同業組合副理事長、島根鑑会（元海軍軍人の親睦団体）副会長等を歴任。

「島根鑑会十周年記念事業」として企画された「島根鑑会戦記刊行会」の事務局長として、昭和六十年五月二十七日、松江大会において、『想い出・桜と錨の男たち』（七百頁）を完成発刊。

昭和六十年二月、胃の大半を切除する大手術をうけ、一時小康を得たが、昭和六十一年一月六日再び入院、同月二十八日逝去。享年（数へ年）六十六歳。

戒名は 天籟院大道宏潤居士

菩提寺は故郷玉造、清巖寺。墓所は同寺境内にあり。

御遺族は、母堂千代様、夫人智子様、長男誠一様、長女道子様、次女信子様、三女孝子様、

青砥宏一氏絶筆の歌

我が部屋はま東むきて七階に呼べば応へむ東の友は

まがの日ははた幸月さいつきか知らねども自然随順かしこみまつらむ

をちこちの友ゆみうたのかずかずをたびてしあれどこたへむすべなし

筆をとるに力入りこずもそとこのにじり字をあはれみたまへ

この歌が、命盡きる寸前まで、「しきしまの道」を履ふみつづけた青砥兄のいのちの形見となつたのである。死の前々日の作であり、それが書きつけられてゐたのは、私がお送りしたお見舞の手紙の裏であつた。

最後におほけなれど

明治天皇御製

落花（明治四十年）

人みなの惜む心はしりながらかぎりある世と花のちるらむ

「あとがき」に代へて

を青砥宏一兄のみ霊のみ前に拝誦しまつりつつ筆を擱くこととし、合せて編集委員として御一緒に作業をした「国民文化研究会」副理事長の宝辺正久・小柳陽太郎両氏に心から御礼を申し上げる次第である。

昭和六十二年一月二十日 一、〇〇〇部 頒価一、五〇〇円

送料三〇〇円

# 『青砥通信鈔』

——青砥宏一 遺歌集——

編者 宝辺正久・小柳陽太郎・

長内俊平

発行人 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七一〇一八(柳瀬ビル)

電話〇三―五七二―五二六〇七

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一四



